

---

# 無能力な先生

気まぐれ執筆家

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無能能力な先生

### 【Zコード】

Z5220V

### 【作者名】

気まぐれ執筆家

### 【あらすじ】

国同士で長年戦争があった。  
しかしそれも数年前の話。

今では両国とも友好関係を築こうとして、 国の内部も平穏に満ちていた。  
そんな中、 戦争で戦つた傭兵は何を思つて戦い、 結局どうなつたのか。

現在作品も執筆中です。が、こっちも進めてこいつかと思つてます。

## プロローグ

とある紛争地帯。

何時までも戦争が絶えなく、人と人が素手で刃物で銃で戦車で戦闘機で争い合う日々。

少年は、傭兵として雇われ、殺し続けた。

人を殺さなかつた日は無かつた。

男も女も幼子も老人も関係なく、ただ殺し続けた。

それが、自分の信じた平和に繋がると信じて。

少年は、殺し続けた。

自分の手から血が消える事はなかつた。

戦争に関係した人種の、あらゆる血が少年に浴びせ続けられた。

それでも、少年は殺し、戦い続けた。

それが、自分の信じた日常に繋がると信じて。

それが数年続き、とある日。

「停戦……？」

突然の出来事だった。

自分が雇われた部隊が、国が勝つた訳でもなく、負けた訳でもなく。

理由は、争っていた国の指導者達の勝手な都合で。

戦争の勝ち負けに関係なく、戦争は終わつた。

「じゃあ……俺のした事は……今までしてきた事は……価値があったのか？」

周囲にいる人間達。

毎日の食事にも困り、やせ細つていいく人間達。

彼らの日常を守ろうとして、戦争に、殺し合いに自ら身を投じた。だが、その結果。

戦争に直接関わつた彼らの都合に関係なく、戦争は終わつてしまつた。

指導者達の、「戦争は終わつた。平和になった」という美辞麗句。しかし、その結果は実績には結びつかなかつた。相変わらず周囲の人間達は飢え、争いが絶えず、一切れのパンですら取り合いになる、そんな毎日。

「この戦争に勝てば、この戦争が終われば、俺の周りは平和になる、俺の周りは日常に戻ると信じて戦つた」

「けど、いつも通りだ。人はまだ争い、戦い続ける」

「俺は、一体、何のために、人を殺し、戦つてきたんだ？今までやつてきた事は、一体なんだつたんだ？」

数年の戦いを経て青年となつた彼は、戦争が終わっても変わらない非日常に、そして無力な自分自身に、絶望した。

そして数年後……。

長い間交戦状態だつたトルバ王国とハルバード共和国は、数年の停戦を経て、共存体制に入りつつあつた。

だが、その中で活躍した一人の傭兵の名は、戦争時に呼ばれた二つ名以外は歴史に刻まれる事もないまま歴史の闇の中に姿を消していった。

## プロローグ（後書き）

処女作といつてはあつませんが、この度執筆文を投稿させていた  
だきました。

正直な話、構想はある程度まで練っていますが、それが文章にでき  
るか否か、その後が続くかどうかが心配ですが、とりあえず書いて  
みます。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 無能力な先生の退屈な授業

氣。

古くから人に使われてきたそれは、万物全てに備わっているとされた。

それは万物が存在するその元となり、それが強ければ強い程、所有する物も比例して強くなつていいく。

それは近代に近づくと共に研究され、その性質や使用方法も人々に理解されつつあった。

例えば性質の変化。

氣を火に変えようとしたら火に、水に変えようとしたら水に、風に変えようとしたら風に、万物に備わるが故に、氣とは所有者自身が望めば、いかなる存在にも変化が可能な存在だった。

「…………と、これが今現在皆さんに知られている氣についてですが……」

教科書を見ながら、黒板に文字を書き連ねていく教師。

生徒はそれを見ながら、黙々と勉学に励む。

そんな中、

「先生」

一人の生徒が手を上げる。

「はい、なんでしょうか」

「氣の強さや性質の変化ですが、個人によって優劣は決まるのですか?」

「そうですね……」

先生はふと考へた後、

「通常、気の強弱には血統が大きく絡んでくると言われています。ごくたまに、何でもない人から気の力が強い人が生まれるという事もありますが」

「ですが、強弱は生まれつきでも、鍛錬次第で強くなる事はありますね。そして」

「性質の変化ですが、これも生まれつき得意不得意があると言われています。例えば、君は水の系統が得意ですね」

「はい」

「そのあなたが気を水に変化させれば、他の使い手よりも強い水の使い手となります。逆に、そのあなたが他の系統の力を使おうとすると、他の人より若干弱い力しか引き出すことしかできません」「また、変化の得意不得意は家系に関わる事があります。この一族は火の系統が得意、とかですね」

「じゃあ……」

その生徒は、一息入れた後、先生を真っ直ぐ見て、

「先生は、何の系統が得意なんですか？」

「……その質問には、答えは否ですね」

その先生は、苦笑しながらも、

「自分には、得意な系統も不得意な系統もありません。あえていうなら、無ですかね」

そう。

この先生、ヴァン・ガルドは、得意な系統がない。  
そう自分で公言しているのだ。

そのせいで、一部の先生や生徒の間では「無能力な先生」と揶揄されていた。

だが、

「ですが、気の方面に関して知識があるという事で、実践方式でなく、勉学で教えている事がボクには多いですね」

と、一息ついた後、

「少し脱線しましたが、授業を続けますね。そして氣といつのは各地方によっても呼び方が変わり……」  
そして再びヴァンによる授業が続く。

「あー、つまんなかったー」

今日最後の授業が終わり、ヴァンが出て行った後。  
大きく伸びをしながら、質問をした生徒、フラン・クラーはため息をついた。

「そんな事言わないの。教科書見ながらの歴史の授業も勉強の一つでしょ？」

「だけじゃー」

フランは、頬を膨らませながら、自分の親友であるサラ・サーヴェントに文句を言つ。

「普通、どんな先生でも、生徒に要望されたら自分の系統で実践するでしょ？けど、あの先生はそれがないんだもん」

「まあ、ちょっと退屈だけどね」

彼女らの言つ通り、普段は授業の合間に先生による実践が行われる事が多い。

だが、ヴァンの授業にはそれがない。

彼自身が、「自分は得意な系統が無いので、そういう実践はできないんですね」と言い、実践を全く行わないのだ。

実践でもあれば退屈と言えない授業ができるいいのだが……。

「やつぱりつまらないよ、あんな教科書を読んで覚えるだけの授業。」  
「つ、氣を使う授業じゃないとね」

「背格好や性格はいいんだけどねー」

青い目に白髪、長身ながら細くもなく太くもなく。  
歳は聞いた事はないが、見た目的には若い。

そして何より、優しすぎるのだ。

例えば。

ヴァンとぶつかつたりした場合でも、例え相手が走つてきたりなど、相手に過失があつた場合でも、第一声が「大丈夫ですか？」なのだ。

自分より他人を優先しすぎていて、それが生徒の間では優しい先生と認識されていて、そういう面では好意を抱かれている事も多い。

「背格好が良くても、つまらないのは変わらないよ～」

と話をしていると、

「あ、そういえば」

「どうしたの？」

サラの問いかけに、

「図書室で、どうしても借りたい本があつたのよ。ちょっと付き合つてくれない？」

「でも、もう夕方だよ？もう少し暗くなり始めてるし、明日にしようよ。最近の事件もあつて物騒だし」

事件。

最近、この学校の周囲で殺傷事件が多発しているのだ。

特に夜に被害が多く、近辺ではあまり夜は外で歩かないように言われている。

「大丈夫だつて。もし変な奴がいても、こっちが一人なら心配ないつて。いいから行こうよ」

こうして、二人は暗くなりつつある中、図書室に向かった。

## 無能力な先生の退屈な授業（後書き）

ふつ。

とりあえず書き終わりました。

ですが、1話目の時点から書き直しや設定の見直しなど、初っ端から波乱万丈な書き物で、書くこちらもどこかに矛盾がないか、字の間違いがないか等ビクビクものです。

続くかどうかが心配ですが、とりあえず書ける所まで書いてみるつもりです。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 夜の邂逅（前）

図書室に本を借りに行き、帰る頃には周囲は暗くなっていた。  
暗くなつた校舎。

昼間とは違い、太陽の光もあまりなく、なんとなく漂うのは不気味な雰囲気。

そんな雰囲気の中、

「やつぱり、暗い学校の中つて昼間と違つて、何か雰囲気あるわよね」

ね

そう言つたのは、本を片手に持つたフラン。

「変な事言わないで、早く帰りましょう、フラン」

言いながら、二人は暗い廊下を歩いていった。

「にしても暗いわね……」

呟くサラ。

彼女の言つ通り、外からの光があまりない校舎は暗く、少し先を見ると暗黒に包まれている。

そしてあと少しで下駄箱に着くといつといつで。

「ねえ、何か足音がしない？」

言われて耳を澄ませると、確かに自分達以外の足音がする。

音源は……少し先の廊下の曲がった先から。

「ど、どうしよう

不安なサラの声。

その中でフランは、

「とりあえず、姿を見せたら私が攻撃するから、サラは援護をお願い。大丈夫だつて。なんとかなるよ」

自分達は複数。

相手は一人。

例え相手が武器を持つても、先手を取つて一人で攻撃したら  
何も心配ない、そう思つたのだ。

そう考へてゐる間に、足音は曲がり角に近づいていく。

そして、影が曲がり角から出てきた時。

「てやあつー！」

声と同時に自らの氣を水に変え、手のひらから、放水車から放た  
れるような勢いで鉄砲水を影に向けて噴射する。

「うわあつー？」

それをまともに浴びた影は噴射の勢いに押されて、廊下の壁に叩  
きつけられる。

「今よ、サラ！」

「ちょっと待つて！」

フランの声に、ストップをかけるサラ。

「今のは、誰かに似てない？」

サラの声にフランが顔を合わせ、恐る恐るその影に近づいていく  
と……

「ヴァン先生ー？」

そこにいたのは、頭から靴の先までびしょ濡れになつていたヴァ  
ンだつた。

「いたた……まさか生徒から攻撃されるとは思ひませんでしたよ  
頭を押さえながら、ゆつくりと立ち上がるヴァン。

「しかし、今のはいい攻撃でしたよ、フラン。もし私が襲撃者なら  
押さえとしては十分でしたね」

「つて、ヴァン先生が何でここに？」

「それはですね……」

少女達が図書室に向かつ前後、授業の終わった後。

校長室にて……

「校長先生。少しお話が」

「なんですか、ヴァン先生」

「校舎の夜の見回りの件ですが……」

最近、町で起きている事件については学校の関係者も知っていた。だから、教職員が交代で夜の見回りに付く事になったのだが、

「今日はボクに行かせてもらえないか?」

「別に構いませんが、どうして急に?あなたは明日のはずですよ?「ええ、どうも嫌な予感がするんですよ。いつも、何かが起こる気配というか、なんというか……」

「ああ、なるほど。ヴァン先生はそういうのに敏感でしたわね」

校長先生は頷くと、

「……分かりました。万が一の時は頼みましたよ、ヴァン先生」「ありがとうございます、校長先生」

ヴァルは頭を下げ、校長室を出て行った。

「もつとも、万が一の事が起こっても、あの人が負ける姿なんて想像もできませんけどね」

校長先生の言つた独り言は、誰にも聞こえる事は無かつた。

「……とこつ訳で、最近は各教職員が交代で見回りをして、今日はボクがしていたという訳です」

「そういう事だつたんですね?」

「それより、あなた達こぞどういう理由でここにいるんですか?夜に授業をするという予定は聞いていませんが?」

「あの……それは……」

二人は、困ったように顔を見合させ、そしてフランが、

「ちょっと図書室に用事があつたんですが、少し時間がかかってしまつて……」

「用事ですか。まあ、それは別に構いませんが、早く家に帰りなさい。ボクが先導します」

「はい。分かりました」

二人は頭を下げ、ヴァンを先頭に出口に向かっていく。

それでもう少しで出口に着く、その時。

ヴァンの足が止まつた。

「どうしたんですか？ヴァン先生」

「人は、そこを動かないように」

そう言つと、ヴァンだけが一人先に進んでいき、

「その角に潜んでいるのは分かっている。せつせと出でこい」

ヴァンの声が廊下に響き渡り……

「クックク、バレたか」

廊下の角から現れたのは、今度こそ誰も知らない男だった。

田はギラギラしていて、片手にナイフを持ち、ゴラゴラと揺らしている。

「先生、その人っ！？」

「……噂の変質者、あるいは襲撃者ですか、どちらでも構いませんが、前者の可能性は否定できませんね」

「……その通りさ」

その男は、ゆっくりとヴァン達の方に近づいていき、

「今日もついさっき警備員みたいなのを切つたばっかだがな、また収まらねえんだよ……」

そう言って、手に持つたナイフをヴァル達に向ける。

「3人も切れば、この疼きも止まるだろつわ。ゆっくり切り刻んでやるぜ……」

「お前は、何者だ」

「ファルガ地域の生き残りつて言や、分かるだろ？」

「！？」

ファルガ地域。

その言葉を聞いた途端、少女一人が一瞬震えた。

ファルガ地域とは、数年前まで紛争地帯だった地域の一つで、最も戦争が激しかった地域だつた。

そこでは日常での殺し合いは当たり前で、生き残ったのは大きく分けて3種類の人間だけだつた。

一つ目は部隊。

政府から派遣された組織で、トルバ王国とハルバード共和国の戦争に直接関わっていた。

二つ目は守られる者達。

町や地域ごとに組織が管理し、防衛していた所に住んでいた住人達。

そして三つ目。

どちら側にも一定には属さず、金、権力、思想、その他様々な考えで動いていた傭兵達。

彼らは、弱い者達は死んでいったが、逆に強い者は生き残り、名を上げていった。

「俺はよ、あそこで生き残つた傭兵なんだがよ、どうにも刺激がないと疼きが止まらなくまつちまつてな。まあ、ここで出会つたのが運の尽きだと思つてくれ」

言いながらも、あと数メートルでヴァン達に接触するところまで近づいた、その時。

「フラン、それにサラも。ここはボクが対処するから、下がつてなさい」

そう言って、ヴァンは片手を後ろに向ける。

「む、無理ですつて！ あそこから生き残つた傭兵だつたら、先生なんかが一人で戦つても……」

半分泣きながら喚く二人。

だが。

「心配してくれるんですね。ありがとうございます。けど、その心遣いは無用です。何故なら……」

そう言って、ヴァン自身も男に向かつて歩き出す。

「ボクは、得意な属性が何もない無能力者ですが……」

そして、サラは気づいた。ヴァン自身から、怒氣といつには生易しい、殺氣と呼べる程の何かを感じるのを。

「日常を壊す存在に対しては、一切手加減はしませんから」

## 夜の邂逅（前）（後書き）

さて、どこにでもありそうな展開ですが、書き終わりました。

次以降先生がどんな力を出すかですが……それは大体決めているので、後は表現力の問題だけ、どれだけ分かりやすく書けるかですね。自分にどこまでできるかは分かりませんが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 夜の邂逅（後）

あと数歩歩けばお互いが接触する位置までヴァンが近づいていった、その時。

「先生さんよ、教え子に別れの挨拶はいいのかい？」

「貴様を潰せばその必要もない」

互いに一言ずつ述べた後、お互いが動いた。

「な……何なの、これ

フランが呟いたが、答えられる者はいなかつた。

男はナイフの先から延長上に半透明の刀のようなものを武器に使つて攻撃しているが、まったくヴァンには当たらない。

男の動きが悪いのではない。

ヴァンの動きが速いのだ。

左から袈裟に斬ろうとする、それを予測していたかのよう、ヴァンがそれを右に避け、同時に右から回し蹴りを放とうとする。それを避けながらナイフを横に薙ぐと、その場にいたはずにヴァンはすでにしゃがんでいて、足元を狙つての蹴りを放とうとしている。

男は後方に飛んでそれを避けると、ナイフを両手で構えて叫ぶ。

「お前、一体何者だ！ 何でそこまで俺の攻撃を見切れるんだつ！？」

「下郎に教える筋合いはねえよ

「てめえつ！-！」

「ふんつ！-」

再び一人の影が交錯する。

「……それに、ヴァン先生の口調も変わつてる？」

「そう。

自分達にいつも向けられている口調は優しいが、今の、男に向け

られている話し方はまったくの別物だ。

そして何より、

「顔が、怖い」

フランが喋った一言だったが、サラも同じ気持ちだった。  
普段のヴァンと似ても似つかない、今のヴァルの顔。  
それはまるで、

「人を、殺そうとしてるみたい」

何度も斬られそうになるところをヴァンがかわして反撃、それを  
何とか男が紙一重でかわしを延々と繰り返した後。  
男は肩で息をしているが、ヴァンは息どころか、汗一つかいてい  
ない。

「さて、そろそろ諦めたらどうだ?」

「随分余裕あるみてえだがよ、先生さん。俺の攻撃はまったく当た  
らないが、てめえの攻撃も全部かわしてるぜ?」

「ああ、流石は元あそこの出身者と言えるな。だが」

「もう貴様の攻撃は当たらん。正確には当たつても通用しないとい  
うべきか」

「何だと?」

そう言つと、ヴァンは構え、気を集中し始める。  
すると。

ヴァンの体が白い何かで覆われ始める。

それはヴァンの体全体を覆い、全身が白い何かで覆われた。

「て、てめえ、なんだそりや……」

「行くぞつ!—」

ヴァンが男に向かつて走る。

「くそつ!」

男もヴァンに対してナイフを振り下ろす。  
だが。

それはヴァンには届かなかった。

「何、あれ……」

その質問に、誰にも答える事ができなかつた。

本当ならそのナイフの延長上に具現された刃に一刀両断された。

そのはずなのに。

その刃先は、ヴァンの肩で止まつていた。

正確には、肩の周りを覆つていてる白い何かに阻まれていた。

「何だ…… どううつ！？」

男が言い終わるより早く、ヴァンは男の腹部に蹴りを入れた。それを男はまともに喰らい、廊下に転がつた。

「今のは…… 一体…… なんだつてんだ？」

「氣を俺の体の周囲に纏わせ、簡単に言えばJランクまでの攻撃は全て無効化できる壁を作つた。故に、貴様の刃は壁の前で止まつた」

「無効化…… 白髪…… そうかよ……」

そんな様子を見ている少女達に、ヴァンがいつもの笑顔で振り向く。

「さて、サラ。課外授業でもしましょつか

「課外…… 授業？」

「私達の普段使う氣ですが、それはランク付けされてますね。そのランクと、その攻撃がどういう結果を生むのかは分かりますか？」

「えつと……」

「現在、ランクはカテゴリーA、B、Cの3つに分けられています」「まず一番下のCですが、軽いもので人に怪我をさせたり、強いもので車などの物でも破壊できる威力」

「次にBですが、メートル級四方を吹き飛ばす事ができる事を前提としています。人がまともに喰らえばひとたまりもありません」

「最後にランクAの攻撃ですけど、これは建物ですら吹き飛ばしたり、破壊したりできます。ミサイルや大砲の威力にも匹敵する事から別名「兵器級威力」とも言います」

「正解です。まあ、ランクの中でもピンからキリまでありますが、

一般に定められているカーテゴリーはそうですね」

「そしてこの男、襲撃者ですが、おそらくJランク、そして物体に自分の気を通わせて思い通りの武器を作る具現に近いものですね。属性は、風ですか。それを刃の形に具現化していたようですね」

「ちなみにですが、ボクのこの白いものは気を具現化した鎧のような物で、先ほど言ったようにJランクまでの気による攻撃は全て防いでしまいます。細かい事は省きますが、それでこの結果になった訳ですね」

「先生、大丈夫ですか？」

恐る恐るといった感じでヴァンに近づく一人。

そして、

「ええ、もう心配ありません。この男はしばらく動けません」

「そういう……意味じゃ……ねえんだろ？ククク……」

「まだ口は動けたのか？随分しぶとい奴だな」

「氣いつけるよ嬢ちゃん達。そいつ、何で今はそんな口調なのか訳は知らねえが……」

「昔はそいつ、ファルガ地域でも有名だつたからな……」

「それって……つー？」

「もういい、それ以上喋るな、下衆が」

言うと同時に、ヴァンは男に近寄り、彼の顔を蹴り、

「ぐぶつ……」

男は動かなくなつた。

「先生、先生つて一体……」

「ボクが昔、ファルガ地域に住んでいたのは本当です。できれば活動内容は秘密にしておきたいのですがね」

その言葉に、少女達は身を震わせる。

「ですが、ボクは平穏を願つてこの学校に勤務させてもらつてているんです。それだけは信じてください」

「……」

二人は無言でヴァルを見つめる。

その目には恐怖、恐怖が映っていた。

そんな中、

「先生、聞いてもいいですか？」

「はい。何ですか？ フラン」

「先生の、今までの日常は、本当ですか？ それとも……偽りですか？」

「？」

ヴァンは、外に出ていた夜空の月や星々を見上げ、

「ボクは、あそこにいた時も、そして今も平和を願っています。それは偽りのない真実です。それだけは信じてください」

「……はい」

その後、警察が呼ばれ、男は逮捕された。

二人は厳重注意の上開放されたが、ヴァンは参考人として警察に連れていかれた。

「心配無用ですよ。すぐに帰ってきます」

そんな一言を一人に残して。

## 夜の邂逅（後）（後書き）

自身初のバトル物が出来ましたが、自身の表現力の無さで少しだけになってしまいました。

次からもうちょっと表現力を上げたいのですが。  
ヴァンの設定については、矛盾のない程度に後からちょくちょく出していくつもりです。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

「やれやれ。平和になつたと思つたらまたファルガ絡みの騒動か。何とかして欲しいものだがな」

「原因はお前達にもあるだろう?」

高層ビルの一室。

そこで、一人の男が椅子に座つていた。  
片方はどこかの軍人を思わせる風貌で、左胸にはいくつもの勲章  
があつた。

黒い髪の中に白髪が数本入り混じつていて、初老を思わせたが、  
その顔はどこか威圧感を漂わせた。  
もう片方は、ヴァンだつた。

ヴァンは、最初は警察に連れていかれたのだが、とあるところから  
の電話により警察署を離れ、車でその場所に向かつていた。

その場所が、現在ヴァンとその軍人の風貌をした男が話している  
ビルの一室だつた。

「お前達政府がもつとしつかりしていれば、あの戦争ももつと早く  
終わつたはずだ」

「そう言つてくれるな。こつちも全部が全部一枚岩ではないのでな  
男はため息をついた。

「しかし、ファルガの種があの場所より離れたこの地域でも見つか  
るとは。この一帯の警備も厳しくせんといかんかの」

「その辺りはあんた達に任せよ。俺は俺と俺の教え子と俺の住ん  
でいる町に火の粉がかかれば消し飛ばすが、それ以外は関係ない」

「まったく、ワシも老いたといつのに、まだ無茶をせんといかんと  
はな」

「あの戦争に加わつた者にとつては後始末と同じだろ?」

「違いないわい」

ククク、と男は苦笑を浮かべる。

ファルガの種。

トルバ王国とハルバード共和国の戦争で、最も激しかった地域であるファルガ地域。

その地域で生き残った者の中には、その激しさ故に精神に異常を持つた人が確認されているという。

そういう人達を、上層部、あるいは関わった者達の間ではファルガの種と言われている。

（今日捕まえた男もその一人だったみたいだが、……まだこの世にいるんだろうか。ファルガの種と呼ばれる人間が）

「しかし、ヴァンよ」

そう言うと、男は顔から笑いを消し、真顔になる。

「お前もファルガの種になりかねないと思われている事を忘れるでないぞ。ワシらはともかく、お前を単なる傭兵の残党としか思つてない連中はお前も種と同様だと思つとる」

「ああ、分かつてる」

「お互に心労が絶えぬな」

「そうだな」

今度は、お互に苦笑を浮かべる。

「そういえば、お前に聞きたい事があるのじゃが」

「なんだ？」

「お前、学校で教師をやつとるんだろう」

「そうだが……それがどうした？」

「お前の力は少し、いやかなりのものじゃろう？それこそ、本気のお前を相手にしたらAランクですから手が負えない程の」

「自分で言つのもなんだが、そうだな」

「お前、その学校でどうやって生活しておるへ・田立つたりはしてないのか？」

「ああ、いい意味で目立つてゐた。何の属性も使えない、「無能力の先生」だつてな」

「無能力？……ツハツハツハツハツハツ！」

今度は、苦笑ではなく、膝を叩いて文字通り爆笑した。

「そんなに笑う事じやないだろう。普段はあの力を制御してゐるんだからな。傍から見たら氣があるだけで何も使えないと思われても仕方がないだろ？」「いやいや、すまんすまん。しかし、戦場の白髪鬼と言われ、ホワイト・デーモンの二つ名を得たお前が無能力とはな……ハツハツハ

……

「もうその話はよしてくれ。俺も今の平穀を氣に入つてゐるんだ。自分から壊す氣はない」

「ああ、分かった。すまんかつたな」

その後も一人は談笑し、そして時間が過ぎ……

「おつと、もう深夜を過ぎとるのか。そろそろ帰ねばならんな」「そうだな、明日に響く」

「お前には悪い事をしたな。日付は過ぎとるが、大丈夫なのか？」  
「心配無用だ。昔は3日3晩戦つた事があつてな。今でも数時間寝ただけで眠りすぎじやないかと思うくらいだ」

「それを聞くと、ますますお前が化け物に見えてくるわい」

「そう言つな。あんただつて、俺からしたら権力つて力を持つた化け物なんだからな」

「お互い様じやの」

「だな」

それから一言一言別れの挨拶を済ませた後、ヴァンは車で送られ

……

次の日。

教室は、襲撃者の話題で持ちきりだった。

警察関係の人が学校にいたので無理もなかつたが、そしてそんな中。

「……ねえ、クラン

「何よ、サラ」

「先生、来るかな」

「……」

昨日、ヴァンは警察に連れていかれた。

参考人としてだつたが、警察に連れていかれた経験がない二人にとつては、一晩一晩で済むのかが分からなく……

「おはようございまます」

そんなヴァン先生の一言で、彼女らの心の不安はハンマーで木つ端微塵に碎かれた。

「せ、先生、昨日は……」

ヴァンはクランとサラのところまで近寄つていき、

「先生にも、心強い味方がいますので。どんな味方かは秘密ですが、あなた達が心配する事ではありませんよ」

そう、二人にしか聞こえないような声で話した。

そして、ヴァルは教卓の後ろに立ち、授業を始めた。

「先生つて……」

「何者……？」

二人して疑問に思つたが、それは結局分からずじまいだった。

## 襲撃の日、その裏側（後書き）

とりあえず、書き終わりました。  
ログインしてない状態で見てみると、ニークコーナーはまだ100人にも達してないにも関わらず、このような書き物に評価がされていて、内心非常に嬉しく思います。

さて、これからどう主人公と周囲が動くのかはある程度構想練っていますが、自身が某MMOをしているプラスTERAにも手を出し始めたため、執筆スピードはちと遅くなるかもしません。  
それでも諦めないで書くのは続けようと思いますので、これからもよろしく御願いします。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 昔の友人との再開

とある休日。

ヴァンは散歩がてら、町中を歩いていた。

何事もなく、過ぎていく平穏。

ヴァンにとって、それは過去にあった出来事とはかけ離れた日常で、またその光景それはヴァンにとって至福の日常だつた。そんな平和な町中を歩いていると……。

「まあまあ、落ち着いてくだされ一人共。ほら、お茶でも飲んで」  
「何で私がこの吸血鬼なんかと一緒にいなきやいけないんですか。本来ならハッ裂きにでもされるべきですよ」

「それはこっちのセリフよ。誇りある吸血鬼が、何故信仰バカと一緒にいなればいけないのかしら？」

そんな物騒な会話が聞こえてきた。

しかし、三者とも聞き覚えのある声であり、同時に懐かしい声だつた。

ヴァンの足は、自然と声のする方に向かつていった。

「だから、お互に落ち着いてくだされ。たかが思想の違い、それだけではないか」

黒く長い後ろ髪を紐でくくつた、極東方面の古風な服を着た女性は、修道女の服を着た青い髪の女性と、白のハイネックと紫のロングスカートを着た金髪の女性を收めようとしていたが、

「思想の違い！？」

二人は同時に振り向いた。

「それだけならまだ許せます」

「ええ。教会連中と仲を持つてくださいと頼まれれば、百歩譲つて持つてやらない事もないでしょう」

「ですけどね！」

「しかし…」

二人は、お互いの顔を指差して、

「「「」」いつと仲良く！？そんなの、天変地異が起ころうとお断りです！」

「……随分仲がいいじゃないですか」

「「「？」？」」

予想もしない4人目の声がして、3人はそちらを向く。すると、

「時雨さん、シェルさん、アリエルさん、元気そうでなによりですね」

顔に笑みを浮かべながら、軽く会釈をするヴァンの姿があつた。

3人にヴァンも加わり、4人での楽しい（？）お茶会は進んでいた。

「にしても、その口調は何ですか？随分雰囲気が変わったようですが」

「そうだな。あの殺伐とした雰囲気はどこへ行つたのだ？まあ、今

のヴァン殿もまた良しだが」

「私としてはあの頃のヴァンも好きだったわよ？フフフ……」

「まあ、色々ありましてね」

三者三様の感想に、ヴァンはまた苦笑いを浮かべる。

4人はかつて、ファルガ地域で知り合つた仲だった。

と言つても、各々傭兵として活躍していて、互いの事情により味

方だった事もあれば敵だった事もあつたが。

それが今では笑いながら話すというのも奇妙な事ではある。

「そういえば、ヴァンさん。あなたはどこのギルド、もしくは軍に入ったのですか？あの戦争以来あなたの噂は聞きませんが」

「今は学校で教師をしていますよ」

「ヴァンが教師？」

「ええ、そうですよ。なかなか平穏な毎日を送らせてもらっています」

「ほつ。ヴァン殿が教師か。あの頃を思つと、意外と言えば意外だな」

と、3人はあの頃、戦争時のヴァンを思いだす。

### 戦争時のヴァン。

少年から青年時代を戦場で過ごしていた彼は、文字通りの殺戮兵器だった。

指令が出れば容赦なく人を殺し、組織を潰せと言われたら言われるがままに指定された集団を皆殺しにしていた。

そんな彼も、戦争が終わったと同時に姿を消していたのだが……。

「まさか教師でしたか。まだどこにも属していないなら、教会に誘おうと思っていたのですが」

教会。

気を聖の属性へと変化させ、それを操る事に長けている者達による大手ギルド、傭兵達が自分達で組織した集団の事である、の一つ。その特性から、主に気が負の方向に暴走した化け物の討伐等が主な仕事である。

「またその話ですか。もしボクがまだどこにも属していないくとも、

入らうとは思つてませんよ」

「どうしてですか？我々は神に仕える身であり、神に救われる存在。異教徒はダメですが、どの信仰にも属していないあなたなら大歓迎ですよ？我々の仲間になれば、あなたにも我らが神の守りが得られるでしょ？」

「ボクは一度絶望し、何もかも失いました。そして今信じているのは、この平穏な日常のみなんです」

「……あなた程の人が、もつたいないですね」

「それはボクの力を見て、ですか？それとも、人柄を見てですか？」

「無論、両方ですよ」

そんなヴァンとシェルの話を、聞いてるのか聞いてないのか、おそらく後者だが、ずずっとお茶を飲んでいるアリエル。

「と、その時、

「それよりヴァン殿」

「何ですか？時雨さん」

「近々開かれるという氣道大会とやら、ヴァン殿は出るのか？」

氣道大会。

それは氣を操る者同士が戦う大会の事で、トーナメント式で行われる。

目的は様々。

単に自分の力を確かめたい者、自分の実力としての名声を得るために、理由は色々あるが。

実力を示した者にギルドや軍からの勧誘が来る事もあるため、それが目的で出る者もいるが。

「ボクは出るつもりはありませんよ。ボクの仕事は教師であり、名聲もいりませんしギルドや軍に入る予定もありませんからね」

「ふむ。ヴァン殿が出るのなら、拙者も出よつと思つたのだが。久々にヴァン殿と手合わせもしたいのでな」「簡便願いますよ」

手を振り、笑いながらも断るヴァン。

「話は終わった?」

「アリエル殿。……今までずっと茶を飲んでいたのか?」

「どれもこれも興味はありませんし。もつとも、ヴァンとまた戦う事ができるなら氣道大会というものに出てもよかつたのだけれど」

「まったく、二人とも簡便してくださいよ。ボクは争い事はできるならもう避けたいんですから」

そんな会話を交わしながら、ヴァンは久々に昔の戦友とも、好敵手とも、旧友とも呼べる人間達と語り合つた。

#### 補足事項

吸血鬼。ヴァンパイアとも呼ばれる。

氣とは負の方向に長時間変化させると、ほとんどの生物や物は耐えられず、精神や存在が保てず崩壊し、暴走したり消滅したりする。だが、氣を負の方向へと変化させ、それでも自我を保つていられる者達の一部は体が通常の人間より遙かに強化される。

また、他人の氣を吸い取つたり、氣を自身の体に直接送り込み、体そのものを変化させて武器にしたり、氣を物体化させて何かを召喚する事もできる。

他人の氣を吸い取る事ができるのが、吸血鬼と言われる所以である。

## 昔の友人との再開（後書き）

構想は練つてたのでどんな内容にするかは決めてたのですが、中身はどんな文面にするか考えてないので、文字通り行き当たりばつたりですね、ハハハ。

新しい登場人物として3人の女性が出でますが、なんとなくで誕生させました。

シェルはイメージとしては某姫のカレー好きな先輩を、アリエルはヒロインの吸血鬼ですが、そのままだともつたないので高貴な感じをイメージして書きました。

時雨に関しては自分のオリキャラで、日本の侍風の女性ってな感じです。

現在一日1作ペースで投稿していますが、それがいつまで続くことやら……。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会への参加と、それぞれの思惑

「気道大会にボクも出場？」

それはヴァンにとって、突然の事だった。

とある昼休み。

校長先生に呼ばれ、ヴァンが校長室に行つてみると。

「ちょっと相談があるのですが

「はい、なんでしょうか」

「数日後に気道大会があるのは知っているでしょう？」

「ええ。学校中でも噂になつてますからね。今回はどの人が優勝す

るのだ、とか」

「それに、ヴァン先生も出場してもらえませんか？」

「……理由を教えていただきたいのですが。少なくとも、ボク自身は自分の力がどの程度かは知つてますし、名声も何もいりません。今の日常があればそれで十分なのですが」

「少し薄暗い噂がありましてね」

その噂とは。

今大会には王族の一人が見物として来る事になつていて。

そして、大会優勝者には毎回大会の責任者からトロフィー等が渡される事になつていてるのだが、今回はそれがその王族自らが渡す事になるかもしれないという。

その機会を狙い、王国と共和国の共存を良く思つていない連中が暗殺のために大会に出るとか、そんな類の噂らしい。

「暗殺関連はあくまで噂程度なんですけどね。念には念を、という

事です」

「それで何故ボクが？そういう事ならギルドにも要請が入るかもしれませんし、軍も黙つてはいなはずでは？」

王族に何かあれば王国直属の軍の面田は丸潰れでしょうと付け加えるも、

「言つたでしょ？念には念を、と。理事会でも貴方では力不足では、他の先生を送つた方がいいのでは、と反対の声がありましたが、5人のうち私含め3人が賛成の決を取つたので決定となりました」「そして私が軍に、念のためこちらで預かっているヴァン・ガルドを送つてもいいかと聞いたら、初老の軍人さんが一声で良しと言つてくれましたよ」

「……まさかあのジジイが……」

小さい声で呟いたが、校長先生には聞こえなかつた。

「というより、軍に直接コントラクトが取れるあなたは何者なんですか？」

「それは秘密です。それはさておき……」

「そういう訳で、あなたにも出でもらいたいのですが。どうでしょうか」

「しばらく考えさせて……もうつ余裕もなさそうですね。数日後にして、

「……この事は、もう登録は済ませて居るのでしょ？」

「ええ。大会を辞退するには、あとは棄権しかありませんね」

「……仕方ありませんね。そういう事なら出の事にしますよ」

「やう言つてもうえると助かりますよ」

そしてヴァン先生が部屋から出でていった後。校長先生はあるところに電話をかけていた。

「ハルバードさん、あなたの言つ通りにしましたが、これでいいですか？」

「ええ。」即ち用意できる手駒は多ければ多い方がいいですからな」

「『理由をつけてヴァンを大会に出場させてほしい』と言われた時は何事かと思いましたが、あなた達はもしかして……」

「先生の想像通り、かどうかは分かりませんが、軍上層部が、ファルガ方面が関わっているかもしぬない、と考えたのです」

「やはり……」

校長先生は、深くため息をついた後……

「あの戦争は、まだ終わってないのでしょうか？」

「そう考へてゐる連中が、少なからずいるという事は確かですな。まだ見ない連中や、そして我々の中にも」

それから出場する人間の名簿が町の掲示板に張られ、そこにヴァンの名もあり、ヴァンが出場するといつ事は学校でのちょっととした噂になつていた。

もつとも、ヴァンの実力を知らない者が学校のほとんどだったのとで、「初戦敗退じゃない?」「少しほは頑張ればいいのにねー」等といつた冷やかしのような感じだったが、

だが、

「先生、出場するつて本当ですか?」

「ええ、そうですよ」

「頑張つてくださいねー」

「ええ、極力負けないように努力しますよ」

人柄のおかげか一部応援もあつた。

しかし、そんなヴァンの内心は、

(暗殺か……。またファルガの生き残りが関与してなればいいんだが……)

そんな心配をしていた。

## 大会への参加と、それぞれの思惑（後書き）

休日を利用してとはいって、投稿できるとは思つてませんでした。  
逆に言えば、連休が終われば一日投稿もできなくなるという事でしょうか（汗）

これで起承転結の起か承の辺りだなー。

アクセス解析で見てくれている人が分かるという事や、評価ポイント等、お気に入り登録してくれている人がいるというのは自身にとって嬉しい事です。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会前日

ヴァンが大会出場を決意してから数日後……大会の一日前。

「先生、何か用ですか？」

「いえ、少し念のため、ですね」

放課後、学校の人気の無い場所に、ヴァンはフランとサラを呼び出した。

「二人とも、ボクが気道大会に出る事は知っていますか？」

「はい」

「とある事情で、大会に出る理由ができたのですが、少し問題がありまして」

「問題？」

「ええ。一人には、少し手伝いをしてもらいたくて来てもらいました。予定は大丈夫ですか？」

「それは大丈夫ですが……一体何を手伝えば？」

「簡単に言えば、一人がかりでボクと戦つて欲しいんですね」

「はあつ？」

ヴァンのその発言に、どういつ意図があるのか分からずに、二人は間の抜けた返事を返した。

「先日の戦闘で一人はご存知でしょうが、ボクはある程度の相手なら遅れをとるつもりはありません」

「ですが、大会ですと、どんな相手がいるかボクにも分かりません。ボク自身、動きや気の使い方が鈍つていてもしかれませんしね」

「鈍つて……あれで、ですか？」

フランは、先日の襲撃者とヴァンの戦闘を思い出しつつ、目を丸くした。

「まあ、そういう訳で、鍛えなおすという意味でボクと模擬戦闘として戦つて欲しいんですよ。もちろん、危険な技や危ない術は無しで、ですがね」

「……でも、色々と問題ありますじゃないですか？いくら模擬戦闘と言つても、先生と生徒で……」

「その点は問題ありませんよ」

急に4人目の声がしたのでそちらの方を向くと、そこには校長先生がいた。

「ヴァン先生がどうしてもと言つ事で、許可を出しました。万が一危ない事が起こっても止められるように、私も来ましたけどね」「もしよければ私が模擬戦闘を、と言つたのですが……」

「自分の授業がいつも暇なので、たまにはこういう息抜きもいいのではないか、と言われましてね。一人もヴァン先生の力を見たくはありませんか？」

「先生の……力……」

確かに、普段は気を扱う事のないヴァンの能力は未知数。

そういう意味では、ヴァン先生の力がどれ程のものか、それを体験したくないかと言われば、その誘いに乗りたくもあつた。

「……分かりました。じゃあ、ヴァン先生、お願ひします」

「同じく、サラ・サーヴェントもお手合せ願います」

そう言つと、一人はヴァンに対して構えた。

「では、開始の合図は私が取りますね。勝敗の結果は、ヴァン先生が負けを認めるか、一人のどちらかが決め手となる攻撃を受けたらいいでじょう」

そういうと、校長は右手を掲げ、

「始めてください」

同時に手を下げる。

「てやあっ！」

最初に動いたのはフランだった。

あの夜と同じような鉄砲水を、ヴァンに向けて放つ。だが、

「勢いは確かにすごいものですが…！」

ヴァンはそれを右に避ける。

そこへ。

「私を忘れてませんか！？」

避けたところへ、風の刃、俗に言ひ鎌鼬がヴァンを襲つ。

「おつとつ」

ヴァンはそこから後方に飛び、それをも避ける。

そして、

「次はこちから行きますよ！」

言つと同時にヴァンが地を蹴り、フランに肉薄し、軽く飛びながら中段蹴りを放つ。

そしてそれを、

「えい！」

水の壁を作つて防ぐフラン。

そこから更に、

「これなら！」

サラが風の塊を作り、それを放つてヴァンにぶつけようとする。だが、水の壁を蹴つた勢いでその場を離れ、サラの攻撃は再度、ヴァンを捕らえられなかつた。

そうして一人とヴァンは距離を取り、「

今度はこっちから！」

フランは両手に水の塊を作り、サラも右手に風を集中させ、ヴァンに向かつて走つていった。

ヴァンは一人を迎撃つように構える。

先にフランが両手を両手を合わせ、さつきの倍の体積になつた大きな水の塊をヴァンに放つ。

「くつ！？」

避けようとするも、その水の塊の一部が、僅かにヴァンの体にか

すつた。

バランスが崩れ、ヴァンの体がよろける。

そこへ、

「今！？」

右手に集中させた風の塊を刃状に変化させ、ヴァンに斬りかかる。

（これで……っ！）

そう思つたサラだつたが、風の刃は受け止められてしまつた。あの時の夜と同じ、白い光で覆われた左手で。

そして、

「霸つ！」

右手による掌打をサラの腹に撃ち、サラは吹き飛ばされた。

「そこまでー！」

校長先生による声により、模擬戦闘は終わつた、

「やはり、能力者相手だと徒手空拳だけで勝つのは難しいですか？」

「……」「いや、ヴァン先生が強くても、一般人と能力者では雲泥の差がありますからね。気には気で対処するしかありません」

「しかし、この無効化能力だけはあまり使いたくありませんね。何だか反則気味っぽくて」

「なら、普通に火や水等の能力を使えばいいんじゃないんですか？」

「やはりそうなりますか？」

「……え？先生、そういう気の変化を使えるんですか？」

「フランと、腹の痛みの引いたサラは同時に疑問を投げかけた。

「ええ、使えないと言えば嘘になりますね。」

「でも、授業では使えないって……」

「得意ではないとは言いましたが、使えないとは言つてませんよ？」

「……」

「二人は何だか騙されたような感じがして、呆気に囚われた顔をした。

「それで、どうでしたか？結果は」

「そうですね。過去の経験から、相手の能力による攻撃を避けたりこちらの攻撃を当てたりするのは可能かもしれません、ある程度の強者には1対1でも能力を使はなければいけない、そういう感じですね」「すると、やはり能力を出す必要があるかも？」

「相手によると思いますね。大会でもあまり目立ったくはないのですが……明日次第ですね」

言い終わるとヴァンは一人に顔を向け、

「一人とも、今日はよく手伝ってくれましたね。ありがとうございます」

「いえ、私も久々に模擬戦ができたので、楽しめました」

「最後のは少し痛かったですが、私も問題ないです。むしろ私達を選んでくれて、ありがとうございます」

「いえいえ」

「それより、明日からの試合、頑張ってくださいね。応援しますから」

「私も、先生が勝つのを期待しています」

「そう言われたら、ボクも期待に答えるしかないですね」

ヴァンは苦笑しながらそう呟いた。

## 大会前日（後書き）

さて、このような文でいいのかと少し迷いましたが、投稿させても  
らいました。

大会への繋ぎみたいなもの、ですね。

今回でも少し書きましたが、次から戦闘のシーンが多くなつてくる  
と思うのですが、うまく書けるかどうか……。

自分なりに書こうとは思つてますが、ヘタに書いてたらすいません  
o r z

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会予選

大会当日。

参加応募者は五十人を超えて、会場は賑わっていた。

「これは……沢山いますねえ」

その光景を見ながら、ヴァンは呟いた。

だが、その大勢いる人の殆どが、何かしらの体術、武術、気の扱いに慣れている事をヴァンは雰囲気のようなもので感じ取った。

「これは、なかなか苦労しそうですね」  
と苦笑する中。

「お待たせいたしました」

審判を勤める男が、参加者の前に出てきた。

「今日は忙しい中集まつていただき、ありがとうございます。ただ、人数が多いため、今回は予選を通じて参加者を絞り、本戦を行いたいと思います」

「くじ引きにて対戦相手を決めてもらい、勝った方が本戦出場となります」

そして全員がくじを引き、ヴァンの対戦相手も決まった。

最初の予選。

相手は大柄な男だった。

ヴァンと男が戦いの舞台に着き、一定の距離を保つて互いに向かい合う。

「ルールは、相手が負けを認めるか、場外となつた時に勝ちが決まります」

「また、基本Cクラスの攻撃はそのまま通りますが、Bクラス以上の攻撃は気で構成された結界により直接当たる事はありませんが、衝撃が相手に伝わるようになっています」

「武器や能力を使っての刃物等の構成は認めます。また、実戦を想定しているため、急所への攻撃も認めますが、その場合もまた結界が張られ衝撃のみが伝わるようになっています」

そして審判が一息置いて、

「では、始め！」

その合図の瞬間、ヴァンが走り、男に走り、

「霸つ！」

勢いに任せて拳を放つ。

だが、

ガゴッ！

鈍い音を立てて、ヴァンの拳は男が肘から先を覆つぱつに作った石の腕に阻まれる。

続いて体を回転させ、回し蹴りを当つようとするも、同じくそれも石の腕に当たる。

「受けっぱなしは趣味じゃねえんでな！」

そう言い放つと、両手を石の塊と化した男が連續で攻撃を繰り出す。

しかしそれを、ヴァンは紙一重で避けていく。

「ふんぬ！」

男が体を回転させて、裏拳を放つが、ヴァンはそれを避けて、男の無防備な顔に蹴りを当てた。

「ぐがつ！」

それで男は倒れ、同時に腕の周囲の石が崩壊した。男は起き上がったが、再度石の腕を作り出す前に、

「崩拳！」

掛け声と共にヴァンの放った拳が腹に当たり、男は吹っ飛び、場外となつた。

「それまでー、ヴァン・ガルド選手の勝ちー！」

「ヴァン先生、予選通過おめでとうございます」

舞台を降りたヴァンに、フランがねぎらいの言葉をかける。

「ありがとうございます。何とか能力を使わずに倒す事はできましたね」

「ところで、さっきのホウケンとは？」

「この世界の極東地方に伝わる拳法の型の一つですよ。ボクはそっち方面の拳法を主に学んでいますので」

そんな会話が続くうちに、予選が進んでいく。

予選は順調に進み、64人いた参加者は32人になつた。

「予選が終わつたので、次は本戦となります」

「では本戦の前に、王族の一人であるノア様からの挨拶です」

そう審判が言つと、一人の若い男が舞台に上がり、審判からマイクを受け取つた。

王族特有の豪華な服を着た青い金髪の男は、周囲をぐるりと見渡し、

「皆、今日は天気にも恵まれ、いい試合日和となつた」

「これだけの強者が集つてくれた事を私も嬉しく思おう！」

「本大会にて、各々が力を出し切つて戦つてくれる事を切に願いた

い」

演説が終わり、会場から拍手が送られる。

では、とノアは審判にマイクを渡し、座つていた椅子に戻る。

「ノア様からの挨拶も終わりましたので、これから本戦を始めたいと思います！」

その声に、会場が歓声に覆われた。

「さて。問題はこれからですね  
集められた参加者達。

この中で、自分はどこまで勝ち進む事ができるのか。  
また、本当に暗殺を考えている人間がいるのか。  
問題は山積みだった。

「まあ、とりあえずは一戦一戦を勝ち進む事ですか」

## 大会予選（後書き）

書いて一言。

相変わらずの文章力だな」と。

戦闘シーンもあまりだし。

そんな自身の作品を読んでくださっている皆様方には感謝感謝です。一応何作か先行で書いていて、誤字脱字がないのを確認してから投稿してますですが、それでも毎回「こんなんで面白いかな」とか「相変わらずのバトルシーンがなー」とかですが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 本戦1回目

予選が終わり、本戦が始まった。

舞台上に上がった選手達は、能力を身に纏い、あるいは放ち、互いに戦う。

そうして順調に本戦は進み、

「次、ヴァン・ガルド選手とライ・サラザール選手！」

審判に呼ばれ、ヴァンは舞台上に上がる。

次に出てきたのは、細身の体格の男だつた。

（武術体術を使うようには見えませんが……放出系を得意とする人でしょうか）

互いに距離を取り、

「では、始め！」

合図と共に、戦いは始まつた。

合図の掛け声が上がると同時に、ライは周囲に小さく丸い火の玉を何個も作り出した。

そして、

「はあっ！」

手を前に突き出すと、それらが一斉にヴァンに襲い掛かる。

（流石に全部を体術で避けるのは無理そうですか）

そう考えたヴァンは、両手に薄い水の膜を張り、向かってきた無数の火の玉を徒手空拳で叩き、打ち落とす。

だが、

「らあっ！」

その間にライは炎の剣を作り、ヴァンに走り出していた。

火の玉を全部打ち落とした頃にはライはヴァンの目前に迫り、掛け声と共にヴァンに切りかかる。

（近距離も得意なのですか。意外ですね）

そう思いつつも、それをヴァンは紙一重でかわす。だがそれでも完全にかわしきる事は敵わず、ヴァンの体に炎の剣の熱が走る。

そして接近した後は近距離で互いに攻撃を当てようとし、またはかわし、距離が離れると再度火の玉がヴァン田掛けて空を走る。だが、だんだんとヴァンの攻撃の手数が少なくなつていき、ついには防戦になつた。

そうして、ヴァンの防戦一方な戦闘は続いていく。

「大丈夫かな、ヴァン先生」

「私もヴァン先生が能力を使つたのは初めて見たけど、それって相手が強いつて事だよね」

観客席にてその光景を見ているフランとサラは、心配げに言葉を交わしていた。

「今、ヴァンって言つた？」

「？」

聞いた事のない声に、一人が振り向くと、そこには修道女と、金髪の女性と、古風な服を着た女性が立つていた。

「隣、いいかしら」

「あ、ええ。どうぞ」

了解を得ると、その三人は一人の近くに座つて戦いを見物し始めた。

「あの、あなた達は？」

「そう言えば、自己紹介がまだだつたわね」

そう言つと、金髪の女性は一人の方を向き、

「私はアリエル。ヴァンの旧友といったところかしら」

「拙者は風祭時雨と申す。ヴァン殿との関係はアリエル殿と同じです。以後、お見知りおきを」

「私はシェルです。二人と同じく、ヴァンさんの旧友ですね」

「私はフラン・クラーです。ヴァン先生に授業を教えてもらつてます」

「私はサラ・サー・ヴェントです。同じく、ヴァン先生の生徒です」「成る程。あなた方がヴァン殿の教え子でしたか」「こんな可愛い生徒を持っているとは、ヴァンも果報者ね」

「可愛い、と言われて、二人は赤面する。

「それにしても、ヴァン殿。大会に出ないとおきながら出でいるとは。もし知っていたら拙者も参加していたのに」

「あー、それには何か事情があるらしくて」

「事情?……まあ、それは後で本人に詳しく聞こうかしら」「それにしても……」

五人は、互いに自己紹介をした後、ヴァンの戦いを見ていた。ライは火の玉と剣を操り、ヴァンに攻撃を仕掛けている。対するヴァンは水の膜を腕に纏つて防御しているが、防戦一方である。

「先生、大丈夫かな」

「何がですか?」

「だつて、先生防戦ばかりで、攻める気配がないんですよ?」

「大丈夫です。相手があの程度なら、何とかなりますよ」

そう言つシェルの顔は、それが当然とばかりな顔をしていた。

防戦一方のヴァンだが、避ける事はできても体は相手の能力による熱で熱くなつていった。

だが。

(相手がどういう戦法をするのか大体は把握できました。火の玉と炎の剣を同時に出す事はできないようですね。なら……)

そしてライが再び火の玉を作り出し、ヴァンに放った、その時。ヴァンは腕に張った水の膜を強い勢いで前方に放ち、全ての火の玉を打ち消し、同時に走って接近する。

火の玉の残留がヴァンの体に掠り、熱い感触が体に残るが、構う事なくライの目前まで迫った。

「なつ！？」

驚いたものの、炎の剣を作り出そうとする。だが、

「だあつ！」

それが作られる前にヴァンが飛び蹴りを放ち、それがライに当たり、彼は倒れた。

そして起き上がるうとするも、その目前には戦闘態勢を構えるヴァンの姿があった。

「ま、まいった」

「それまで！勝者、ヴァン・ガルド選手！」

その声に、会場は騒ぎたつた。

「ね？何とかなったでしょ？あの火の使い手は遠距離と近距離を同時に使う事ができないようなので、火の玉を消されて無防備になつたところを狙われたんですね」

「はあ……」

シェルの解説に、二人は相槌を打つしかなかつた。

そして戦いが終わり、ヴァンが控え室に向かうと、

「先生、1回戦勝利おめでとうございます」

ヴァンの勝利を嬉しく思つてゐるフランと、

「次も頑張つてくださいね」

同じ思いを抱いたサラの一人の生徒と、

「ヴァン殿。出ないと誓つておきながら出でてこる理由、少し聞きた  
いのだが」

少しムッとした顔つきの時雨と、

「ヴァンさん、1回戦田としてはまあまあですね。でもあの頃と比  
べると動きが鈍つていましたよ?」

少し悪くなつた成績を見る先生のような表情のショルと、  
「ヴァン、今日はゆつくりと見学させてもらつわよ?」

普段と変わらない雰囲気のアリエルの、三人の旧友が出迎えてく  
れていた。

「三人とも来てたんですね。時雨さん、訳は一応言わせてもらえま  
すか?」

「そのつもりで労いも兼ねて來たのでな」

そしてヴァンは、時雨達に、大会に出た理由を話す事にした。

## 本戦1回目（後書き）

とつあえず投稿させてもらいました。  
やっぱ戦闘シーンうまく書けないつす。んな  
その辺がどうにかできればなー。

お気に入りさんが増えていつてるのを見て、「これを見てくれてる  
人がいるんだなー」と思つだけで感謝感激です。  
意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

大会を利用した王族の暗殺。

その話を聞くと、しぶしぶ納得したといった感じで時雨は引き下がつた。

「まあ、ボクも噂程度だと聞かされているだけですし、念のため程度でしようが」

と、両手を肩の位置まで持つていき、やれやれのポーズを取るヴァン。

「しかし、物騒な話だな。王族の暗殺とは……」

「もし本当だとしても、……実行なんかさせませんよ。ヘタをしたら、また前戦争のような抗争が起こるかもせんからね」「な」

そう言つたヴァンの口は、静かな真剣味を奥に見せていた。

その間に他の試合が終わり、第一試合目が始まり。次々と勝者敗者が決定していく中、いよいよヴァンの出番になつた。

そしてヴァンと対戦相手が呼ばれ、両者が舞台に立つ。

合図が出る前に、構えるヴァン。

それに対して、対戦相手のは両手に収まる程の筒のような物を持つていた。

そして相手が集中すると、その両端から刀の長さ程度の風の刃が出現した。

（変わった武器ですね。どういう戦い方をするのか分かりませんし、相手するのに苦労しそうです）

「両者準備はいいですね？……では、開始！」

合図と同時に相手の女性はヴァンに向かっていった。

向かいながら、両手で持つた武器の柄部分を回転させる。

そうする事により、風の刃は回転し、円盤状になる。

その円盤状になった武器で、袈裟切りの形でヴァンに切りかかる。

「つとつ！」

それを避けるが、今度は武器を巧みに操り、武器を両手で回転させ、または体を回転させながら、両刃の武器をつまく利用して両刃で交互にヴァンに切りかかる。

それを紙一重で避けつつ、

（風属性ですか。火や水で受ける……のは今のボクの力から考えるに論外として、なかなか能力を使わせてもらえる暇を与えてくれそういうにありませんね）

「へえ……今度の相手はなかなかやるじゃないの？」

「だな。あれでは今のヴァン殿では苦戦するかもしけん」

「そんなに相手は強いんですか？」

「風属性に対して、有効な手段は物理的な防御等ですが、ヴァンさんはその系統を接近戦ではあまり使わないんですよ。ほとんど無効化能力で戦つてましたからね」

「石や鉄等を使った操作、放出系なら使えますが、相手が接近戦となるとなかなかその機会を与えてくれそうにありませんしね」

そんな五人の思惑とは別に、戦闘は続いていく。

三人の考察通り、ヴァンはまた防戦一方になっていた。

風に対しても物理的な攻撃や防御が有効だが、なかなかその機会を与えてもらえない。

「どうしました？防戦一方でも勝てませんよーー？」

そんな挑発にも、

「そんなに反撃されたいなら、そこで横になつて寝転んでくださればいいだけですがっ！」

「それは無理な相談ですねっ！」

そんな会話を織り交ぜつつ、戦闘は続いていく。

そんな中、ヴァンが勢い攻勢の勢いに負けて体のバランスを崩す。「今っ！」

その好機を見逃さず、女性はヴァンに切りかかる。

そのタイミングといい、ヴァンには避ける暇がなかつた。（仕方ないですね……）

ヴァンは一瞬神経を集中させ、体に白い衣を纏う。

「！？」

初めて見る能力だが、それでも女性は攻めの手を緩めずにヴァンに切りかかる。

そしてヴァンの目前に風の刃は振り落とされる、その時。ヴァンの白い光に包まれた左手が、相手の風の刃を文字通り受け止めた。

「なっ！？」

この行動は想定外だつたらしく、女性は一瞬動きを止める。その隙をつき、

「せやっ！」

声と共に、ヴァンは女性の腹部に蹴りを打ち込む。

「ぐつ？！」

女性は何とか持ちこたえるが、それでも体のバランスを崩していった。

その機会を狙い、ヴァンは女性に肉薄する。

「なんのっ！」

女性は再び両刃の剣を作り出し、ヴァンに切りかかる。だが、

「もうあなたの攻撃は効きません！」

そう言つと、白く光る左腕で再度風の刃を受け止める。

「なつ！？」

その光景に、驚きを隠せない相手選手。

その一瞬の隙を狙い、

「霸つ！」

無防備になつていた相手の体に拳を打ち込み、女性は倒れこんだ。

「くつ……動けないか。降参だ」

「それまで！ヴァン・ガルド選手の勝ち！」

「やはり、あの手合いだと、無効化能力を使う必要がありましたか」「戦闘の様子を見て、感想を述べるシェル。

「と言うより、ヴァンが弱くなつてるんじやないかしら。あの頃と比べると明らかに動きが鈍つてるわよ？」

「あれで、ですか？」

「二人はどこまで知つてゐるかは知らないけれど、昔のヴァンはもつと強かつたわ。それこそAランク相手でも引けを取らない程度にはね」

「……」

その言葉に、フランとサラの二人は絶句した。

「まあ、結果はヴァンの勝利に終わつた事ですし、また労いの言葉でもかけに行きますか」

だが、時雨は、

「拙者は少し気になる事があるのでな。他の試合も見に行く事にする」

「分かりました」

シェルの言葉に、時雨を除く四人は控え室に向かつた。

その試合が終わつた後、別の試合では。

傭兵風の男が、圧倒的な強さで対戦相手を屠つているところだつた。

「まだこの程度じゃ終わらねえなあ……畜、早くお前と戦いたいぜ

その独り言は、周囲の歓声に紛れて誰にも聞こえる事はなかつた。

そしてその場に居合わせた時雨は……

「やはり……あの男……」

「先生、2回戦もおめでとうございます」

「しかし、1回戦まで勝ち進むと、先生に対する周囲の注目度も上がる一方ですね？」

「それはできれば簡便願いたいのですがね」

苦笑するヴァン。

「ですが、やはりあの相手だとあなたの力を使う必要がありましたか」

「ええ。強い相手でした」

「あなたが弱くなつているんじゃなくて？」

「……言わないでください」

そんな中、

「ヴァン殿

遅れて時雨が控え室に入つてきた。

「ヴァン殿、4回戦の相手だが」

「3回戦が残つてゐるのに、もつ4回戦の話ですか？」

「少し引っかかる事があつてな」

「引っかかる事？」

「ヴァン殿の試合が終わつた後、ある選手の試合を見ていたのだが

「あれは、なんとなくだが、あの地域の傭兵の気配がした」  
「その一言に、ヴァンは少しではあるが、顔を強張らせる。

「とすると……」

「断定はできぬが、暗殺の可能性。少し注意した方がいいかもしねや」

「……分かりました。一応頭に入れてくれます」

そう言い返したヴァンだが、その顔は険しくなっていた。

## 本戦2回目（後書き）

とうあえず、今書いてる分は全部投稿し終わりましたあ～。  
……疲れた。

全体的にまとまっている（thought）のですが、自身でどれだけ書いてもあまり満足できる結果になつたかどうかは分からず。精進するしかないですね。

1作1作自体の文章が短めなので書くペースは速いですが、今日からまた仕事始まるので投稿するペースそのものは遅くなるかも。orz  
ぶつちやけ、三戦目以降どんな相手でどういつ能力を使うか、どんな構想で書くか決まってないんですが（苦笑）  
……笑い事じやねーよ。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会一戦目終了

本戦一戦目が終わり、二戦目以降は次の日に持ち越される事になつた。

それぞれの選手が休息を取る中、ヴァン達もロビーにて休息を取つていた。

「それにしても、ヴァン先生があんなに強いなんて思わなかつた！」  
「そうね。学校で無能力だつて言つてた人達はどんな顔するのかしら」

「やめてくださいよ、二人共。ボクはあまり田立ちたくないんですから」

そんな生徒と教師のじやれあいに混じりつつ、

「ヴァン殿、今度このよつたな試合があれば登録する時は一緒にしてくだされ。拙者もヴァン殿と手合わせしたい」

「あら、その時は私もよ？ヴァンとまた戦えるなんて、楽しみで仕方がないわ」

「もうしませんよ。一度きりでこりこりです」

「その吸血鬼が出るのなら、私も出ないといけませんね。まだ決着が着いてないんですから」

「そういえばそうだつたわね。次があれば楽しみだわ。フフフ……」

「二人共、少し落ち着いてください」

そんな会話が織り交ざる中。

「ヴァン・ガルドさん」

声をかけたのは、一戦目で戦つた女性だつた。

「軍の中で噂は聞いていましたが、なかなかの強さでした。私、感服いたしました」

「いえいえ、あなたこそ強かつたですよ。流石一戦目まで勝ち残つてきました、とでも言つべきですね」

しかし、ヴァンはそこでふと気づいた。

「……軍の中？」

「はい。私は今回の噂を確かめるため、軍から派遣されたうちの一人です」

「なるほど、それであれだけ強かつた訳ですね。……そういえば、あなたは？」

「はっ！？失礼しました。私はシヴァ・トレインと言います。シヴァと呼んでください。それで結構です」

「分かりました。ボクの事も、ヴァンでいいですよ」

「はい。ところで、ヴァンさん、気になつていていたのですが」

「何がですか？」

「あの試合中に見せたあの白い力の事ですが」

「あれは何の属性ですか？白く光る事から、聖属性あたりと踏んだのですが……それでもあれほど簡単に私の風の刃を受け止めたのが納得できません」

「あー、あれはですね……」

ヴァンは困った顔をして、

「とりあえず、企業秘密という事にしておいてください。あれは対能力者戦においては少し反則気味な能力なので」

「……」

シヴァはあまり納得できないといった様子だったが、「それよりシヴァさん」

途中から割り込んできたシェルに、話を持ちかけられた。

「軍所属の人が試合にという事は、暗殺の件は本当なんですか？」

「いえ、私達でもそこまでは掴んでいません。ただ、火のない所に煙たは立たないと言いますから、念のためですね。まさか防止する者同士で戦う事になるとは思いませんでしたが」

「そこはくじ運が悪かったと言つしかありませんね」とヴァンは苦笑し、

「少し外の空気を吸つてきます。ちょっと気疲れしたもので」

そう言って、ヴァンは夜の空気を吸いに、控え室を出て行つた。

「ふつ……」

勝ち進む事、暗殺の事、考える事は色々あったが、ヴァンにひとつは別の事も考え始めていた。

「ボクの力が、弱くなっている、ですか」

だが、あの数年前の頃と今を比べると、反応速度や能力の使い方等、気になる点はいくつかあった。

そしてなにより、

「ボクは、日常を壊す相手なら心置きなく本気を出せるのですが……」

「そう。

今回があくまで大会という、日常の中での一部に過ぎない。だから、ヴァンはあまり本気を出せずにいるのだ。

「どうしたものでしようか……」

と、そんな事を考えていた時。

「よう、蛮。見違えたぜ。最初見た時はビロの弱虫かと勘違いした程になあ」

その声と共に、背中に寒気が、そして同時に驚きも走った。蛮。

それはヴァンが、ヴァンと名乗る前の名前。

それは戦争時まで遡る。

昔、ヴァンは、幼少の頃、極東の傭兵に拾われた。

その時に付けられた名前が、賀戸蛮といつ名前だったのだ。

それからというもの、ヴァンはその傭兵にて、戦場で生き残る術を叩き込まれた。

戦闘技術、能力の使い方、心構え、他にも色々あった。

もつとも、ヴァン自身が最初から備えていた無効化能力にはその傭兵も少し驚いていたようだつたが。

とにかく、ヴァンは小さい頃にその傭兵に世話をなつていた。

そしてある程度生き残る術を身に付けた後、その傭兵は死に、ヴァンは一人になつた。

それからヴァンは、今のヴァン・ガルドと改名し、それ以降は単独の傭兵となつて戦場を駆け巡つた。

以後、ヴァンはその傭兵からもらつた名前を一度も使つた事はない。

だが、それを知つてゐるといつ事は……。

「貴様、まさかあの時の……」

ヴァンの昔の名前を知つてゐる人物は一人しかいない。

ヴァンを保護した、もう名前すら覚えていない傭兵。

そして、その傭兵を殺した一人の傭兵、……ガルム。

「そうさ、俺だよ畜。久しぶりだなあ」

「貴様、よくもぬけぬけと言えたものだな！」

ヴァンはガルムに対して臨戦態勢を取る。

「おつと、今ここでお前とやりあつ氣はねーよ。やるんなら試合でつてな」

「……」

言われながらも、臨戦態勢を解く事ができないヴァン。

そんな中、

「それよりも、お前は氣づかないのか？」

「何にだ」

「はあ……」

ガルムは心底呆れたようなため息を出す。

「小さいガキだった頃のお前のが、よつぼじ怖いぜ。しつかり平和ボケしてやがる」

「一体何の事だ！」

「じゃあヒントを出してやるよ。この匂い、なんだと思つ？」  
そう言われ、ヴァンは嗅覚を研ぎ澄ませる。

すると……

「これは……血の匂い……？」

「ああ。さつさくお前の第三試合の相手だつた奴を潰してきたといつだ」

「貴様、何て事を……！？」

「つれねえなあ。ガルムつて呼んでくれよ、畜。心配はしなくてもいいぜ。命に別状はないからな」

おどけながら話すガルム。

だが、周囲からはガルムの殺氣が満ち溢れていて、そう簡単に手が出せるような雰囲気ではなかつた。

「お前の名前があつた時は驚いたぜ。まさかお前もこの大会に出場しているなんてな」

「貴様には関係ない」

そつけない態度を取つたヴァンだが、この時ヴァンは王族の暗殺とこの男が関係あるのでは、と思い始めていた。

「貴様は何の用があつてこの大会に出た？」

「ああ、そういや忘れてたぜ。確かどつかの貴族様を殺せつて言われてたんだつたか」

「じゃあ、やはり貴様がつ……」

「最初は退屈な事だと思ったがな。お前がいるつて分かつなんなら、そんなのは一の次だ。お前との対戦、楽しみにしてるぞ」

「そうそう、もし俺との対戦を邪魔するような素振りを見せたら、まずは王族から先に殺す。だから逃げるなよ？」

じゃあな、とガルムは手を振り、闇の奥へ消えていった。

「……」

その後姿が消えるまで、ヴァンは警戒態勢を解く事はなかった。いや、正確には動けなかつたと言つた方が正しかつた。

それ程まで、ヴァンにとってはガルムは脅威に感じられたのだ。

「俺に、あの男が、倒せるのか……？」

それが、この夜、ガルムに抱いたヴァンの思いだつた。

## 大会「一田田終了」（後書き）

ふい～。

とりあえず、一田田終了～と。  
久々に戦闘のないシーンでしたが、新しいキャラまた出しちゃいました。  
した。

次からまた戦闘シーンの連続だと思うのですが、うまく書けるもの

かと心配気味です。

まあ、自分なりに書くしかないんですが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

外から戻ったヴァンは、誰が見ても分かるように考え込んでいた。

「どうした、ヴァン殿。何か考え方か？」

「ええ、少し、ですね」

そしてヴァンは少し迷った素振りを見せた後、

「王族の暗殺を実行しようとしている奴が分かりました」

その言葉を前に、一同に動搖が走る。

「それは、一体……」

ヴァンは少し間を置いた後、

「時雨さん、前に言つてましたよね。あの地域の傭兵の気配がする人物を見たと」

「ああ」

「彼ですよ。王族の暗殺を依頼された男といつのは」

「本当か！？」

「ええ。さつき外で会つてきました。彼自身は依頼には乗り気ではなかつたようですがね。正確には暗殺の件に関してはどうでもいいといった感じでしたが」

「どんな男なのだ？」

「……一言で言えば残忍で、目的よりも過程を楽しむ性格です。正直言つて、強いですね」

「彼は試合でボクと戦う事を希望していたようですね」

「その前に彼を捕まえないと！」

そんなシグヴァの言葉に、ヴァンは首を横に振り、

「いえ。あの男は、ボクとの戦いを第一に考えているようでした。もしそれが達成されないような事が起これば、先に王族を殺す、と念を押してね」

「そんな事が……」

「要するに、ヴァンがその男に勝てばいいだけじゃない。勝算はあ

るのかしら？」

「正直、分かりません。最初から全力でやるつもりは思つてますが」「まあ、どつちにせよ、まずは彼の前に明日の第三試合ですね」

「その必要はありません」

「どうしてですか？」

ショルの言葉に、

「あの男は、ボクが戦う予定だった選手に怪我を負わせたようです。多分ボクは不戦敗で、自動的に第四試合での男と戦う事になると思います」

あの男が負けなければの話になりますが、とヴァンは付け加えた。

そして翌日。

「皆様、大変長くお待たせしました」

舞台上に上がった審判がマイクで喋る。

「少しトラブルがありまして、ヴァン・ガルド選手と戦う予定の選手が戦闘不能となりました。よつて、第三試合、ヴァン選手は不戦勝として第四試合に繰り上がる形となります」

その言葉に、会場はざわめいた。

また、事の次第を知っていたヴァンも、改めてそれを聞くと、なんとも言えない気持ちになつた。

そして、第三試合が始まった。

各自順調に試合が進む中、ついにその男が姿を現した。

「次、ガルム・ヒューガ選手、舞台上に上がつてください」  
その声と共に、その男が出てきた。

ガルムは舞台上に上ると、対戦相手を見る。

「さてと。ちょっとは楽しませてくれるんだろうな……」

そして、審判の合図と共に試合が始まった。

ガルムは手で拳銃の形を作り、人差し指を対戦相手に向かへ

「おらよつ

その声と同時に、人差し指の先から気の弾が発射された。

それを対戦相手はかわしたその先に、二発目の弾が迫っていた。

「喰らうものかつ！」

対戦相手は氣で構成された鎧鎗のようなものでそれを弾くが、

「なかなかやるじゃないか。ならこいつはどうだ？」

言つと、ガルムは今度は両手を拳銃の形にし、

「そらそらそらつ」

両手で交互に気の弾を発射していく。

だが、対戦相手もそれを器用に弾いていく。

しかし、連續で発射されている事もあって、なかなかガルムに近づけない。

「はあ……てめえもつまらねえな。」

そう言つてガルムは片方の手に気を集中させ、

「らあつ！」

銃弾と言つには大きすぎる、大砲の弾のよつな大きさの気の塊が対戦相手に襲い掛かつた。

それを避ける事は敵わず、対戦相手はまともにそれを受け、場外まで吹き飛んだ。

「……じょ、場外！ガルム・ヒューガ選手の勝ち！」

「あれは……」

「ガルムは、見た通り、氣そのものを銃弾や大砲のように発射する放出系を得意技の一つとして持つています」

「赤い髪の色とその技から、赤髪の射手とも呼ばれていたそうですが

「ですが、まだあれでも本気じゃない」

「あれでもなんですか? ヴアン先生」  
サラの問いかけに、ヴァンは頷く。

「あいつは、その気になればテレビや漫画であるような大口径のレーザーのような弾も出せます。しかし、今回はあれしか使ってない」

「それで、そんなあいつに勝てるのかしら? ヴアン」

「今回ばかりは、やつてみないと分かりませんね」

そんな会話をしている時、ガルムは、

「少しあこいつらみたいにつまらない試合じゃなく、けやんと楽しませてくれよ? 蛮」

クッククックと、喉で笑いながら呟いていた。

そして、第三試合も進んで行き..... 第四試合。

「次、ヴァン・ガルド選手とガルム・ヒュー・ガ選手ー」  
呼ばれたヴァンは、舞台に向かっていく。

「大丈夫ですか? ヴアン先生」

そう言われたフランに、

「まあ、ベストを尽くしますよ」

ヴァンは顔だけ振り向き、苦笑いを浮かべながら手を握り合って、そのまま舞台の方に歩いていった。

## 本戦3回戦（後書き）

遅れましたが、新作投稿しました。  
つか、これから展開どうしよ。

とまあ、個人的な悩みはさておいて……。

個人事情によりやる事が増えたので、投稿期間は少し?長めになる  
かも知れませんが、それでも読んでいただければ幸いです。  
意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

舞台に立つ一人。

そして、

「よう、蛮。戦う準備はできたか？」

「一応、貴様を倒す気ではいるさ」

そう言つて、互いに距離を取る両者。

ヴァンは気を集中させ、体の周囲に白い光を纏わせる。

「ん？ なんだそりや？」

言いながら、両手を拳銃の形に構えるガルム。

「それでは、いいですね？」

審判は片手を高く上げ、

「試合、開始！」

同時に手を振り下ろし、試合は始まった。

ヴァンはその合図と同時にガルムに向かつて走る。だが、

「おいおい、真っ直ぐ走つてくるだけかよつー？」

言いながらガルムは両手の人差し指から連続で氣弾を発射する。だが。

その全てがヴァンの光に無効化された。

「つて、なんだよそりやあつ！」

ガルムは驚きながら、そして笑いながらも次々と氣弾を撃つが、その全てが無効化される。

そしてヴァンはガルムの目前に迫り、

「せあつ！」

軽く飛んでからの、頭を狙つた蹴り。

だが、それをガルムは腕でガードする。

しかしそれでも、ヴァンは連續で徒手空拳による連續攻撃を続ける。

だが、ガルムもその全てを腕で掌で足でガードし、決定的なダメージを受ける事はなかつた。

そしてある程度の攻防が行われた後、両者は一寸距離を置いた。

「……どうやら、その白いのは俺の弾を無力化する何かみてえだな」「……」

「そいつはちと厄介だな。それがある限り、俺は氣で攻撃する手段がないと……」「……」

ヴァンは両手を肩の位置まで持つていき、やれやれのポーズをした。

だが、

「でも思つたかよ！？」

ガルムは片方の指一本に氣を集中させ、その一点に氣が集まり始める。

（おそらくあれはBクラス程度の攻撃。今までは防げないだろうな。だが……準備はできている！）

ヴァンは氣を集中させていた左の拳と、右の掌を胸の前まで持つていき、

「コウ！」

その声と共に、胸の前で右の掌に光る左の拳を打ち合わせる。すると、左の拳に集まっていた光が一気に左腕全体に広がり、同時に青白い紋章のようなものが左腕全体に浮かび上がった。

「なんだそりや！？」

言いながら、ガルムは指の先に集まつた氣を収縮し、それを撃ち出した。

大砲の弾程の大きさで撃ち出されたそれは、ヴァン目掛けて飛んでいく。

そして、

「らあっ！」「

ヴァンはそれを左腕で弾いた。

「ねこねこ、マジかよ」

ガルムはその光景を呆気ながら見ていた。

「言つておくが、その攻撃はこれには通じないぞ」

Г Г

そんな戦いを、観客席で見ていたサラとフランは目を丸くして見ていた。

だが、

「ああ、おれを出でたな」

「フフフ。面白くなつてきたじやない」

「あの、三人はあれが何か知つてるんですか?」

「あらが、ガトノの帶枝の一つがね

シェルが説明をする事にした。

「確かに、名前は英雄の光と言つてましたね。全て希望の光つて意味だと本人は言つていましたが、

## 「英雄の光」

「あれは左腕限定ですが、Bクラスまでの攻撃を無効化する事ができます。アンチ能力者の異名を持つ原因となつた技術の一つですね」「更に、身体能力も上がります。例で言うなら、マシンガンの弾程度なら普通に避けられますね」

その言葉通り、

„...מִמְּלֹאָה מִלְּמֹלָאָה מִלְּלֹאָה מִלְּלֹאָה...“

ガルムは両手で弾を発射し続けるが、それをヴァンはそれらを田で追い、そして全てを避ける。

そしてガルムに肉薄し、

「せあつ！」

ガルムに拳を当てよいつとし、

「ぬあつ」

それをガルムが防いだ、と思つた時にはヴァンの姿はそこにはなく、

「つりあー！」

側面から、頭部を狙つたヴァンの蹴りが放たれる。

今度はガルムの反応が遅れ、

「があつ！？」

蹴りがまともに側頭部に入り、ガルムは吹き飛ばされる。

同時に、

「これで、終わりだつ！」

ヴァンは左手で空を殴りつける動作をした。

すると、その左手から増幅された気の塊が発射され、追い討ちの  
ような形でガルムに直撃した。

だが。

「ててて……やるじやねえか、蛮」

起き上がつたガルムはよろけてはいるものの、顔そのものは余裕  
で、むしろ笑つてすらいた。

「そうじやねえとなあ。小競り合つて、喧嘩、戦争。争い事つてのは  
こつじやねえとなあつ！！」

高々に言い放ち、右手をまた拳銃の形に構える。

だが、今度はその腕に左手を添えて、

「あれは防がれたが、コイツならどうだ！」

気の集中された右手の指が光り、

「うらあつ！」

そこから、それが発射された。

弾。

そう表現するには薄すぎる威力、正にレーザー砲のようなものが

ヴァンに向けて撃ち出された。

「なつ！？」

ヴァンはそれを避けるが、その砲撃と呼ぶべきものは観客席の方に向かい、

ドオオオオオンッ！！

幸いにも軌道はそれで観客席の方には向かわず、舞台を囲つている壁にその砲撃は当たつたが、壁はあっけなく崩れ落ちた。  
(まずい。あのが観客席に向かつたら……)

「まだまだ行くぜっ！」

そして、再度ガルムが気を集中させ、

「これで、どうだあっ！」

再度、砲撃が放たれる。

「いけない！」

それを今度は避けず、左腕で耐えようとするヴァン。

だが、それでも耐え切る事敵わず、ヴァンはその威力に負け、後方に吹つ飛んでいった。

「ぐ……」

ヴァンは何とか立ち上がつたが、今にも倒れそうな頼りない立ち方だった。

(これは……少し困つた事になつたな)

もし今の砲撃をもう一度喰らえば、自分に勝ち目はない。  
そう思つたヴァンだったが、

「……」

ガルムは、氣の抜けた顔でヴァンを見ていた。

そして、

「てめえ、今試合の勝ち負けより、観客を優先したろ」

「……」

ヴァンは沈黙を取るが、それをガルドは肯定と受け取り、

「はあ、戦つ気が失せた。しらけたぜ」

そう言つたガルムはヴァンに背中を向け、舞台を降り、

「おい、審判さんよ。俺の負けでいい」

「は、はい。勝者、ヴァン・ガルド選手！」

その判定が下つた瞬間、会場にまた歓声が響いた。

「おい、蛮」

舞台から遠ざかる姿はそのまま、ただし顔だけヴァンに向か、  
「こんな舞台に縛られたお前はよええ。今度はルール無しの戦場で  
戦いたいもんだな」

「……俺が言うのも何だが、任務の方はいいのか？」

「別に構わねえよ、そんなの。それよりも、久々に戦えて嬉しかつ  
たぜ、蛮」

そう言つて、姿を消していったガルム。

「蛮、蛮、蛮、何度もそう気安く呼ぶんじゃねえよ  
ヴァンのその呴きは、誰にも聞こえないまま空に消えた。

ふう、とりあえず書き終わりました。

中の表現力という引き出しに限度がある。

せいかうおぐ書きたいなあ」とか今的心境です。

明日からまた仕事なので、今この先どうするのかまたたく間に決まってないので、次がいつ投稿できるかはまったくの未定ですが（笑）笑える状況じやないんですがね。

改めて見てみたら、投稿した時のユニークが100人を超え、17の方々にお気に入り登録をしてもらい、実際嬉しい限りです。書き手にとって、読み手がいるというのは何よりの励みになりますので。

「お疲れ様でした、ヴァン先生」  
ロビーで、皆から労いの言葉をかけられるヴァン。

「だが、あのガルムとやらだが。暗殺の件はどうなったのだ？」

「本人はもうどうでもいいと言つてましたね。任務の事は本氣でどうでもいいと思つてたんだじょう」

「これで、安心して大会に挑める訳ですね、ヴァンさん」

「その件ですが……ボクは辞退しようかと思つてます」

「……え？」

思わずヴァンの一言に、皆啞然となつた。

「それは……どうしてですか？ヴァン先生」

「そもそも、ボクが出る理由は、暗殺を未然に防ぐ事。それが解決した今、もう目的は達しましたからね」

「ふうん……でも、なんだかつまらないな）。もっとヴァン先生の活躍する場面見たかったのに」

「ハハハ、もう十分見れたでしょ？」

「そんな会話をしている最中に。

「大会を辞退？それは少し困るんだが」

「他からそんな声が聞こえ、そちらを向くと、

「俺としては、あのガルムに勝つたあんたに少し興味が沸いてね。

決勝戦で戦つてみたくなった」

喋り続ける、金髪の若い男がいた。

「ヴァン先生、この人、前回の準優勝者です」

「そういう事。あんたが本来三回戦で戦うはずだった相手は、前回俺を決勝で倒した男でね。できればあんたとその男が戦つて勝つた方と俺が戦うつてのが俺のストーリー的には盛り上がつたんだが」

「それで、ガルムとはどういう関係なんですか？」

「何、あの男は傭兵の間では噂が立つ程強い男だろ。それを負かし

たあんたに興味が沸いたつて訳さ

「負かしたというより、ガルムの方が勝手に試合を放棄したんですね

がね

「どつちでもいいわ。ここまで勝ち上がってきたって事は、それなりに腕はいいんだろ。頼むよ、辞退なんかしないで決勝で俺と戦おうぜ」

「……」

どつしようか。

ヴァンは心の中でどつ思つた。

（別に断つてもいいのですが、何だか熱血漢タイプで、後がいるさそうですね……）

「ヴァン殿。この方もどつ言つていいのだし、決勝に出てみてはどうか？」

「時雨さん、あなたもどつ言こますか」

「別に減るものではないのだし、いいではないか」

「はあ……仕方ないです」

「よし、そつこなくちゃなー！」

男はヴァンの手を握り、上下に振つた。

「俺はグレイ・ベース。グレイつて呼んでくれ

「ボクはヴァン・ガルド。ヴァンで結構です」

「それじゃ、明日の試合もあるし、俺はこれで退散する事にするさ。あんたもゆつくり休めよ」

じゃあな、と片手を振り、グレイはその場をあとにした。

「ヴァン殿、それで明日の試合、どつ戦うのだ？」

「どつと言われても……相手の戦法次第ですね」

「ふむふむ。明日の試合、ヴァン殿とグレイ殿の戦いが楽しみだ」

時雨は、ウキウキといった感じで一人盛り上がつてゐる。

「そういえば、あのグレイって選手、ヴァンが一回戦で戦つた人が

いたじゃない？」

「ええ」

「あの女の人、グレイの弟子だって聞いてたわよ」

「だとすると、同じ、もしくは類似する武器の可能性が高いですか」

「どちらにしても、相手の出方を待つのみですね」

「……」

そんなヴァンの思考を、まじまじと見つめるアリエル。

「ん？ どうしたんですか？ アリエルさん」

「あなた、変わったわね」

「と言つと？」

「昔のあなたは、あの白い力、英雄の光を使って、相手がどんな武器でどんな攻撃をしてきても問答無用で倒していつていた」

「そんなあなたと今のあなた、随分違うと思つただけよ」

「あの力は少し反則気味っぽいので、いつも試合ではあまり使いたくないんです」

「とか言いながら、あなた一回田は英雄の光に頼りつきりじゃない」

「それを言われると、返す言葉もありませんね。次の決勝ではどうなる事でしょうか」

確かに、ヴァンはどうしても普通の能力で勝てそうにない場合、最後の手段として白い光の力を使つていた。

だが、それは絶対に負けられない理由があつたからで、その理由が無くなつた今、

（憂いも無くなりましたし、決勝では、あれに頼らない戦法でやってみるのもいいですね）

そんな事も考える余裕ができていた。

「そういえばヴァン先生。英雄の光ってネーミング、どうやって考えたの？ それに試合中は「ウウって叫んでたけど」

「ああ、戦争中は自分にうつて、あの光は正に希望そのものだったんですよ。だからそんな名前を付けたんですよ」

「それと、光は極東の方では「ウとも呼びますので、使う時はつい

クセで「コウ」て叫んでしまうんですね

「でも、すごいですよね。あんな大砲みたいな攻撃も防いでしまうんですから」

「あの状態の左腕は、Bクラスまでの能力を無効化する事ができるんです。気の消耗も少しありますし、数十秒は気を集中しなければいけませんから普段はあまり使えませんが」

「それに、ヴァンさんは戦争の時はいつもシン・コウを使ってましたしね」

「シン・コウ?」

「それはコウの上位版みたいなものですね。極東の言い方で真の光と言つのですが。Aクラスの攻撃も無効化できますが、発動まで約5分はかかりますから、使いづらいんですがね」

「ふうん……」

「まあ、明日の決勝では、一度普通の能力で戦つてみようかとは思つてますよ。どこまでグレイに通じるかは分かりませんがね」  
苦笑を浮かべながら、昔ならありえない思考に、ヴァンは驚きながらも、楽しんでいた。

そんな気分で戦いに望む。

それはヴァンにとって、新鮮なものだつた。

「それで? 何か策はあるのかしら?」

「相手の出方や能力にもよりますが、接近戦になるなら考えはありますね」

「フフフ……。どんな試合になるか、楽しみにしてるわよ? ヴァン」

「まあ、勝つか負けるかは分かりませんがね」

そんな談笑をしながら、大会の一羽は過ぎていった。

## 大会「日田終了」（後書き）

さて、一二日目が終わりました。

ラストバトル、相手がどういう技を使うのか、ヴァン自身にどういう戦い方をさせるか等の構想は練つてはいるので、今回のは拠点編みたいな感じです。

ただ、どういう書き方にするかはまだ決めてませんが。

問題は、この大会編が終わってから次のストーリーをどうするかを決めてないという事なんですね。

早く構想を練らないと。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会決勝戦

「さて、皆様。いよいよ決勝戦です」

舞台の中央で、審判が観客に呼びかける。

「どちらも激しい戦いを潜り抜けてきた猛者です。いい試合を期待しましょう」

「では、双方とも舞台に上がってください」

その声とともに、控え室から一人の選手が舞台に向かう。

一人はヴァン・ガルド。

とある学校の教職員にして、元傭兵の格闘者。

もう一人はグレイ・バース。

前大会に準優勝者としての肩書きを持つ、金髪の男。

二人は舞台に立つと、会場が歓声に包まれた。

「ヴァン。お前がどんな戦い方を見せてくれるのか、期待してるぜ」

言つと、グレイは両手に剣の鞘のよつな物を持ち、

「期待通りにできるかどうかは分かりませんが、善戦しますよ」

それに対して、ヴァンは身構える。

「両者、準備はいいですね？それでは、開始！」

その声と共に試合は始まった。

「行くぜっ！」

声と共に、グレイの両手の鞘から刃が出現し、ヴァンに走り、迫

ろうとする。

(二刀流ですか！?)

それに対し、ヴァンは電流を体中に走らせ、

「せりやあっ！」

グレイが右手で放つた袈裟切り。

だが、それをかわすヴァン。

しかし、更にそこから左の刃で横に薙げりとする。

その動きは流石とでもいふべきか、一撃田と一撃田に隙がなかつた。

普段のヴァンなら一撃目は避けられなかつただろう。だが。

「……今、お前何した？」

ヴァンは、一撃目の横薙ぎをかわし、後方に飛んでいた。

「今の攻撃、見てから普通にかわしたのでは間に合いませんでした。

「簡単な事です。本が動くのが、遙かに微弱な電気信号だ」

るからです。ですが、今はそれを手動で行っています」

手動で  
たど？」

見て、一撃目が来ると分かつた瞬間に、脳から体に流れる電気信号を雷属性の能力を使って早め、通常より早く、避ける動作を行いました

「 分かりやすく言えば、見て、頭で考えながら同時にその動作を行える、つまり今のような俊敏な動きができる訳です」

「それ程でも」

やつて極端せつせんぐ無論で何かい合ひ、

これがから  
引く奴の事には口付け

グレイは自前の二刀を使い、上下左右あらゆる方向から斬撃の連打を繰り返していく。

だが、ヴァンも能力による体術を使い、巧みにそれらをうまくかわしていく。

その間にもヴァンも反撃を仕掛けようとするのだが、片方の刃で防がれ、その間に片方の刃で反撃させられ、うまく攻撃があたらな  
い。

そんな攻防が続き、

「うらあつ！」

グレイが片方の刃による突きをヴァン田掛けて行つ。だが、それをヴァンは紙一重で避ける。しかし。

「見える攻撃が避けられるならつ！」

グレイはヴァンの視線からもつ片方の刃を隠すように体を回転させ、

「見えないところからならどうだつ！」

背後から、ヴァンをその刃で斬るつもりする。

「つ！？」

ヴァンも、流石にこの攻撃は避けられず、片方の手を刃の前に持つていき、

そのまま受け止めた。

白く輝いた右手で。

「なあつ！？」

その光景にグレイの動きが一瞬止まった。

その隙にヴァンは左手を構え、その手に電気系の力を溜め、

「雷華崩拳！」

雷の属性を伴つた崩拳がグレイに炸裂した。

「ぐはつ！」

それをまともに喰らい、グレイは吹っ飛び、そのまま転がつた。

「な、なんだ今の白いの、それに今の技は……」

「白いものはボク自身の能力で、技は崩拳に雷属性の能力を上乗せしたものです！」

「なるほど。前者はよく分からんが……とりあえず動けねえ。まいつた！」

「グレイ選手が降参を認めました！よつて、今回の氣道大会優勝者、ヴァン・ガルド選手！……

審判の言葉に、会場が騒ぎ立つた。

「ふうん、結局あの無効化使っちゃったのね」「それ程、グレイ殿が強かつたという事だろ？」「まったく、あの斬撃は凄まじいものだつた」

「ヴァン先生、やっぱり強いな

「うん、すごく強いね」

「師匠、負けてしまつたか

「……あなたは誰ですか？」

「失礼。私はグレイさんに教わつてゐる者です。ヴァンさんと一回戦で戦つたと言えば分かるでしょうか？」

「ああ、あの時の」

「師匠は負けてしまつたようですが、あの顔を見ると、悔しいのとすつきりしたのが一緒になつてゐみたいですね」

「お主の師は、余程こういう事が好きなようだな」

「ええ。強い人と戦うのが師匠の楽しみでもありますから。今回は残念ながら負けてしまつたが」

そんな会話が観客席の一部で行われてゐる中、

「グレイさん、立てますか？」

「ああ、何とかな。しかし、あの一撃はまといつたぜ。あの背後からの攻撃で決まると思つたからな」

「ボクもあれは想定外でした。おかげで切り札を使つしかありませんでした」

「あれについては、じつちも考えてなかつたぜ。まさか刃を直接手で受け止めるなんてな。手、怪我してないか？」

「それについては問題ないです。あれは能力そのものを無効化する能力なので」

「なるほど。道理で気の刃が通じなかつた訳か。機会があつたらま

たやんつぜ」

「できれば簡便してほしいものですね。ボクは争い事は嫌いなので」

ヴァンは苦笑し、グレイはそんなヴァンに、

「それだけ強いのにもつたいたいない」

と言い、そんなこんなで大会は終了した。

## 大会決勝戦（後書き）

さて、書き終わりました。  
しかしどつちやけ、次は何を書こうか、まったく考えてません。  
何を書こうか。

何を書こうか。

大事な事なので3回（ ）  
とりえず、妄想……じゃなくどんなストーリーにしてみるか、頭  
の中で構想してみています。  
意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

## 大会終了、その後

大会が終わり、内容は授与式に移った。

会場がざわつく中、

「一位、グレイ・バース選手！」

言われて、グレイが王族の一人、ノア・シースの前まで歩いていく。

そして彼の前に行くと、

「グレイ・バース。今大会も惜しくも一位となつたが、その二刀の捌き、誠に見事であつた」

ノアはそう言つて、グレイに賞品を渡す。

「ありがとうございます、ノア様」

グレイは一步退くと礼をし、その場を去つていった。

「続いて、一位、ヴァン・ガルド選手！」

そして、ヴァンもまたノアの前まで歩いていく。

ヴァンが彼の前に立つと、ノアは品定めをするような目で、ヴァンを見据え、

「お主がヴァンか。軍から噂は聞いていたが。今大会、難儀であつた」

「もつたいないお言葉です」

二人は一言ずつの会話をすると、

「ヴァン・ガルド。今大会初出場ながら、よくここまで結果を残した。天晴れである」

ヴァンは頭を下げるが、ノアから賞品を受け取り、グレイと同じようにその場から去つた。

「さて。これで今大会も終わつた訳だが、各々の武術、氣術、どれもこれも目を見張るものがあった。各自、よりいつそう精進しても

らいたい」

「では、これにて閉会式を終えるものとする。」

「ヴァン先生、優勝おめでとうござりますつー。」

「優勝おめでとうござります。」

「ありがとうございます、一人共」

「次またこのような事があれば、教えてもらいたいものだな、ヴァン殿」

「そうですね」

「シールとの決着を決めるにはいい舞台だわ」

「ボクが参加するかどうかは分かりませんがね」

「ヴァン、今度やる時は負けないぜ」

「私も、師匠やヴァンさんに負けないよう努力します」

「そんな会話をしながら、会場をあとにする一同。」

だが。

「すいません、皆さん。先に行つてもらつていいですか?少し急用

ができたもので」

「そう言って、ヴァンは皆と別れ、

「……そこにいるんだろう?ガルム。出て来い」

言われて、建物の影から姿を現したのは、ヴァンの想像どおり、ガルムだった。

「今更何の用だ?」

「何、優勝おめでとう、の一言でも言つてやるつかとでも思つてな

「……」

「まだ、あいつを殺した事を根に持つてゐるのか」

「あの時、立場はお互い敵同士だった。状況を見れば仕方の無い事だ。が、納得はできない」

「ま、好きに考えりやいいや」

ガルムはため息をついた。

「王族の暗殺。お前が関わっている事は聞いたが、一体何故今更そんな事を?」

「さあな。依頼した奴に聞いてくれ。俺は依頼され、それをこなそうとした。ただそれだけの事だ」

「そいつの名前は?」

「おいおい、そこまで教えられねえな。一応俺の依頼主様だぜ?まあ、もしかしたらの話だが、あの戦争の再来を望んでいる奴か、その集団がいる、のかもしれねえなあ」

「お前はどうなんだ」

「俺か?俺は単なる傭兵さ。依頼があれば動いて、それをこなす。ただそれだけさ」

「……」

「お互い、縁があつたらまた会つだろ?よ

「じゃあな、そう言い残してガルムは去つていった。

「あ、ヴァン先生、遅いー!」

「すいません、遅れました」

ヴァンは先に行つていた一同に追いつくと、一言もひき合つて、いつもの日常に帰つていった。

彼にとつての一つの騒動は、とりあえず終わりを迎えた。だが。

彼の過去に関わる者達が起こす騒動にまた関わる事がないとは、少なくとも言い切れない。

その時、ヴァンが何にどんな形で巻き込まれるかは……まだ誰も知らない。

## 大会終了、その後（後書き）

いつもより短めになりましたが、投稿終わりました～。  
……本気と書いてマジな話、次のストーリーどうしよう。  
まあ、どうにかなりますか（笑）  
笑えないねえ。

さて、これで一つの物語が終わつた訳ですが。  
次はどんな風にしようか、ちと思考中です。  
もしかしたら打ち切りでこのまま終わりつてな可能性も……あまり  
考えたくないなあ。  
もしまだ見かける事があれば、意見や感想、評価など、よろしくお  
願いします。

昼休みの屋上。

そこには適度な口差しがセレ、そこでフランスにもたれていたヴァンは、こつものこの平穏な日常を楽しんでいた。

もつとも、前とは学校での授業の内容が少し変わったが。

大会で優勝した事もあって、普段は関わりのない生徒からすらも「実習して欲しい」とせがまれるのだ。

ヴァン自身は少しでも授業が楽しくなるのなら、と要望に答えて、言われる度に能力を使っているのだが。

「にしても、いつも毎日続くと疲れますねえ」

苦笑しながら、ヴァンは呟いた。

そんな時。

「ヴァン先生～」

声の方を振り向くと、フランの姿がそこにあった。

フランはヴァンの隣まで行くと、

「先生、今日も実技お疲れ様です」

「わざわざありがとうございます」

更に。

「フラン、行くの早いよ～」

遅れて、扉の向こうからサラの姿も出てきた。

「二人とも、どうしたんですか？」

「いえ、少し気になる事があったので」

「気になる事？」

サラは息を整えると、じつとヴァンの目を見て、

「ヴァン先生はあの三人、時雨さんとアリエルさんとショルさんと

昔からの知り合いなんですね？」

「ええ。最初に知り合つたのは、ファルガ地域でボクが傭兵をしていた時でしたね」

「その時、四人はどんな関係だつたんですか？」

「そうですね……時雨さんはボクと同じ傭兵、シェルさんは教会所属、アリエルさんは気分そのまま自由奔放といった感じで、皆バラバラでしたからね。味方の時もあれば、敵だつた時もありましたよ」

「……それが今ではあんなに。シェルさんとアリエルさんは除いてですけど、それでも皆仲はいいですよね」

「そうですね」

「敵だつた時もあつたのに、どうしてそれだけ仲がいいんですか？」「まあ、色々ありますね」

「……よかつたら、教えてもらつてもいいですか？」

その質問に、ヴァンは軽く空を見上げ、

「あの頃は、色々ありましたね……」

昔を思い出すように語り始めた。

ヴァンが生まれた町。

店や露店から品物が奪われ、それを行つた者に店主が暴力を加える。

だが、そんな光景は日常茶飯事。  
脅し、喧嘩、争い。

それらが絶えない、そんな場所だった。

ヴァンは生まれつき、特殊な能力を持つていた。

それは、集中すると体の周囲が白く光り、全ての能力を無効化する能力無効化能力。

そのおかげもあってか、普段から能力での争いに巻き込まれても、生き残る事はできた。

突然の事だつた。

町に対する、無差別のAクラスの氣による攻撃の連打。町の住人はなす術も無く、ただ屍と化していつた。

女も男も老人も赤子も関係無く。

そして。

その日を境に、その町は地図から姿を消した。

「これは酷いな……」

「町、いや、町だつた廃墟に立ち寄つたある傭兵は、一言だけ、そう言つた。

その場に広がるのは、文字通り廃墟と化した町の残骸。その傭兵は、ガレキとなつたその場所を歩いていた。

別に用事があつた訳ではない。

こういう場所にも、何か拾い物があるかもしれない。

そう思つた事での行動だつた。

そして。

歩いていた傭兵は。

「お前、誰だ？」

「一言だけ聞いた。

あまりに不可解だつたから。

周囲は死体だらけ、そしてガレキの山。

そんな中、一人でポツンと立つてゐる少年がいた。

その少年は、何をするでもなく、ただぼうつと立ち廻りしてゐた。

少年は傭兵の方を向くと、

「俺のいつもを、こんなにしたのは、何なんだ？」

傭兵は黙り込んだ後、

「……さあ、分からんな。この一帯は戦争、争いが盛んでな。こんな光景も珍しくもない。誰がやつたかなんて、それこそ分からん

「じゃあ、戦争が、俺の町を、こんなにしたのか？」

「そう言つなら、そうかもしれんな。一度目になるが、お前、誰だ？」

「……この町に住んでた。少し前に何かが色々降つて来て、皆死んで、壊れた」

「そうか。生き残つたって訳か。運が良かつたな。いや、こんな時勢に生き残つて、運が悪かつたって言つべきか」

「おじさんこそ誰なんだ？」

「俺か？俺は、どこにでもいる傭兵さ。名前は　」

傭兵は、自分の名前を語つた。

「　、戦争が無くなるにはどうしたらいいんだ？」

「それは、どっちかが勝つてどっちかが負けるしかねえな。ただ、どっちにも言い分があるし、どっちが悪いとも決められないが。まあ、いつも勝つた方が正義なのさ」

「じゃあ、俺を連れて行ってくれ」

「何？」

「どっちかが勝つ事で俺の日常が戻るなら、その為なら何でもする。だから、それを教えてくれ」

「……お前、名前は

「名前はウアン」

「じゃあ、今田からお前は俺の養子にする。だから、俺の言つ事をちゃんと聞け。お前の願いを叶えたいならな。色々教えてやる」

「分かった」

「それと、ウアンじゃ呼びにいくから、俺が新しい名前を付けてやる。俺の苗字が賀戸だから……賀戸、蛮でどうだ？」

「ばん？」

「そうだ。お前は今日から賀戸、蛮だ」

「分かった」

それから、傭兵とヴァンの二人旅が始まった。

「つて、まずそこからですかあつ！？」

「……まづかつたですか？」

「いえ、ヴァン先生の過去も興味があるので、もう少し聞いていたいです」

「……それもそうね。ヴァン先生、続けてお願いします」

「分かりました。では、続けて……」

そして、ヴァンの過去から話は続く。

## 庸兵との田舎ご（後書き）

何とか過去の回想とこの手段を思いついて事により、今の時の流れの物語を一時中断する事に成功しました。

……全力でじめんなさい。——

この過去辺終わつたら書く（予定？）ので。

それでは、しばしの間過去の回想をお楽しみください。

意見や感想、評価等、いただけると幸いです。

## 一人の傭兵との別れと一人の傭兵の誕生

ヴァンと傭兵との一人旅が始まった。

傭兵は自分の仕事をこなしながら、その傍らで字や言葉、生活に  
関わる事等の一般常識から、気の扱い方や体術、武術に関する事も  
教えていった。

またヴァンも、それが自分の生きる目標になる事ならと、それら  
をどんどん吸収していった。

そんな中、

傭兵は自分の能力が無効化されるのを間近で見て、  
「そんな能力があるのか」  
と驚いたりもしていたが。

閑話休題。

時折、傭兵の仕事、つまり戦争や紛争にも手を出し始めたヴァン  
だったが、元々資質があったのか、彼はその才能を伸ばしていった。  
そんなヴァンにとって、この傭兵は教えられる師であり、親に近  
い存在だった。

その傭兵に、色々教えられる事は、ヴァンにとってある意味新鮮  
だった。

親のいないヴァンにとって、それは非常の中の幸福でもあった。

傭兵も、

「まるで本当に自分に子どもができたみたいだよ  
ヒュアンに笑いながら語りかけた。

そんな時、事件が起こつた。

事の始まりは、自分も傭兵として参加したとある紛争。

「相手には赤髪の射手がいるのか」

そんな咳きをもらしたのは自分の育ての親である傭兵。

その咳きには、苦々しさが混じっていた。

「そいつ、そんなに強いのか？」

「ああ。強い奴には通り名が付く。中でも彼は別格でな。とても強

い」

そして。

「へえ。子連れの傭兵たあ、珍しいじゃねえか

「そいつと出会つた。

自分達と彼は敵同士であつたため、すぐに戦闘になつた。

そして。  
傭兵と赤髪の男との激しい闘争になつた。  
当時のヴァンの目では追いつけない程。

そして。

自分の育ての親でもあつた傭兵は死んだ。

赤髪の男の光の砲撃で、物言わぬ亡骸と化した。

「蛮、すまない。俺はここまでだ。今まで楽しかったよ。  
そう言い残して。

赤髪の男はヴァンに近づき、

「へえ。蛮つてのか、お前は」

「何で殺したつ！」

「何で？そりや、敵同士だからな」

「俺も、殺すのか？」

赤髪の男に対して、ヴァンはこれでもかといつ程の殺氣を出す。

「おいおこ。そんな小せえのに、なんて殺氣を出しあがるよ」

「そう言いつつ、男は右手を鉄砲の形にし、

「そりよ」

声と共に、指先から氣の弾が出現し、ヴァンに向かつた。

そして、ヴァンはそれをまともに喰らい、その場に倒れた。

「俺の名前は、ガルム・ヒューガだ。覚えとくといい。今のは挨拶代わりだ。もし生き残つてたら、また出会つ事もあるだろ？」

そういう残し、赤髪の男は去つていった。

それからしばらくして、ある紛争地域にて。

「おいおい、子どもがこんな所にいちゃ危ないだろ」

部隊がいる駐屯所に、一人の子どもが尋ねてきた。

だが、その子どもは、  
「俺は傭兵だ。あんた達、戦力が欲しいんだろ？俺を雇つてくれ」  
「雇う？お前を？」  
対応した部隊の一人はそう述べた後、大声で笑つた。  
「いいかい坊主。ここは危ない場所なんだ。近くに町があるから、そこまで送つていってやろ？」

「一度同じ事を言わせるな。俺は傭兵だ」

「お前みたいなちつこいのがね～。ハツハツハツ！」

男はひとしきり笑つた後、

「じゃあ、軽くテストしてやるよ。ほら、どこからでもかかってき

な

男は、軽く構え、そして、

ドッ！

ヴァンはその懷に一瞬で入り、その腹部に拳撃を放った。  
その衝撃に耐え切れず、男は数メートルふとんだ。

「……ってえ。お前、何者だよ」

倒れながらも言つ男に、

「これで三度目だ。俺は、傭兵だ。俺を雇え」

そう言い放つヴァン。

そんな騒動に、他の人も集まつてくる。

「おいおい、どうした？」

「いや、この子どもが、うちに傭兵として働きたいんだよ」

「それで、何でお前が倒れてる訳？」

「いやあ、それはな……」

「テストをすると言われた。だからふつとばした

「なんだよ、子どもに倒されたのか」

「ただの子どもじゃねって、マジで痛かつたんだからな……」

そんな会話が男達の間で続く中、一人の兵士がヴァンに近寄った。

「……ここはいつ死んでもおかしくない紛争地帯だ。お前に、死ぬ覚悟はあるのか？」

「死ぬ覚悟はない。元々生き残るつもりだからな。俺の中には、この争いだらけの非日常を日常に戻すという覚悟しかない」

「……」

兵士は少し黙った後、

「分かつた。お前を傭兵として雇う事を隊長に言おう。つこて来い

「分かつた」

「そついや、お前の名前はなんて言つんだ？」

「……」

賀戸蛮は、あの時、あの傭兵と一緒に死んだ。

今の俺は、あの人の子どもじゃない。一人の傭兵だ。  
だから。

「……ヴァン・ガルドだ」

「よし。ガルド、こつちだ」

兵士とヴァンは、一緒に隊長のいる宿舎へと歩いていった。  
そして、これが、一人の傭兵としての、ヴァン・ガルドとしての  
始まり。

## 一人の傭兵との別れと一人の傭兵の誕生（後書き）

さて、書き終わりました。

ヴァンを育てた傭兵とのからみはもう少し書きたかったのですが、引き出しの容量＆想像の少なさから、それはあまりうまく書けませんでした。○△

次からどんな風に書こうかと今更考えてますが、「まあ、なんとかなるだしさ」との楽観気味。

……もうちょっと何とかしりし血分。

とまあ長い話は無しにして。

これまで読んでくださった読者方、これからも読んでくださる読者方、これからもよろしくお願ひします。

意見や感想、評価等、あればお願ひします。

## 傭兵としての日々

部隊に傭兵として雇われ。

それから、ヴァンの傭兵生活が始まった。

そんな日々のうちの一つ。

「……今日はどこを攻めるんだ?」

「敵拠点の一つらしい。ヴァン、お前も出るんだろ?」

「ああ」

短く返事を返し、ヴァンは戦場に出る。

戦場に出たヴァンは、機械のように人を殺す。男も女も子どもも老人も関係なく、ただ殺す。

そこには、罪の意識も殺人の快樂も無かつた。

あつたのは、早く戦争を終わらせ、平和な日常を取り戻す、ただそれだけ。

戦場では、ヴァンは能力を利用し、Aクラスの能力攻撃をも無効化する英雄の光、と名前は本人が付けたが、それを身に纏い、戦つた。

そのため、彼の前にはあらゆる能力は無効化され、彼はアンチ能力者として名高い評価を得ていた。

もつとも、付けられた二つ名は戦場の白髪鬼といつ英雄とはかけ離れたものだったが。

そして戦いは続き、ある日常での会話。

「ヴァン、お前はどんな目的で戦争に参加してるんだ？」

名も知らない兵士にそう言われ。

「俺は、この戦争を終わらせるために戦争に参加した」

「戦争を終わらせるためにねえ……」

「そう言つあんたはどうなんだ？」

「俺か？お前と同じや。この戦争を、一日でも早く終わらせるためにな」

「そうか」

「その点、あの傭兵は異質だな。ビリヤが勝つつてより、争いそのものを楽しんでやがる」

「あの傭兵？」

「お前、知らないのか？最近うちに所属された傭兵なんだがな。確か通り名は赤髪の射手だったか」

「つー？」

「……どうした。顔が青いぞ」

「そいつは、今どこにいる」

「さあな。そこらで休憩でもしてるんじゃないか？」

言われ、その場をあとにし、目的の傭兵を探すヴァン。だが、その時は見つからなかった。

そして、とある日、戦場にて。

ヴァンは両の拳に気を集中させ、

「シン・コウ！」

胸の前で両の拳を吊り合せせる。

するとその光は体全体に広がっていき、両腕には紋章のよつたものが浮かび上がった。

そして、ヴァンは戦場へゅつくつと向かって行く。

「俺にそんなものは効かない」

言いながら、自分に放たれた能力による攻撃を蹴散らしていくヴァン。

そしてその歩みを止めず、いつも通りの虐殺をヴァンは行う。

そして時は経ち。

ヴァンの周囲には、敵兵の亡骸しか存在しなくなつた。

「これを毎日続けていれば、いつかは戦争がなくなるのか……？」

英雄の光を解除したヴァンは、その光景を見て、自問するよう言つた。

だが、それに答える者はいなかつた。

「さあな。どうだろうな」

否。

ヴァンに答えを返す者が、後ろにいた。

（生き残りか！？）

ヴァンは急いで振り返ると。

そこには。

過去に自分を育ててくれた傭兵を田の前で殺した、あの赤髪の男がいた。

「……貴様

「つと、待つた待つた。攻撃は無しだぜ」

両手を上に上げながら、敵意を見せないガルムに、ヴァンは不信感を持つた。

「あの時は敵同士だから殺したまでだ。今は同じ部隊にいるんだか

ら、仲良くしようぜ」

クツクツク。と喉で笑うガルム。

だが。

「あの人を殺したお前を許せると思うな！」

そう言いつつ、ヴァンは臨戦態勢をとる。

「まあ、そう言つなよ。それより、いつかは戦争がなくなるかつて言つてたな」

「……ああ」

「人は何かがあれば人と憎しみあう。それが人同士なら喧嘩や殺し合いで、町単位なら暴動に、そして国単位ならこんな風に戦争になる」

「人がこの世から消えない限り、戦争つて奴はこの世界から消えないのさ」

「だが、それでも。俺は、戦う。それが俺の覚悟だから」

「そうかよ」

ガルムはそう言つと背中を向き、歩き始めた。

「お前はお前のやつたいようにしたらいさ」

「待て。お前は何を望んでこの戦争に参加した？」

「俺か。俺はこの戦争そのものが面白くてな。それで参加した」

「面白いだと……？」

「結果よりも中身。それが俺なんだ。……俺も今日でこの部隊と契約が切れる。まあ、縁があつたらまだどこかで会えるだろ？さ」

「じゃあな。

」結果よりも中身。それが俺なんだ。……俺も今日でこの部隊と契約が切れる。まあ、縁があつたらまだどこかで会えるだろ？さ

」そう言つて、ガルムは去つていった。

「人と人との憎しみ……それが消えない限り、戦争はなくなるのか？」

そう自問するも、やはりヴァンには答える事ができなかつた。

だが、それでも、ヴァンは自分の中の覚悟と共に戦つ事を諦めなかつた。

「戦争と自分の覚悟ですか……」

生徒相手に聞かせるため、ヴァンは自分の経験を簡略化して、なるべく刺激的にならないよう一人に話した。

それでも一人にとつては十分刺激的な話になつたようだが。

「ヴァン先生は、戦争終結までそのままの覚悟で戦争に関わつたんですか？」

「ええ。自分で言つのもなんですが、並大抵の事ではありませんでしたけどね」

「……」

フランとサラの二人は、それに沈黙で返した。

「それで、続きはまだなのかしら？」

その場にいなはづの第三の声。

声のした方を見てみると……

「アリエルさん? だけじゃないですね」

そこは、アリエルと、時雨とシェルがいた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずですが?」

「ヴァンの知り合いだつて言つたら、校長先生が通してくれました」と、シェル。

「本当にあの人は……ところで、どこから聞いてたんですか?」

「ほほ最初からですね。盗み聞きしてるように悪かったのですが、

私達もヴァンさんの過去には興味ありましたので」

「それで? 続きはまだかしら?」

「……仕方ないです」

そして、ヴァンはまた語りだした。

何とか書を終わつましたが、何だか今回モヤつとした感じになつたな～と面白嫌悪。

次からもひとつうまく書きたいものですが。  
さて、次からどんな形で過去に入ろうかと、そんな事を考えてます。

意見や感想、評価等、あればお願ひします。

## 傭兵としての日々 とある吸血鬼との出会い

「最近、付近で吸血鬼が出るようになつたらしい」

「吸血鬼？」

駐屯所で休んでいたヴァンは、初めてその単語を聞いた。

「何なんだ、吸血鬼といつのは」

「お前、知らないのか？」

顔を知る程度の兵士に言われ、ヴァンは頷いた。

「吸血鬼ってのはな、一言で言えば、化け物だな」

「化け物？」

「ああ。身体能力は普通の人間よりも高くて、牙が生えている。何より、他人の気を吸うんだ」

「それは危険なのか？」

「そりやあな。気が少なくなれば人は疲労するし、完全に無くなれ死ぬ事だつてある」

そんな会話が、ヴァンにとつてのフラグだつた。

ある日、ヴァンは隊長に呼び出された。

その内容とは……

「ヴァン、最近近辺に吸血鬼が出没するといつ噂は知つてゐるな」「ああ」

「それでうちの部隊にも被害が出るようになつたから、教会と合同で吸血鬼を始末する事になつたのだが、その混成部隊との連絡が途切れた。様子を見に行つてほしい」

「様子を見に行くだけか？」

「連中が無事ならお前もその部隊に合流し、吸血鬼を始末してほしい。もし怪我人等がいるようであれば、行軍が無理なようなら連れて帰つてくれ」

「分かつた」

ヴァンは頷き、駐屯地を出た。

しばらく歩いて、ヴァンはその現場に着いた。  
鼻には鉄と死臭の匂い。

目の前には教会と軍の混成部隊だった者達の成れの果て。  
その中央に、彼女はいた。

死体の喉に牙を立て、血を啜る金髪の女性。

その光景は現実離れしそぎていて、ヴァンには神秘的な物に思えた。

と、女は血を啜るのを止め、立ち上がり、ヴァンの方を向く。  
改めて見ると、綺麗な女だった。

白のハイネックと紫のロングスカート。

金髪の髪は整えられ、顔立ちもよく、美人の部類に入る女性だった。

彼女はヴァンを見ると、

「あなたも私を殺しに来たのかしら？」

口元の血を拭いながら語りかけてきた。

「俺が隊長から受けた依頼は一つ。部隊が無事なら合流して吸血鬼を始末しろ。行軍が不可能な程度の怪我人がいるのなら連れて帰れ」「だが、見たところ部隊は全滅しているようだな。これでは再度隊長に指示を仰ぐ必要があるな」

「……私を殺しに来たんじゃないの？」

「その指令は受けていない。もつとも、これ以上被害が広がるようなら対処する必要があるだろうがな」

「ふうん……」

彼女はヴァンを品定めするような目で見ると、

「もう気は十分に取り込んだからこれ以上はいらないけど、彼ら弱すぎて運動にもならないのよね。あなた、付き合ってくれないかし

「どうこいつ意味だ？」

ヴァンは言いつつも、いつでもそれを発動できるようこじつておいた両の拳を構える。

「こいつ事よつ！」

言いつと同時に、彼女はヴァン田掛けて走つて来る。両手の十本の爪から氣を伸ばし、それは鋭利な刃物と化す。やはりやうくるか！

ヴァンは両の拳を胸の前で叩き合わせ、

「シン・コウ！」

両腕に紋章が浮かび上がり、ヴァンの体が白く光る。

「何、それ！？」

言いながらも、片腕を振るい、爪を振り下ろす。だが。

その爪はヴァンの腕によつて防がれる。

そして爪を手に取り、そのまま投げ飛ばした。

「きやあつ！？」

悲鳴を上げつゝも、彼女は空中で体制を立て直し、地面に着地した。

「……何なの今のは。私の爪が防がれた？」

「俺の能力だと言つておく」

「そつ……じゃあ、遠慮はいらないわねつ！……」

言つなり、彼女は再度接近し、再び爪による連続攻撃をヴァンにしかける。

だが。

「無駄だ」

その言葉通り、彼女の爪は、いくらヴァンの体を引き裂くといつしても白い光の前に防がれる。

そして何度も何度も爪による攻撃をしかけた後……

「ハア……ハア……ハア……まつたく。私の爪を防ぐなんて、反則じゃないの？あの兵士達は一癩ぎで全員殺せたのに」

息を切らしながら言う彼女に、

「そういう能力だから仕方がないだろ？それよりも、氣は済んだか？」

「え？」

「お前の爪による攻撃。俺を殺そうとする殺氣は籠つていたが、俺そのものを殺したいという殺意はお前からはまつたく感じられなかつた。そして今ではその殺氣すらない。どういうつもりだ？」

「どういうつもりと言われても……あなたは、食事をした事は？」

「あるが？」

「何かを食べる時、いちいち食材に懺悔の思いをかける？」

「かけないな」

「それと同じよ。私達吸血鬼は普通の人間と同じ食事をしなくとも済むけど、その代わり自然界にある氣を体に取り込む必要があるのよ。それで、生き物からそれを攝取するのが効率がよくて、一番いいのが人間だという、ただそれだけの事よ。今のは軽い食後の運動つて所からら」

「……言い分は分かった。だが、それイコールお前を野放しにするという訳にはいかないな。部隊に被害があつては迷惑なんだ」

「じゃあ、一つ提案があるのでけれど、いいかしら」

「なんだ」

「あなたの氣、吸わせてもらつていいかしら」

「……何故だ？答えると結果によつてはお前を殺す必要があるが」

「簡単よ。戦つてゐるうちに気がついたのだけれど、あなたの氣、何だか特殊で美味そつなのよ。少しだけ吸わせてもらつていいかしら」

「俺は餌か」

「一度だけでいいから、お願ひ、この通り」

敵だつたはずの女。

その女に手を合わされ、頭を下げられ、ヴァンは困惑していた。

だが。

その行為で部隊の被害が無くなるのならと思い、

「まあ、好きにしろ。ただし、少しでも敵意を見せるようなひ……」

「そんな事しないわよ。それじゃ、お言葉に甘えようかしら」

そう言つて彼女はヴァンに近づき、ヴァンの腕を取り、その腕に

牙を立てた。

「……っ」

痛い、と思つたのは一瞬で、麻痺作用でもあるのか、いくら牙と肌の間から血が流れようと、痛みを感じる事はなかつた。

そして数十秒経つた後。

「ふうああ……」

腕から口を離した彼女は、恍惚の笑みを浮かべていた。

「思つた通りだわ。あなたの氣、結構美味かも」

「そうか。なら、これから好きな時にいつでも吸わせてやる。条件を飲めばな」

「あら? 何かしら」

「今後一切、俺以外の人間には手を出すな」

「……あら、そんな事でいいのね。分かったわ」

「自分から言つておいてなんだが、いいのか? お前にとつては食事だろう?」

「最初に言わなかつたかしら? 気はこの自然全てに存在するのよ? そこから氣を抽出するくらい問題ないわよ。それに」

「それに?」

「これだけ美味しい氣を味わつた後に不味い氣を摂取する方が私にとつては嫌よ」

「そうか」

命令にはなかつたが、これで部隊に被害がいく事もないだろつ。

そう考へ、ヴァンはその場を離れようとする。

「待つてくれない? まだお互いの自己紹介もまだじやない」

「そう言えばそうだつたな。俺はヴァン・ガルド。傭兵だ」「私はアリエル・ブリュン。アリエルでいいわ」

「じゃあ、機会があれば、またどこかで会える事を祈るわ。私には祈る神がないのが残念だけど。じゃあね、ヴァン」

「……部隊と教会の連中には気の毒だが、結果は良しか。とりあえ

ず報告に戻ろうか」

そう言つと、ヴァンも駐屯地に帰つていった。

これが、自由奔放なアリエルと、傭兵のヴァンの出会つた最初の話。

「そうそう、そんな感じだつたわね。懐かしいわ」

「この吸血鬼は、そんなうらやま……いえ、汚らわしい事をヴァンさんに……」

過去を懐かしむアリエルと、そんな彼女を敵意丸出しの目で睨み付けるシェル。

「まあまあ、落ち着いてください一人とも」

「それで、アリエル殿はそれ以降、人を襲つてはいなか?」

「ええ」

「信じられないな。吸血鬼というものは、人を襲うというのが定番だというのに……」

「同じく」

「私もです……」

「本当でしようね……」

四者四様の対応を見せる四人に、

「まあ、時々ボクの気を吸わせていましたからね。もし他の人間を襲つていたと聞いていたなら、その時点でボクはアリエルさんを殺していましたよ」

「……本気で何気なく言つのが怖いわね、ヴァン」

「それで、他にほんなん話があるんですか？ヴァン先生」  
「そうですねえ……」  
言われ、ヴァンはまた過去の出来事を思い出していった……。

## 傭兵としての日々 とある吸血鬼との出会い（後書き）

大体の中身は決まっていたのですが、書く時間が〇・二〇  
それでも短時間で書けるという事は、中身が薄いのかな～と。  
精進せねば。

さて、次は「誰書」いうかな～」な気分ですが、正直だんだん頭の中  
の引き出しが無くなつてきました。  
本当に続くのか？

感想や意見、評価等いただければ幸いです。

## 傭兵としての日々 修道女との邂逅

とある日。

ヴァンは一人で敵軍の拠点を攻めるという任務を請け負っていた。  
味方はヴァン一人。  
敵は数十人。

数だけ見れば、どれだけ無茶で無謀な任務か、と思われるが、實際はそうではなかった。

実弾武器、鉄砲や戦車、大砲等も昔は使われていたが、所詮昔の話である。

現在はAランクの気による攻撃を扱う人間も増えたため、爆発の可能性があつたり持ち運びに不便な重火器を使用するより、それらを買う金で能力者数名を雇う方が遙かに効率がいいのだ。

そして目的の拠点も例外ではなく、重火器系統はほとんどなく、戦力はほぼ能力者だけであつた。

故に、アンチ能力者であるヴァンが制圧の任務を受ける事になつたのだが。

そしてヴァンが拠点着くと、戦闘、いや一方的な蹂躪が始まつた。あらゆる攻撃はヴァンには通じず、虐殺が行われていく。

そして、数刻経つた後、ヴァンは任務の完了を報告していた。

「さて、帰るか」

そう言い、ヴァンは帰路につく。

その途中、ヴァンは個人と個人の戦闘に出くわした。

片方は女性。

青い髪に、修道女の服を着たシスターらしき人物。

両方の指の間に計八本の白い刃の剣を挟み、それを使い、時々蹴撃等の白打も加えて相手と斬りあう。

だが、相手と共に互角のようで、なかなか勝負がつかないようだ。そして一方の相手は……

「あいつか」

（どういう理由かは知らないが、知り合いが巻き込まれているなら少し行ってみるか）

ヴァンは戦っている二人の元に近寄つていった。

「この吸血鬼がっ！ いい加減諦めなさい！」

「フツ、そう簡単にはいかないわよ！」

言いながらも、互いに一步も引かず、互角の戦闘能力を見せる。そして一旦距離を取つた後、

「せやあっ！」

「らあっ！」

掛け声と共に片方は爪で、片方は剣を振り上げ、相手に斬りかかろうとする。

そんな時、

「ちょっと待て！」

その間に割り込み、すでに発動させていた白い光を纏つた腕で、爪と剣を遮るヴァン。

「ヴァン！？」

「誰ですかあなたは？」

急に割り込んできた乱入者に、驚く一人。

「アリエル、久々だな。こんな形での再会になるとか思わなかつたが

「私もよ。久々に会えて嬉しいわ

「……あなた、一体誰ですか？」

三者三様の態度にて言葉を交わす三人。

そして、

「アリエル、ここは俺に任せて、さつとどこかへ行け

「えへ。ここから面白くなつてきたのに」

「軽口は止せ。俺の見たところ、一人は互角だ。このままでは消耗戦になつて、共倒れだぞ」

「……仕方ないわねえ」

「ちょっと、待ちなさい！」

「おつと、お前にはまだ動かないでもらおうか

言いながら、四本の剣を片手で鷲掴みにするヴァン。

「なつ！？」この剣は聖なる属性で精製された剣、邪なる者には触れるだけで傷がつくはずなのにっ！？」

「今だ、アリエル」

「分かつたわよ。また今度、機会があれば会いましょう」

そう言つて、その場を離れるアリエル。

「……一体、どういう事ですか？」

剣を捕まれながらも、敵意を隠そともしない女は、ヴァンに問い合わせただす。

「あの女は吸血鬼ですよ？……それにこの剣には邪なる者には触れるだけで傷がつく、それ以前に剣を普通に握っている事自体が信じられないのですが。あなたは何者ですか？」

「アリエル……あの女が吸血鬼だという事は俺も知つてはいる。事情により知り合いになつてな、敵でもないが味方でもない、そんなところだ」

「ちなみに、俺は正真正銘普通の人間だ。剣を掴めたのは、俺の能力に関係しているとだけ言つておこう」

「それで……あなたは私の敵ですか？」

「どうだろうな。あいつとは今言つたとおりの関係だが、あんたと

は初対面だ。故になんとも言えない」

「……私はシェル・バーナント。教会の人間です。負の気に染まつた存在を抹消するのが私の役目です。今のも教会側の私にとつては、負の気に染まつた存在をこの世から浄化するという、ただ当たり前の事をしていただけのことです」

「そうか」

「それで、再度聞きます。あなたは私の敵ですか？」

「俺からはなんとも言えんな。別に教会と敵対している訳でもないし、あんたともそうだ。故に敵になる理由がない」

「吸血鬼の味方をしているというだけでも立派な敵対理由ですが？」

「ああ、あいつとは互いに危害を加えないという意味で特別でな。他の奴なら黙つて見過ごしていたや」

「……」

シェルはしばらくヴァンを見据えるが、ふつとため息をつくと氣を緩めた。

その瞬間、ヴァンの握っていた白い剣が消え、指の間に挟んだ柄だけが残つた。

「吸血鬼と知り合いという件は見過ごせませんが、見たところあなたは普通の人間ですね。なら警戒する理由はあるにしろ、敵対する理由はありませんね」

「それはなによりだ」

シェルは指の間に挟んだ八つの柄を懷にします。

「じゃあ、俺も用が済んだ事だし戻らせてもらつ」

そう言い、拠点に戻ろうとすると、

「ちょっと待つてください」

「なんだ? まだ何か用か?」

「あなた、教会に入りませんか?」

「……どういう理由でだ」

「あなたは聖属性の能力は使えますか?」

「自分で言つのもなんだが、ほほ万能型に近いからな。練習すれば

使えない事もないだろ？」「

「なら、私と一緒に活動しませんか？強そうですし、あの白い能力にも興味があります。何より、私達と一緒に行動したら、吸血鬼に知り合いがいるなんて蛮行、すぐに間違いだと気づくでしょう！」「勧誘はありがたいがな。俺は傭兵で、すでに軍に雇われている」「それは残念ですね……」

シエルは残念そうな顔を浮かべ、しかしその後すぐに笑顔を浮かべ、

「では、傭兵として雇われた期限が過ぎたら、教会を訪ねてみてください！何、私の名前を出せば通してくれますよ」

「ああ、未来の可能性の候補として入れておこひつ。……そう言えば、まだ名前を言ってなかつたな。俺の名は、ヴァン・ガルドだ」「では、ヴァンさん。またいつか、機会があれば」

「じゃあな」

これが、シエルとの始めての邂逅だった。

「そんな事があつたんですか……」

フランとサラは目を丸くし、

「なるほど、そうして一人は出会つたのだな」

時雨はウンウンと頷き。

「言つておきますけど、今のヴァンさんは教職員になつて、いじはいえフリーなんですからね。機会があれば教会にいつでも来てくださいよ」

「どう返せばいいんでしょうかね」

ヴァンはシエルの誘いに苦笑いで返す。

「とにかくで」

フランが時雨の顔を見て話し出す。

「アリエルさん、シエルさんとくれば、流れでは次は時雨さんとの話ですよね。一体どんな話なんですか？」

「そうですね……あれは、珍しく大規模な戦闘で、特殊な形での二人との出会いでしたね」

そう言い、ヴァンは空を見上げ、話しおした。

庸兵とこのの田々 修道女との邂逅（後書き）

ゞも～。書き終わりました。

誤字あつたので、書き直しました。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

それは、とある拠点を攻める時の事だった。

この時はヴァンの他にも軍からの兵や傭兵が入り乱れ、敵拠点は乱戦になつた。

能力による攻撃が入り乱れ、あちこちから重火器の放たれる音が聞こえる。

そんな中、

「今の俺に得意技、必殺技はない」

そう言つて殴る動作をすると、その拳から大砲のような威力の気の塊が放たれ、その先の敵の群れが吹っ飛ぶ。

「なぜなら今の俺にとって、すべての白打が技になるからな。例えば」

今度は空高く飛び、両手を頭の上で組む。

「鉄槌！」

言つと同時に両手を振り下ろすと、両手から氣の塊が地面上に落とされ、その場にいた兵士が息途絶える。

そして着地すると、ヴァンに敵数人が殺到する。

だが、ヴァンは横に蹴る動作をし、

「鞭つ！」

その足から氣が鞭状にしなるよう放出され、敵がそれに当たり、吹っ飛ばされる。

「今だあつ！」

声と共に、敵がヴァンに向けて火の弾を放つ。

だが、

「効かん」

言いつつもヴァンは片腕で火の弾を弾き、

「大砲！」

言いながら空を殴る動作をすると、拳から気の塊が放出され、火の弾を放った敵にあたり、敵は息途絶えた。

「こんな事を続けていれば、いつかはこの戦争も終わるんだろうか……」

そんな思いを考えていると、

「おらあつ！」

背後から掛け声と殺氣と共に、剣が振り下ろされる。ヴァンは面倒臭そうに、それを避けようとする。だが。

ガキンッ！

金属と金属のぶつかる音がし、その剣撃は防がれた。「はあつ！」

ヴァンへの攻撃を防いだ主は、そのままヴァンを攻撃しようとした敵を切り殺す。

「大丈夫か？」

ヴァンが声のした方を向くと、そこには女性が立っていた。

紫の髪。

後ろは伸ばしており、紐でくくつて束ねている。

極東風の服を着ていて、腰には今防ぐのに使った刀の鞘をつけている。

「ああ。問題ない。別に避けられもしたんだが、一応礼は言つておく」

「いや、お主がそうであるならそれでいい。それよりも……」

女は周囲を見渡し、

「流石にこれだけの規模の基地となると、敵味方両方に結構な被害が出そうだな」

「ああ」

「そりいえば、まだ名を告げていなかつたな。私の名は真田時雨。

時雨で構わぬ

「俺はヴァン・ガルドだ。俺もヴァンで構わない」

「おつと、悠長に自己紹介をしている暇はなかつたな。敵はまだ大勢いる。気を引き締めねば」

「そうだな。お互い、生き残つたらまた話でもするか

「喜んで」

時雨は笑顔で返し、その場を去つていった。

ヴァンもその場を離れ、敵拠点の内部に入つていった。  
敵兵士も大勢いた。

中には能力だけでなく、重火器を使う敵もいたが、  
(銃口の向きを見れば、銃弾など避けられない事はない)

その思い通り、ヴァンは敵兵の放つ弾を避け、次々と敵を屠つて  
いった。

そして通路を進み、多くの敵兵を屠り続け。

「な、なんだ貴様は！」

「あんたがこの基地の司令官か」

言いながら、片手に白い光を集め始めるヴァン。

「ふん、殺そうというのか？このワシを。だが、そうかいくか！」  
言うと男は背後にあつた扉を開け、その奥に逃げていった。

「逃がすかっ！」

ヴァンをそれを追いかけよつと扉を潜る。

「ハア……ハア……ハア……」

司令官は、目の前に現れた男から逃げたが、もはやこの基地が陥

落寸前だと半分悟っていた。

だが、わざわざ負けるくらいない。

「どうせ負けは決まっている。アレを放ち、基地そのものを破壊してやる！」

そう言いながら、彼はある部屋へと向かっていった。

「さて、行き止まりのようだが？」

扉の奥、通路を少し走った先の部屋の中央にいた司令官を見て、ヴァンは問う。

「ふん、確かにここでの戦争はワシの負けのようだがな……貴様達も道連れだ！」

その言葉と同時に、部屋の片隅にあつた牢屋のよつな場所が開かれ、一体の何が出てきた。

「これは……」

それは、今まで見たことの無い、何かだった。

体長は普通の人間の数倍。

身体中が黒い体毛で覆われ、その風貌はゴリラと人間を合わせたようなものだつた。

「ふん。人間の気を負の方向に変化させ続けて生成した、まさしく怪物だ。お前も殺されてしまえ。行け！」

司令官は怪物に指示を下す。

だが、

「グウウウウウウ……」

怪物は、唸るばかりで動こうともしない。

「何をやつている！早くあの男を殺さぬか！」

司令官は怪物に怒鳴りつけた。

その声に、やつと怪物は反応し、司令官の方を向いた。

「そうだ！早くあの男を殺せ！」

喚く司令官だったが、怪物は何故か司令官の方へを歩いていく。

「そうだ！早くあの男を殺せ！」

そして司令官の田の前まで歩くと、片腕を振り上げる。

「お、おい。どうした。ワシはあの男を殺せと言つたのだ。ワシではなくあの男を……」

最後まで言つ前に、司令官は怪物の振り下ろした腕の下で、潰され、血まみれになつた。

「……どうなつているんだ? 「これは」

ヴァンも困惑を隠せず、動搖する。

怪物はその後も田につく物を手当たり次第に腕で拳で足で体全身のあらゆる部分を振り回して破壊していく。

「ひょっとして、自我がないのか?」

ヴァンは、吸血鬼の話をされた時、精神の崩壊と暴走の話を聞いていた。

負の気を長時間体に蓄積していると、精神が崩壊し、自我がなくなり、暴走する事がある。

「なら、これは敵だ味方だとか、そんな事じや済まなくなるな」

ヴァンは、田の前の怪物に対処する事にした。

書いてるうちに気がつくなりそうなので、とりあえず前編と書きました。  
これで三人目が登場した訳ですが、この後どうなる事やら（あまり  
考えてませんという意味で）……。

この後の構想は練ってはいるんですが、中身は空白のまま、どう書  
こうかと考え中です。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

## 傭兵としての日々 敵拠点での戦い（後編）

まず、最初に仕掛けたのはヴァンだった。

「大砲！」

言いながら、殴る動作をし、怪物に向けて氣の塊を放つ。

「ドッ！」

怪物にそれは当たったが、

「グゥウウウウウウ……」

怪物は少しよろけただけで、それ以上の衝撃はなかつたようだつた。

そしてその攻撃により、怪物の攻撃対象にヴァンが移つた。

「グアアアアアアツ！」

唸りながら、ヴァンに迫る怪物。

「おつとつ！」

繰り出されたパンチを避けるヴァン。

同時に、片足を思いきり振り上げ、

「落ちろっ……斧！」

その腕にかかと落としを決める。

「グルアアアアアツ！」

それは効いたのか、攻撃された片腕を押さえる怪物。だが。

再び怪物はパンチをヴァンに繰り出し、

「ふんっ」

それを再度避けるヴァン。

だが、その避けた軌道の先にもう片方の腕から繰り出されたパンチが存在していた。

「チツ！」

ヴァンには避ける暇がなく、それを受けながら後方に飛び、衝撃を受け流そうとする。

その時。

「ヴァン殿っ！」

声と共に、怪物の片腕に一閃が走る。

「グアアアアアアツ！？」

怪物の腕に一筋の傷がつき、怪物は一旦後方に下がる。

「ヴァン殿、ご無事か！？」

そう言い、ヴァンの前に立つたのは、先ほど分かれた時雨だった。「時雨か。とりあえず助かったと言つておひつ

「それは何より。だが、何なのだこいつは」

「この基地で生成された化け物だ。もつ自我がないらしく、放つておけば敵味方共に被害が出る可能性がある。よつてここで潰す」

「なら、私も助太刀いたす！」

そう言い、刀を構える時雨。

「急いで来たようですが、先に来られていたようですね、ヴァンさん」

その場にいなはずの第三者の声。

その声のした方を振り向くと、そこにはいたのは、

「シェル！？」

「教会所属、シェル・バーナントの名において命ぜる。穢れた負の異形よ、朽ちなさい」

そう言い放ち、両手に持つた八本の柄から、白い剣を出現させる。

「シェル、何故ここに？」

「ここで負の気を利用した実験が行われているといつ情報を教会側で手に入れ、私が派遣されたという訳です」

「しかし……。ヴァンさん、こんなところで出来つけとは、奇遇というか何というか。……ところで、隣の方は？」

「私は真田時雨。傭兵だ。今はヴァン殿に背中を預ける立場です」

「成る程、味方ですか。まあ、三人もいればこの怪物も何とかなる

でしょう

「四人よ」

更に声がし、その声の主が出てくる。

「久しぶりね。……一番会いたかった人と、一番会いたくなかった人と、初めて見る人と、色々いるみたいだけど」

「アリエルもか」

「ヴァンの顔が見たくてね。ここにいるって聞いたから来たなんだけど、とんでもない存在がいたようね」

言うとアリエルは怪物を一瞥し、

「こんなできそこない、誇りある吸血鬼である私にとつても汚らわしい存在だわ。私もアレを抹消するのを手伝うわよ、ヴァン」

「今日は知人によく会うな……まあ、助かる」

こうして、四人は怪物に向かっていった。

最初に動いたのはシェルだった。

「ハアツ！」

八本ある剣を全て怪物に投擲する。

その剣は白い閃光を残しながら怪物に迫り、

「グアアアアアツ！」

その全てが怪物に突き刺さる。

続いて時雨も、

「真田流、雷光閃！」

時雨の放った雷属性の閃光が刀より発され、怪物に直撃する。

怪物は苦し紛れに両腕を振り回すが、

「そんなの、当たらないわよっ！」

言いながら振り回される両腕を避け、接近し逆に爪でその腕を切り裂くアリエル。

怪物はよろけ、体勢が崩れる。

更に、その隙に怪物の懷にヴァンが走りこみ、

「烈華崩拳！」

気を溜めた拳による攻撃を、怪物に決める。

それをまとめてくらいい、怪物は吹っ飛び、壁にぶち当たった。

「グウウウウウウ……」

怪物はまだ動こうとしているが、随分弱っているようだった。

「さて、そろそろか」

言いながらヴァンが近寄る。

そして左腕に風属性の気を纏わせ、怪物に更なる攻撃を加えようとした、その時。

「グルアアアアアアアアツ！」

怪物が大声で喚き、その全体が黒い氣で覆われていく。

そして、

「ガアアアアアアアツ！」

怪物の大聲と共に、衝撃がその部屋中に広がった。

全方向への氣による、怪物の攻撃。

それを受けた部屋中は破壊しつくされ、廃墟と化した。

そしてヴァンは……

「ヴァンさん、大丈夫ですか！？」

「ヴァン！？」

「ヴァン殿っ！」

ヴァンを心配する三人だつたが、

「心配無用だ」

そこには、言いながら怪物の胸に腕を刺したヴァンの姿があつた。怪物はしばし痙攣していたが、胸から腕を抜き取つてしまふと動かなくなつた。

「三人は俺の後方にいたからか、今のを受けなかつたようだな。よかつた」

普段と変わらない調子で喋るヴァン。

「……ヴァン殿、今の攻撃を耐えたと……？」

「通常兵器なら問題だつたがな」

そう言いながら、血まみれになつた腕から血を飛ばし、拭つヴァン。

「気による攻撃は、今の俺には一切通用しない。だから心配無用だ」そしてヴァンは三人に笑顔で。

「用は済んだ。この基地ももはや俺達の勝ちだわ」、時雨。帰るぞ」

「にしても、教会所属であるシユル殿と吸血鬼のアリエル殿が組むとは、心外というか予想外というか……」

「私も心情的には屈辱ですが、それ以上にあのような怪物を野放しにはできませんので。今回はしづしづ、です」

「それはほつちのセリフよ。ああ、そつだ。ヴァン、また後でお願いね」

「またか。まあ、別に構わんが」

「何の事ですか? ヴァンさん」

「私達だけの秘密よ? フフフ……」

そんな会話をしながら、基地に帰る四人。

それぞれ立場も人種も違う四人。

だが、縁があれば、こうして寄り添う事もある。

他にも敵になつたり味方になつたりするエピソードがあつたりするのかも知れないが、それはまた別の話。

「そんな事があつたんですか……」

「しみじみと話すフラン。

「まあ、あの頃は色々ありましたからね。運よくお互に生き延びる事ができましたから、今のボク達があるんですが」

「それより、ヴァンさん。この学校に関する事ですけどね」

「何ですか？シェルさん」

「……やっぱり黙つてましょう。その方が後で驚くでしょ？」

言いながら、クスクスと笑うシェル。

「そう言えば、まだ私もこの学校に関して提案があつたのだ」

「あら、私もよ？」

「二人もですか。一体何なんですか？」

「秘密です」

「秘密よ」

「秘密だ」

三人、同じ言葉を返す。

「一体何なんですか、まつたく……」

「それでは、私は手続きがあるので。また後ほど」

「私もこれにて。ではまた」

「じゃあね、ヴァン」

そう言い残して、三人はその場を去つていった。

「やれやれ、まるで嵐か何かのようでしたね」

そうヴァンが言った後、タイミングを読んだかのように予鈴のチ

ヤイムが鳴つた。

「おつと。もう昼休みが過ぎてしましましたか。一人共、もう教室に戻りなさい」

「はい」

「分かりました」

そう言って、一人はその場を後にした。

「まあ、あの三人との出会いはあの戦場では衝撃的なものでしたが

……」

ヴァンの語りは、誰に向けられるでもなく。

「ボクにとって一番の衝撃は、あの戦争の終結と、その後だつたんですね……」

ヴァンは、空に顔を向け、あの頃の事を思い出していた、

終わつたあ。

物語そのものはまだ終わりではないんですけどね。  
続き、どうしましようか。

……まあ、何とかなるでしょ。

お約束みたいに四人が集結する場面になつちまいましたが、そこは  
それ、文字通りお約束という事で。  
意見や感想、評価等いただければ幸いです。

## 傭兵としての日々 急転（前編）

ヴァンが傭兵として戦争に参加してから数年。

少年だったヴァンは青年に成長していた。

だが、その能力により、基本、能力者重視の拠点に送られていた事が多かつたため、目に見えるような傷がつく事はなかつたが。

そして、数年続いた戦争。

どちらにも優勢、劣勢にも傾かず、もはやそれは泥沼と化していた。

そして……それは起つた。

「なんだ？」

兵舎で暇を弄んでいたヴァンは、ふと外が騒がしくなったのに気づいた。

ガヤガヤと、大勢の人が騒ぐ声がする。

「敵でも攻めてきたのか？」

そう独り言を言いながら、声のする元へ向かっていた。

同時に、こんなドロドロとした戦争に自然と慣れている自分に嫌気がさした。

「どうしたんだ？」

ヴァンは、司令室で騒いでいる兵士の一人に声をかけた。

「ん？ ああ、ヴァンか」

その兵士はヴァンを一目見ると憂鬱そうになため息をつき、

「どうも、よくない噂が出始めていてな」

「よくない噂？」

「ああ」

兵士は頷くと、壁に貼り付けているトルバ王国とハルバード共和国一帯の地図を見ながら、

「相手、ハルバード共和国だがな。ヤツらが核を使うという噂が聞こえてきている」

「力ク?」

ヴァンは、初めて聞く単語に首を傾げる。

「何なんだ、その力クというのは」

「恐ろしい、兵器だよ」

「兵器? 武器なのか?」

「ああ」

「武器といつからには実弾だと思うが、それはどれ程の威力なんだ? Aクラスよりも強いのか?」

「それで済めば問題はない」

兵士はかぶりを振ると、

「核兵器つてのは、恐ろしい兵器でな。それ一つで町一つ二つを破壊する事ができる」

「町……つ……?」

それを聞いたヴァンは目を見張り、同時に驚いた。

今までAクラスの能力による攻撃や、町を破壊する武器兵器は多く見てきた。

だが、町そのものを破壊するとなると、それは想像すらできない。

「……そんなものが出てくるのか」

ヴァンもその存在には驚いたが、一つ疑問が出てきた。

「一つ聞くが、何故そんな物を相手は今まで使わなかつたんだ?それ多用すれば、戦争なんて楽勝だろ?」

「……威力と後遺症が恐ろしすぎたんだ」

「と言つと?」

「核は、一つ間違えば全てを破壊する。文字通り廃墟にできる。人も簡単に大勢殺せる。そんな兵器を多用したら、それはもはや戦争ではなくなる」

「それと、核は使用されると放射線を出す効果があつてな」

「ホウシャセン？」

「ああ。それを浴びると、人体に酷い影響が残る。その残酷さもあつて、過去の大戦で使われた核も、暗黙の協定で使われない事になつていたんだが……」

「それを相手が使うと？」

「あくまで噂だがな」

そう言つ兵士も、顔に暗い影を残していた。

司令室から出たヴァンは、核という存在、戦争という存在について考えていた。

過去にガルムから言われた、人と人との抗争、そして戦争。戦争というのは、どれ程過酷なものか、皆分かっているはずだ。なのに、何故皆戦争を行うんだ……。

そんな事を考えていると、

「殿……ヴァン殿！」

「？……時雨か」

「どうされた。深く考えていたようだが」

「ああ、少しな」

「今噂になつてゐる核についてか」

「それもそつたが、この戦争、皆はどう思つてゐるのかと、ふとそう思つてな」

「この戦争か」

「時雨はどう考える？」

「私は……利が絡むから、戦争は行われると考えている」

「利？」

「ああ。戦争に勝てば、負けた国から色々な物を得る事ができる。領地であつたり、金銭であつたり、権利であつたりとな」

「それで人は人と争うと？」

「私はそう思つてゐる」

「だが、それでは核といつ武器を使つ理由にはならん。核を使えば、全てが無に帰すんだろう?」

「……噂に過ぎんとはいえ、それを使うといつ事は、この泥沼と化してゐる戦争を早く終らせたいと思つてゐる者がいるのだろうな」「相手の国を潰してもか?人を多く殺してでもか?町を廃墟にしてでもか?」

「……」

時雨は、困つたように俯く。

「すまん、お前に聞くよつた内容ではなかつたな」

「いや、ヴァン殿も多くの事を考へてゐるといつ事がよく分かつた。私もそれなりに考へてはいるが……何の理由があつて核を使うか、か」

「……」

しばらぐ一人は無言で血ひの惡考こふける。

そんな時、

「皆、司令室に集まつてくれ。今度攻める拠点が決まつた」

そんな兵士の声が聞こえた。

「どうやら、まだどこかを攻めるよつだな」

「ああ」

一人は同時に頷くと、

「お互ひ、最後まで生き残れる事を祈るか」

「ですな。では、ヴァン殿」

ヴァンは、時雨と別れの挨拶を済ませ、互いの目的に向かつて歩き出した。

ヴァンはこの戦争を止めるために。

だが、このまま戦争を続けていれば戦争は終わるのか。

その疑問を抱きつつ、ヴァンは戦い続ける事しかできなかつた。自分の信念の元に。

そんな思いを再度決めた後の事だった。

自分の所属するトルバ王国も、核を使うかもしれないという噂が始めたのは。

「一体、どうなるんだ、この戦争は……」

両国による核の撃ち合い。

それは、両国の滅亡に他ならない。

それなのに。

「どうして、皆争いをやめようとしないんだ……」

ヴァンは、目に見えない戦争に、苦惱し始めていた。

お疲れ様です（と自分に言いたいです）。

戦争物に関しては、自分は経験がないのであくまで想像で書くしかないの、で、登場人物々々が抱く心象に関してはうまく書けませんでした。

何だか話が暗くなつてきましたが、これも戦争物の一つとして考えてますが、書いていく度に「うああああ」となる自分が。○ノ  
意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

両国共に噂が立ち、小競り合いのよつたな紛争が続く日々の中。ヴァン達傭兵や兵士達は、いつものよつたに戦いの中に身を投じていた。

そんな時。

「皆、集まつて欲しい」

そんな声が聞こえ、その場にいた兵士や傭兵、ヴァンもその声の主の近くに行く。

そこには、軍人の服を着た、初老の男性が立っていた。「皆、忙しい中すまないな。私はシルバ・グランという。トルバ王国の中で、参謀の職についている」

「その参謀が、一体この兵舎に何の用なんだ？」

ヴァンの問いかけに、シルバは頷くと、

「実は、この戦争の事に関してでな……」

シルバはそこで一息置くと、

「皆も噂で聞いてはいると思うが、両国で核が使用されるかもしれない」と

その言葉に、集まつた皆がざわつく。

「その噂だが……真実だ。実際、タ力派の者達はそれを使って戦争を早く終らせようとした」

「だが、それを両国で使おうとなると話は別だ。互いに多くの犠牲を出すのは必死だ」

「そして皮肉にも、その結果、この戦争は終結に向かっている。核を使って共倒れになるくらいなら、停戦にしよう、という方向でな」

その言葉に、再び再び皆がざわつく。

「停戦の日はいざれ提示されると思う。皆、それまで体を休めてく

れ。今まで「苦労だつた」

そう言つと、シルバは兵舎の中に入つていつた。

「IJの戦争が終わる……？じゃあ……俺のした事は……今までしてきた事は……価値があつたのか？俺達のやつてきた事は、正しかつたのか？」

それだけを確かめたい。

その思いも持つて、ヴァンはシルバの後を追つていつた。

「シルバ・グラン！」

「……なんじや、お主は

「俺は雇われた傭兵で、ヴァン・ガルドという」

「お前が……。それで、そのヴァン・ガルドが一体何の用じや？」

「さつきの話じや、その核とやらが動いた結果で戦争が停戦まで持ち込まれたといつ。じゃあ、俺達のやつてきた事は正しかつたのか？無駄じやなかつたのか？」

「お主達のやつてきた事、か」

シルバは深くため息をつくと、

「正直、前線で戦つてきたお主達には感謝しとる。じゃが、酷な話になるよつじやが、今回の停戦とお主達の働きには、あまり関係がない」

「そんな……」

ヴァンは、そんなシルバの言葉に絶望する。

そのヴァンの表情を見て、

「そんな顔をするな。まったくの無駄という訳ではない。お主達のおかげで、我らの国は負ける事がなかつたのじやからな。白髪鬼のお主は特にな」

「白髪鬼？」

「その白い髪と青い目、IJたちでも噂になつとつたわ。戦場の白髪鬼が出れば、勝てない戦はない、とな」

「そんな噂が……」

「じゃが、正直ワシらの動きが遅かつたせいで、こゝまで戦争を引きさせてしまった。それは謝罪せねばなるまい」

「だが、こゝの戦争は終わるんだな?」

「一応、停戦という形でな」

「じゃあ、この国から戦はもうなくなるんだな? もう争ひ口々は無くなるんだな?」

「ああ」

「それだけが聞けて、もう十分だ。感謝する」

そう言って、ヴァンはその場を後にする。

「そうそう、ヴァンよ」

そんなヴァンの背中に、シルバは言葉を投げかける。

「もし困った事があれば、遠慮なく言つがいい。できる範囲でなら力になつてやるわい」

「ああ、分かつた」

「背中」にしだが、ヴァンはそう言つて返した。

停戦の知らせを受け、各兵士や傭兵達は拠点を後にする準備をしていた。

ヴァンも荷物を整えていくと、

「ヴァン殿」

「時雨か」

「今までお互い、こゝ苦労だつたな」

「時雨は……今回の停戦、どう思つ?」

「……どんな形であれ、戦が終わつたのはいい事だと、私は思つ」

「そうか」

「ヴァン殿は、納得していないのか?」

「いや、戦争が終わつた事自体は嬉しく思つ」

「なら……何故そのような顔をしている? 今のヴァン殿は、煮え切

らない顔をしているが

「時雨。今回の俺達の戦いは、無駄じゃなかつたよな？」

「それは私には分からぬ。ただ、どちらも死人が出て、大勢の被害が出たうえでの結果だからな」

「そうか……」

「ヴァン殿は、これからどうするつもりだ？」

「俺か？俺は……正直分からん。今まで戦争を終わらせる事だけを考えていたからな。そういう時雨はどうするつもりだ？」

「私か。故郷に帰るか、私の技量を役立てるとこりに就くか……」

そう言つて一息置いて、

「もしよければ、ヴァン殿と一緒に行動してもいいんだ」

「俺と？」

「それくらいならしてもいいと、ヴァン殿に好意を抱いている。それだけの事だ」

そう言つて時雨の顔には、僅かにだが朱がはしっていた。

「そうか

ヴァンは一息いれると、

「俺は、しばらく一人旅をしたいと思っている」

「そうですか。それは残念だ。まあ、心が変わつたらいつでも言ってください」

「ああ、分かつた。それじゃあ、時雨。また機会があれば、いつか

会おう」

「分かりました」

そう言つて二人は別れた。

「俺のしてきた事は、この戦争に意味はあつたのか、各地を見て回るのも悪くはないな」

そう独り言を言つと、ヴァンは兵舎をあとにした。

その行動になんの意味があるのか、ヴァン自身にも分からなかつ

た。

ただ、そうしたかつたから。

自分のしてきた事に意味があつたのか。

ただ、それだけを知りたかつたから。

ヴァンは旅に出た。

自分で書つのもなんですが、『J苦勞様でした。

今回は前半にこういう流れを、後半一部に時雨との会話を混ぜてみたんで、次は他のヒロイン役との話を入れるのも悪くないかなーと。フラグあつても今回みたいにバキバキにへし折つちまうそつな主人公ですが（笑）

そろそろこの過去編も終わりに近い、と思えるのですが、一体どこまで続くんだる。

書いてる自分にもどこまで続かせるのか、あまり分かりませんが。意見や感想、評価等いただければ幸いです。

停戦になつてから数日。

ヴァンは各地を渡り、旅を続けていた。

だが、どの町に着いても、そこでは戦争の跡が見られていた。  
復興作業を続けている町、荒れたままの町、廃墟となつた人の住  
んでいない、町だった場所。

しかし、どの町に着いても、パン一枚ですら取り合いになる日常  
が繰り広げられていた。

そんな光景をヴァンは落胆に染まりつつある田で見ながら、

「この戦争に勝てば、この戦争が終われば、俺の周りは平和になる、  
俺の周りは日常に戻ると信じて戦つた」

「けど、いつも通りだ。人はまだ争い、戦い続ける」

「俺は、一体、何のために、人を殺し、戦つてきたんだ？今までや  
つてきた事は、一体なんだつたんだ？」

そう呟く事もある程、ヴァンは絶望に染まりつつあつた。

そんな中、とある町に着いて。

「この町は、他の町より賑わつてゐるな……」

その町は、今まで見た町よりもある程度は豊かになつていた。  
無論、ある程度、ではあって、あまり変わらない様子だったが。  
それでも、食料を奪い合つうつな様子は見られず、皆懸命に生き  
ようとする姿がそこにはあつた。

「少し、歩いてみるか……」

ヴァンは町の中を散歩していると、

「はい、次の方、来てください」

そんな声が耳に届く。

それも聞きなれた声が。

ヴァンの足は、自然とそちらの方へ向かっていった。

「はい、次の方、来てください」

そう言つてはパンとスープを避難者に渡し、配給を続いている教会の面々。

そして、順番に並び、それを受け取る人々。

それがしばらく続き、行列を作つていた避難者がいなくなると。

「ふう。今回もご苦労様でした、シスター・パルラ」

「いえ、いつもの事ですから」

額から汗を拭い、答えるパルラと呼ばれるシスター。

彼女達はいつものように町で避難者に食料を配給し、少しでも町に潤いを持たせようと努力していた。

「それにしても、いつまで続くんでしょうね、このような日々が」「泣き言を言うんじゃない、ありませんよ、シスター・パルラ。私達の仕事は奉仕なんですから、こんな事は当たり前なんですよ」

そんな会話をしていた時、

「シェルか？」

一人のマントとフードを被つた男が立ち寄つた。着ているものは薄汚れ、顔も埃にまみれていた。そんな男を見て、

「まさか……ヴァンさんですか？」

反応したのは、パルラと会話をしていたシェルだった。

「随分と……変わられましたね」

「……そうか？」

「とりあえず、顔を拭いて、これでも食べてください」

「……ああ」

言われるままに顔を拭き、パンを頬張るヴァン。

「一体、どうしたんですか？随分と霸気が感じられませんが」

「……俺が今までやつてきた事、それに意味はあつたのかと思つて

な」

「よければ話してもらつてもいいですか？私達は懺悔を聞くと同時に、相談を聞く事もできるのですから」

「相談……か」

そう言つて、ヴァンは旅の中で見てきた町の事をシェルに話す。戦争は終わつたのに、今日一日をしのぐ食べ物すら取り合つ毎日。そんな町ばかりを見てきて、ヴァンは自分のしてきた事に価値はあつたのか、と。

「そうですねえ……」

そんな話を聞いて、シェルはふと考える素振りを見せ、「自分のしてきた事に価値があるかどうかが分からないうなら、これから価値のある事をしたらいんじゃないですか？」

「これから、価値のある事？」

それは、ヴァンにとつて思いもしなかつた考えだった。今まで戦う事しか考えてなかつたから。

これから的事なんて、考えてなかつたから。「とにかく何でもいいから、人の役に立てる事をしたらいんじゃないですか。もし今までの事に価値としての疑問があるなら、これら作ればいいじゃないですか？」

「そうか……これからか……」

ヴァンは少し考え、

「ありがとう。参考になつたかどうかは分からんが、助かつた」「いえいえ、迷える人々を救うのが私達教会の役目なんですから」「それだけですか？シスター・シェルさん」と、途中で割り込んでくるパルラ。

「教会にいる時は、いかにヴァンさんが凄いかつて話をあれだけしていたのに」

「シスター・パルラ！余計な事は言わないでいいのですっ！」

シホルはコホンと咳をして、

「ヴァンさん、迷った時はいつでも教会に来てくださいね。私達は、いつでもあなたの助けになりますから」

「ああ、分かつ……」

言い終わるより早く、

「ヴァンッ」

後ろから誰かがヴァンに抱き着いてきた。

「久しぶりね。マントとフードを被つてたから、最初は誰か分からなかつたわよ」

「その声は……アリエルか？」

そう言つて振り向くと、満面笑みのアリエルの顔がそこにあつた。

「……何故アリエルが教会と一緒に？」

「それは話すと長くなるんだけどね……」

「彼女は人に害を与えると教会側が判断しました。ですが、種族上野放しにはできないので私達で面倒を見ている、という訳です」

「一行で終わつたな」

「酷いわね、シェル。もつと長く切ないエピソードで言おうとしてたのに」

「アリエルにはそんな扱いで十分です」

「酷いと思わない？ヴァン」

「ちょっと！いつまで抱きついてるんですか！離れなさい！」

「別にいいじゃない。あれ？もしかして嫉妬してるのかしら？」

「なつ！？アリエル！今日という今日は許しませんよー！」

互いに喚きながらも、ヴァンから離れない一人。

そんな二人にヴァンは苦笑し、

「さて、俺はそろそろここを出させてもいい」

「あら？来たばかりなのに。もつといいじゃない」

「そうですよ。私達教会も、あなたなら歓迎しますよ？」

「そうしたいのも山々なんだが、今も旅の途中でな。もつと色々見

回りたいんだ」

「そうですか……残念ですね」

「じゃあ、また縁があつたら会える事を願いましょうか」

「そうだな。じゃあ、二人共、またな」

そう言って、ヴァンはその場をあとにした。

一人と離れた後も旅をしていたヴァンだったが、数日、数ヶ月と旅を続けるうちに。

今までに価値がなかつたと思えても、それならこれから価値のある事をしたらいい、そんな助言を思い出し。

そろそろ腰を落ち着けてもいいかと思い始めていた。

そんなヴァンの脳裏に浮かんだ人物は……。

## 傭兵としての日々 停戦後（後書き）

戦争も終わり、そろそろ終盤頃？

これから「ヴァンガ」がどうなるのかは大体決めていますが、中身はこれからって所です。

感想や意見、評価等いただければ幸いです。

……タイトル変えようかな。

トルバ王国の中心より少し離れた程度、戦争の影響も無く平和な町に存在する、とある屋敷の中の執務室。

その部屋の中で。

「まったく、忙しいもんじや わい……」

戦争が終わった後も、シルバは参謀として忙しく働いていた。戦後もハルバード共和国との折り合いや他の国への牽制等、こなす仕事は多かつた。

そんな中、

「シルバ殿。あなたに会いたいという方がいるのですが」

「ん? ワシにか? 相手は誰じや?」

「それがその、フードとマントをしていて風貌は分からなかつたのですが、白い鬼と言えば分かる、と」

「白い鬼? …… そつか、あいつか。分かつた。すぐ向かうから、通してやつてくれ」

そう言い、シルバは執務室から出て、彼のいるであのひつ部屋に向かつた。

「よつ、白髪の。息災か?」

「まあまあつて所だな」

互いに挨拶を交わすヴァンとシルバ。

「それで? ここに来てワシを呼んだという事は、何か困つた事でも起きたのか?」

「ああ、少し相談があるんだが…… 何かできる事はないか?」

「……訳が分からん。とりあえず説明せい」

「そうだな。ある人に、今までやつてきた事に価値があるかどうか分からなくなつたなら、これから価値のある事をしたらいいと言わ

れてな。方針は決まつたんだが、実際何をしたらいのが分からなくて、あんたの所に相談に来た」

「そういう事か。しかしそうじやの……今はハルバード共和国とも停戦、他の国とも戦らしい戦は起きとらん。傭兵としての戦力は今は必要ないからの。どうしたものか……」

そう言ってしばしシルバは考えていると、

「そうじや、あの二人に紹介するか

「あの二人?」

「ふむ。そうじやな。それも一つの道か」

「おい、一体どういう事か説明しろ」

「まあ、慌てるな。とりあえず連絡を取るから、少し待つとれ」

言ひと、シルバは机の上の電話を取り、どこかへ連絡し始めた。

「……おひ、ワシじや、シルバじや。長い前置きは無しにしての、お主達に紹介したい奴がある」

それからもシルバは話を進めていく、

「おお、そうか。引き受けてくれるか。なら、これからも話を進めておく。じやあの」

そしてシルバは電話を切り、

「ヴァン。お前の処遇は決まつただ」

「まず、内容が分からん。分かりやすいように言え」

「ふむ。そもそもそうじや、と言いたいところが、ワシも多忙の。少し待つとれ」

言ひとシルバはメモ用紙に何かを書き、

「この住所の場所に行つて、二人を訪ねる。「カルマとクライン」に、ここに来るようと言われた」と言えば通じるじやうひ

「……分かった」

住所の書かれたメモ用紙を片手に、ヴァンは部屋をあとにした。

屋敷から少し歩き続け、ヴァンは書かれた住所を目標していた。

「えっと、この紙の住所によればこの辺のはずだが……」

時間は夕方。

町は赤く染まり、学校が近いのか、下校している生徒が多数見られる。

そんな中、ヴァンは一人歩いていた。

そして。

「ここか……つて……」

紙に書かれた住所の位置に来てみると。

その場所は、どう見ても学校だった。

「俺を学校に行かせて、一体何をしろと言うんだ？」

ヴァンは困り果てたが、その場にずっと立っている訳にもいかず、仕方なく、ヴァンは中に入つていった。

「すまないが」

学校に入つてすぐ、事務の人には話しかける。

「えつと、どなたかの親ですか？もしそうでしたら、来場者のバッジを着けてもらつてくれますか？」

言われて、事務の人はヴァンに来場者のバッジをヴァンに手渡す。

「いや、親とかじゃないんだが。カルマとクラインに、ここに来るよう言われたんだが」

「ああ、理事と知り合いでしたか。少しあ待ちください」

そう言って事務の人は少しその場を離れ、

.....

待つ事数分。

「お待たせしました。カルマさんとクラインさんが応接室でお待ちなので、お連れ致します。ついてきてください」

「あ、ああ」

言われ、事務の人に連れられ、廊下を歩くでいい、じばらぐすると応接室と書かれたプレートが張られた扉の前まで来た。事務の人はノックを鳴らすと、

「失礼します」

そう言い、部屋の中に入つていい、ヴァンも部屋の中に入つた。中には、ソファーに座つた二人の男性がいた。

「ヴァン・ガルドさんを連れてきました。では、私は事務室に戻りますので」

言つと、事務の人は部屋を出でていった。

取り残されたヴァンに、

「まあ、ずっと立つてているのもなんだ、座りなさい」

そう言われ、ソファーに座るヴァン。

「さてと、何から話せばいいものか。私達もシルバ殿からヴァン殿の事は聞いてはいるのだがね」

そう言いながら、片方の男が何枚かに纏められている書類をペラペラとめぐりながら話を続ける。

「ふむ。ファルガ地域で傭兵を……ねえ。どう思ひ、クライン」種になる危険性はともかく、シルバ殿の押しとあつては無視はできませんね。とりあえずは様子を見ながらでいいのではないのです

か？」

「すまないが、俺にも分かるように説明してくれないか？俺もシルバから、ここに来るようになにしか言われてないんだ。それに」

ヴァンは周囲を見渡し、

「念のため聞くが、ここは……学校だよな」

「ああ、その通りだ」

ヴァンの問いに、カルマは答える。

「その書類はおそらく俺のプロフィールを書いているものだとは思うが、それを読んで、俺を傭兵だと分かっていると」

「ファルガ地域で活躍していたというのは今知ったが、腕に覚えのある人物だというのはシルバ殿から聞いている」

「その傭兵と、この学校が、一体何の関係があるんだ？」

「ふむ……簡単に言うとだがね。君に教師をしてもらいたい」

「…………」

「聞こえなかつたのかね？簡単に言うとだがね。君に教師をしてもらいたい」

「いや、少し待てちょっと待てとりあえず待て」「

「分かつた。少し待とう」

「……質問がある。何で俺が教師をしなければいけないんだ？」

「言い方が悪かつたな。正確には、ここで働くには立場が必要でね。それで君には教師をしてもらうという事にした」

「質問の答えになつてないと思うが」

「先ほど腕に覚えのある人物をいうのは聞いたが、本職はそれと関係があるのでよ。教師というのは言わば、学校での立場上の問題に過ぎないのだ」

「つまり、普段は学校で教師をさせるが、本当の目的は他にあると？」

「理解が早くて助かる」

「そこで一息の間を置いて、

「まあ、百聞は一見にしかずです。少し私に着いて来てもらえます？」

か？」

クラインはそのまま立ち上がり、ヴァンに着いて来るよつよと  
いう仕草をし、そのまま部屋の外に出た。

「……」

ヴァンもどうしたらいいか迷つたが、結局クラインの後を着いて  
行く事にした。

二人はそのまま校舎を出て、敷地内に存在したプレハブ小屋の中  
に入つていつた。

小屋の中は電気もなく、夕方という事もあって薄暗い。  
そして、何故かまったく使われている形跡がなかつた。

「ここに、一体何があるんだ？」

「少し待つてください」

そう言つたクラインは少しの間床を探り、

「おつと、ここでしたか」

言つた後に床を操作すると、床に一部が割れ、何かの操作パネル  
のような物が出てきた。

「これは……？」

「これはこの学校でも一部の者しか知らない事でしてね」

言いながらクラインはパネルを操作すると、床の一部が横にずれ、  
その下に奥へと続く下り階段が出現した。

「着いて来てください」

言いながら階段を下りるクラインに、ヴァンは着いて行くしかな  
かつた。

「これは……？」

階段を降りて十数分。

階段は終わり、広い広間に出了た。

そこは広く、無機質な鉄製の壁で覆われていた。  
そして、その中央にあつたモノ。

「私達の本職は、これを守る事なんですよ」

「これは一体、なんなんだ？」

一見、ミサイルのような形。

だが、それにしても一般的なミサイルより大きかった。  
それが一基、広場の中央に横たわっていた。

そして何より目には止まつたのは、

「あのミサイルの横についているマークは、何なんだ？」

そう。

ミサイルには、横に、赤い色の、何かを表すマークが刻まれていた。

「あれは、放射能、核をあらわすマークですね」

「なつ……！？」

「驚くのも無理はありませんね」

苦笑しながら、クラインは呟く。

「軍や国の施設内に置いておくという手もあつたのですが、灯台下暗しというか意表を付くというか、誰もこんな町中にこんな物を保管しているとは思わないだろうという意見から、ここに保管する事が決定しましてね」

「意表を付く、という事は、誰かを騙しているんだろう？相手は誰だ？もしくは組織か？」

「他の国のスパイや軍事秘密を持ち出そうとする輩、後は軍内部のタ力派からですね。の方達はこれを使う事に対して躊躇はしませんから」

「の方達、という事は……あんた達は……」

「ええ。私とさつきのカルマ、そして一部の教師達は軍や国に籍を置いている者です。そして我々の目的は」

クラインは一息おいてから、

「これを無駄に戦争等の争いで使わせない事です。こんな物、最低

でも抑止力にはなるかもしませんが、実際に使われるのは御免ですかね」

「それで、俺をここに派遣した訳か」

「ええ。使える戦力は多い方がいいですからね」

「……理由は分かった。俺も協力しよう」

それが日常を守る事になるのなら。

ヴァンはそれを硬く決意した。

「分かつてくれましたか。では、長居は無用なので、戻るとしてしましようか」

「ああ」

そして応接室に一人は戻り。

「クライン、彼に例の物は見せたのか?」

「ええ。彼も協力してくれる事を約束してくれましたよ」

「俺も日常を守る事は好きだからな」

応接室に戻った二人は、改めてヴァンが協力する事を確認した。そして。

「さて、後の仕上げですが」

「後の仕上げ?」

「おや?もう忘れましたか?あなたには教師をしてもらひつ事になるんですよ?」

「……」

ヴァンは珍しく、頭を抱える事になった。

「私がしつかり教えますから、覚悟しておいてくださいね」

「分かった。だが、教員免許の方はどうする?すぐに取れるという訳でもないだろ?」

「その辺はこちらで何とかします。あなたは学校で教える事の何たるかを最低限学んでくださればそれで結構です」

「……最大限、努力する」

「それとです

「まだ何かあるのか?」

「その喋り方、ぶつきひめつすがりますね。その辺も私がきつちり教えてあげますから

「簡便してくれ……」

再び頭を抱えるヴァンに、カルマは「またいつもクラインのクセが出たな」と苦笑していた。

それから、違ひ意味でヴァンの苦労が始まった。

## 傭兵から先生へ（後書き）

書き終わりました。

教師になるきっかけの部分を書いた訳ですが、いつもより少しだけ多めになつちました。

さて、次はどう書こうかなーと思考中。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

## 先生としての始まり、プラス旧友との合流

ヴァンが教師になる事が決定してから、数ヶ月後……。

四月に入り、クラスごとに新入生が組分けされ、そのうちの一クラスがヴァンに任される事になった。

「一応一通りの事は教えられましたが、大丈夫でしょうか？」  
ヴァンの口調はクライインの影響もあり、前とは似ても似つかないような口調になっていた。

「問題ありませんよ。私が教えられる事はある程度教えました。後はあなた次第ですね」

「はあ……分かりました」

ヴァンの肩を軽く叩くクライインに、しぶしぶ納得するヴァン。  
そして、彼は自らが担当するクラスの教室に向かっていった。

そして、彼の待つ教室では。

「ねえ、サラ。どんな先生かな？」

「体育館で見た時は、割と優しそうな先生だったけどね」

そこでも、新しく自分達の担任となる教師の話題でいくつかのグループはもちきりであり、フランとサラもそのうちの一つだった。

そんなこんなで騒いでいる教室の扉の前に、一人の人影が立つて  
いる。

「あ、もう来てるよ」

彼ら彼女ら生徒達は、その影の主がどんな先生かを期待や興味本位の目で見ていた。

「本当に、大丈夫でしょうか……」

ヴァンにとつて、教師がうまく務まるかは問題だったが、それより何かの拍子に地の喋り方が出て生徒を怖がらせないかも心配だった。

そのくらいの心がけができる程度まで、ヴァンは成長？していった。

「まあ、何とかなるでしょ？」

そう言って、彼は目の前の扉を開け、中に入つていった。

そして教壇に立ち、目の前の生徒達を見据える。

数年前まで自分と同じ年齢だった彼ら、彼らら。

この生徒達の日常を守るために、例えどんな困難が待ち受けていようと、それを乗り越えてみせる。

そう決意したヴァンは、生徒達に向かい、

「体育館で自己紹介はしましたが、改めて。ボクがこのクラスの担任の、ヴァン・ガルドです。よろしくお願ひします」

それが、ヴァンの教師としての人生の始まりだった。

「……それで、今にいたる訳ですね……」

傭兵に拾われた事。

そして傭兵になつた事。

戦争に参加して、戦友とも呼べる知り合いができた事。

その戦争が終わり、色々あつた末に教師となつた事。

今まで色々あつたが、人生の半分も生きていないといえ、これまで非常に多くの事があつた。

そんな事を考えていると、自分の姿が夕焼けで赤く染まつている事に気がついた。

「もうこんな時間ですか。少し昔の思い出に浸りすぎましたね」

一人苦笑し、校舎に戻つていぐヴァン。

そして廊下を歩き、職員室に入ると、

「おお、ヴァン殿。今までどこにいたのだ？」

「あら、ヴァンさん。随分と見かけませんでしたね」

「ヴァン、私達もここで働く事になつたから、よろしくね」

昼休みに分かれた三人がそこにいた。

「つて、ちょっと待つてください。アリエルさん、今何か聞き逃してはならないような言葉が聞こえたような……？」

「フフフ、聞こえなかつたかしら。私達、今日からこの学校で雇われる事になつたのよ」

「……少し頭痛が……」

ヴァンは少し額に人差し指を押し付けていた後、「ちょっと理事に会つてきます」

そう言つて、ヴァンはあの人気がいるであろう理事室に向かつた。

「クラインさん、一体どういう事なんですか？」

理事室に入つたヴァンの第一声がこれだつた。  
「どういう事、とは？」

「時雨さん、シェルさん、アリエルさんの事です」

「ああ、彼女らですか」

「どういう経緯で彼女らがここで働くという結果になつたのか、も ののすぐ聞きたい衝動に駆られるのですがつー？」

「時雨さんは体育の先生、兼剣道部の顧問として、シェルさんは教会から派遣された、宗教的な物事を教える先生として、アリエルさんは負の系統の扱い方を教える先生として向かえる事になりました」

「そういう事ではなくつ……もしかしてまた、表向きは、ですか？」

「はい、その通りです。特にシェルさんは教会側ですでに教師としての資格を得ていたようなので、手続きが楽でしたねえ」と言いながら笑うクライン。

「まったく、そういう事なら一言くらこいつてくれてもよかつたのに……」

眩ぐヴァンに対して、

「まあまあ。三人とも、ヴァン先生を驚かしたかつたみたいですか  
ら」

「驚くにも程がありましたよ。それにしても、ボクから言わせても  
らつても、あの三人はかなりの使い手ですよ。それ程あの地下のア  
レが危ない、という事ですか？」

「あなたが来た時にも言いましたよね。戦力は多い方がいいと。念  
のためです。それに、あの三人もヴァン先生と同じ職場で働く事  
を非常に喜んでいましたし」

「何でボクなんかと一緒にいいんでしょうかね……」

「……自覚のないモテる人というのはこれですから……」

「何か言いましたか？」

「いいえ。朴念仁がタイプの人は、色々苦労しそうだなと、それだ  
けの話です」

「？？？」

訳の分からないといった風のヴァンに対して苦笑するクライン。

「そういえば、大会に出るまでは無能力な先生で通っていたようで  
すが、今でもその呼称は変わつませんね」

「ええ。あの大会で、能力を無に帰す能力を持つていていう噂が  
立ちまして。そういう意味で無能力な先生と呼ばれてますね」

「あまり目立つような行動はやめてくださいよ？あなたは立場上は  
あくまで教師なんですから」

「ボクもそうでありたいんですけどね」

「それはそうと、話は彼女達の件だけですか？」

「ええ」

「なら、そろそろ退出していただきでもいいですか？私も仕事があ  
りますので」

「はい、分かりました」

「そう言って、ヴァンはその部屋をあとにした。

「ヴァンさん、理事と何を話してたんですか？」

「まあ、色々とです」

「それより、この校舎を案内していただけないか？ヴァン殿。私達もまだあまり把握していないのでな」

「分かりました。着いて来てください」

「フフフ……じゃあ、案内よろしくね、ヴァン」

言いながら、アリエルはヴァンの腕を自分の腕に絡め取る。

「ああ！アリエル！何をそんなうらやま……じゃない、不謹慎な！」

「ここは神聖な学び舎ですよ！」

「そうですよ、アリエル殿！早くその腕を放してください！」

「ボクもできれば離して欲しいのですが、歩きづらくて……」

そんな風にギヤーギヤーと喚く四人。

そんな風景を目の当たりにしながらも、ヴァンはこの光景がいつまで續けばいい、そう思っていた。

## 先生との始まり、プラス田村との合流（後書き）

さて、書き終わりました。

この小説の中で、教員免許の資格に関してはあまり触れていませんが、「細けえ事は（〃）」の精神でお願いします。○（〃）  
そしても一つ。

この後どんなストーリーにするか、ぶっちゃけ考えてません（笑）  
いや、笑い事じゃないんですがね。

そんな訳でヘタをしたら打ち切りや次話まで期間が長くなるかもし  
れませんが、そこそこは長い目で見てください。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

## 予感、そして不審者

その日は普通に始まった。

生徒達は挨拶を交わしながら登校し、各教室に入った生徒は雑談を交わしながら授業の準備をしていた。  
教師達は授業の準備を行い、各自それぞれの教室に向かっていた。  
そして、その日は始まった。

普段通りに行われる授業。  
それはいつもの風景だった。  
だが。

ヴァンは、何かの違和感を感じていた。  
においといふべきか、雰囲気といふべきか、それとも空氣と呼べるものか。

それがいつもと違う事が起きるかもしれない、そんな感じがした。  
「……ヴァン先生、どうしたんですか？」

そんなヴァンのいつもと違う、ピリピリとした雰囲気は、生徒達が疑問の声をかける。

「いえ、何でもありません。さて、ここは公式ですが……」  
気のせいであればいいのですが。

そんな考えを胸に秘めながら、ヴァンは授業を続けていた。

そして、特に何事もなく日常は平穏に過ぎ、夕方。  
学校に残る生徒達も少なくなり、ヴァン達教員も職員室で机仕事をしていた。

そんな中、ヴァンは今日一日ずっと感じていた違和感をまだ感じ

ていた。

「……」

ヴァンは少し考えたあと、

「すいません、少し校内を見回つてきます」

そう言つて、職員室をあとにした。

「気のせいであつてくれればいいんですけどね……」

ヴァンの感じた違和感、空氣。

それは、戦場で味わつた、あの殺伐とした予感だった。

長年戦場にいたため、そういうものに敏感になつていて、ヴァンは人一倍そういうものを感じ取れるようになつていた。

「それを、こんな場所で感じ取れるとは……何もなければいいんですけど……」

言いながら、廊下を歩いていく、ヴァン。

と、その時。

自分の向こう側から、警戒心と言つてもいい、そんな雰囲気の気が感じ取れた。

しかも、

「……かなりの使い手ですね」

ヴァンは気を引き締め、ゆっくりとその方向へと歩いていく。

薄い闇の中、だんだんとその姿が浮かび上がつてくる。

人数は三人。

いつでも戦闘体勢に入れるようにして、ヴァンは息を殺しながら、その三人に近づいていく。

（しかし、何なんですかね、この既視感は……）

思つた瞬間、夜の学校で迎撃した男の事を思い出した。

「相手が何にしろ、油断はできませんね」

そう呴いてから、光を発動させ、三人の元に先手必勝のごとく走り駆け、

「……ガムンさん？」

「シユルさん？」

## 影と影が交差した場所

そこには、白い剣を無造作に鷲掴みにしたヴァンと、手刀を喉元に突きつけられているショルの姿があった。

そしてそれだけではなく

「あ、アシハニシハニ

よく知る二人の姿もシェルの背後にあつた。

「三人とも、どうしてこんな遅くに校舎にいるんですか？」  
「ヴァンさんこそ、どうしてですか？」

万葉集

「三三三は三人は  
朝からくる邊村感の三三三がものを語した

「私とシェル殿はそれほど遅くまでは付き合わないのですが、アリエル殿はほぼ一晩中つてとこりです」

……寝ないで大丈夫なんですか？アリエルさん

一週間に二三度棺の中で寝れは問題なしわよ

そういうのは、あなたは普通の人ではありますけれどね[

「アーティストの心」を語る  
「アーティストの心」を語る

「 」

「なら、四人で一緒にしませんか？」

「分かりました」

「 」

つける事もなく時間は過る……

「やはり、思い過ごしじやないですか？」

「だといいんですが」

「そんな時。

「ヴァン、その違和感の正体、見つかったわよ」

「！？」

「ほら、あそこ」

アリエルの指を指す先、廊下の先には、見慣れない人影がいた。  
「多分あれじやないかしら」

「……生徒か職員の可能性も否定できませんがね」

「どうします？ヴァンさん」

「アリエルさん、霧になつたりとかは……できますか？」

「ええ」

「では、ボク達三人が正面から接触します。それでもし危険人物だつた場合、霧になつて背後から近づき、動けないようにしてください」

「ええ、分かつたわ」

「では、行きますか」

人影の近くまで行つたヴァン達。

そして、

「そこの人、止まりなさい！」

「ああ？誰だ？」

人影が振り返つた。

無精髭を生やした、どこにでもいそうな男。

だが。

「あなたは一体誰ですか？生徒には見えませんね。かといって、あなたのような教員は覚えがありませんよ」

「やれやれ。こんな夜中にも見回りとは、ご苦労なこつた。まあ、見つかつたとなれば……」

男は懐から何かを取り出そうとする。

その時。

## ザシユツ

「え……？」

肉を刺すような音がして、男は自分の腹を見る。  
そこには、腹から白い何かが出ていた。

「動かない方がいいわよ？今は重要な臓器や血管を避けてるし、痛みもあまりないようだけど……少しでも動くと……」

「わ、分かった」

自分が刺されていると分かつたと同時に、男の顔は青ざめた。  
「さてと。一度は言わん。お前は何者だ」

「いや、ただの浮浪者だつて」

「その浮浪者が、ここに何の用だ」

「いや、何の用つて言われても……」

「アリエルさん、もう少し痛める事はできますか？」

「分かつた、分かつたよー話す話す！つたく、こんな奴らがいるなんて聞いてないぞ……」

「それで、もう一度聞く。ここに何の用だ」

「こ、ここに宝があるって聞いたんだよ。世界を引つくり返せるようなモンがな」

「宝、だと？」

ヴァンはその言葉に目を丸くし、そして時雨やシェル、アリエルと目配せをする。

「それでそんな宝が手に入れば大儲けできるって考えてよ、それで

……

「忍び込んだ、という訳か」

「そうだよ」

「大体は分かつた。アリエル、もう離してやれ」

ヴァンがそう言つと、アリエルは爪を男から引き抜いた。

「やれやれ、助かつ……」

言い終わるが前に、ヴァンは男の首に手刀を打ち、氣絶させた。  
倒れた男を前に、

「三人とも、この学校の地下に眠るモノの存在を知つてますか?」「ええ。何かは理事から聞いてますが、それが何かまでは。ただ、この世の中に出してはならないものだと聞いてはいます」

「おそらく、この男の狙いはそれでしょう。ただ、この男自体は問題ありません。問題は、そういう話がどこから出回ったのか、ですね」

翌日。

ヴァンはクライインに、昨日の夜の出来事を話した。

「そうですか……地下のアレの事は私達以外誰も知らないはずなんですね……」

「とすると、内部に内通者が?」

「可能性は否定できません。ヴァン先生は引き続き、警戒を怠らな  
いようにしてください」

「分かりました」

何事も無かつた日々。

その日々はいつまで続くのか。

あるいは、すでに何かが起こっているのか。

## 予感、そして不審者（後書き）

さて、書き終わったといつ事で賽は投げられた訳ですが。  
この後どうしようか。

候補は何個があるんですが、どれにするか、どういつ内容にするか  
で思考中。

しかし、相変わらず（構想は含めてはな）ですが）一田一田三田  
程度で書きたい時に気まぐれに書いてる為、内容が薄いな～と。  
も少しその辺どうにかできればいいんですけどね。  
意見や感想、評価等いただければ幸いです。

深夜の学校。

その校舎の建物内にて、交差する影と影。

一方は倒れ、一方は腰に手を当てて。

「これで十六人目ですか……」

足元に倒れている不審者に對して、ヴァンは愚痴を零した。

先日の不審者の事件以降も、学校に侵入する人間は後を絶たなかつた。

時間帯が夜に限られたのは、対象者が人目を気にしていたのか、それはヴァンにとつては不幸中の幸いだつた。

真昼間に目撃されて、日常を壊されてはたまつたものではない。

だがしかし。

こうも連續で現れては、ヴァンもどうにかして解決したいと思つものである。

そう思つたヴァンは、クラインに相談する事にした。

「なるほど。確かに、このままでは侵入者が増えるのみですね」

「ええ。ですから、どうにかしたいとは思つてるんですけど」

「解決するにはどうしたらいいかを考えましょうか。まず、侵入者が何故この校舎に出没するか」

「噂、が原因ですね」

「そうですね。こちらでも調べてみましたが、おそらく軍のタ力派が流している物だと考えられます」

「どうして？」

「君に見せた地下のあの施設ですが。あの場所は、今は私と貴方と、  
とある人物以外には知られていません」

「どうしてですか？ 守るのであれば、こちらの一派でも守る場所を  
知らせた方がいいのでは？」

「確かにそれはそうです。ですが、守る物が物だけに、慎重にいか  
なければいけないのですよ。この学校に、タカ派の連中がいないと  
は限らないでしょ？ もしそういう連中に場所を嗅ぎつけられたら  
面倒ですからね」

「それに、誰がそうであるか分からぬので、迂闊に場所を言つて  
にはいかないのですよ」

「話を戻しますが、言つた通り、あの場所は現在三人しか知りませ  
ん。ですから、おそらくはタカ派の連中が、こちらが動くのを待つ  
ているんでしょうね」

「では、一体どうしたら？」

「そうですね……」こちらでわざと動いて、あちらを燻り出す、とい  
う手段も取れますね……」

「詳しく教えてくれませんか？」

「そうして、ヴァンとクラインの計画は進んでいく……。

そしてしばらくして。

「おい、聞いたか？ 数日以内にアレを学校から持ち出すつて噂が流  
れてるぞ」

「らしいな。行動を起こすなら、急がないとな

「先に取られてたまるか。何かは分からぬが、俺が手に入れてみ  
せる！」

ヴァン達が故意に流した噂によつて、学校周辺ではその在り処を狙う人間達が息を撒いていた。

そして、とある人物達の間にて。

「……噂が流れているようだな」

「ああ。だが、今度は我々が流したものではない」

「だが、眞実にしろ嘘にしろ、我々も動くしかないな」「事態は静かに、だが、確実に動いていた。

そして。

ヴァンとクラインは、地下の核ミサイルの前にいた。

「さて。賽は投げられましたね」

「ええ」

「後は、どう動くか、ですね」

「そうですね」

目の前に置かれた核を見上げ、呟くヴァン達。

今、核は、何かを運ぶ用途に使われるような大型の何かに積まれていた。

「クラインさん、準備の方はどうですか?」

「こちらの息のかかった基地で行つています。今のところは順調です」

「あとは、これを見つけられずに運送する事と、これを追つてこれないようにする事、そして噂の断絶ですね。一つ目と二つ目についてはこちらで何とかしますが、三つ目と運ぶ時間を稼ぐ分については、ヴァン先生にも協力してもらいますよ」

「分かりました。三つ目に関しては、わざと大げさに動いて、それがここには存在しないというアピールをする必要があるでしょう」

「頼みますよ」

「ええ」

そして深夜。

ヴァンはわざと意識的に立つよつて行動し、例のプレハブ小屋の前まで移動していた。

そして。

（……気配が複数。どうやら、田論見どおり、ボクのあとをつけたようですね）

その考え方通り、ヴァンの目の前には。

それを狙う人達が複数人集まっていた。

（さて、後は時間稼ぎですか）

（まったく、野次馬にも困ったものだな）

彼らのすぐ近くに、彼は隠れていた。

ヴァンが動く機会を待つ、そのために。

（まあいい。あの程度の連中に、ヴァンが負けるとは思えんが、じつくつと見物をせてもらおつか）

土台、つまり構成はある程度考えてましたが、どう建てるか、つまり中身をまったく考えてないと諸事情により投稿遅れちまいました（笑）

さて、この後どうよ。

んまあ、細けえ事は（）の精神で、少しづつ書いてきます。

プレハブ小屋の前に立つヴァン。

その周囲には、浮浪者から傭兵くずれ等、その種類は様々。ヴァンは腰に手を当て、

「皆さん、どうこう意図で集まつたかはしれませんが、念のために言つておきます。ここは私有地です。立ち退きなさい」

と言つてはみたものの、集まつた面々は引く気配はない。それどころか、

「うるせー！」

「お前は引っ込んでる！」

等の野次が飛んでくるばかり。

「では、仕方がないですね。実力行使といきますか」

そして、戦闘が始まった。

ヴァンは、集団でかかつてくる連中をいなしながら、巧みに一人ずつ潰していく。

例えば。

鉄パイプで殴りかかってきた男の攻撃をかわし、側頭部を蹴つて昏倒させた。

例えば。

炎を纏つた拳で攻撃してきた男の攻撃を、発動させていた光の掌で受け止め、腹部を膝で蹴り、昏倒させた。

例えば。

放たれた水の弾丸を無効化し、走りながら空中にて体を回転させ、

勢いに任せた回し蹴りを頭に当て、相手を昏倒させた。

そうして無数にいる人間を次々と倒していく中。  
それは起つた。

ドッ…

まるで地面の下で何かが揺れたような、地震のよつたな揺れ。  
それが何度も続していく中。

それに侵入者達は何事かと騒然となつたが、

(……一応は計画通りですね)

ヴァンは内心ほくそ笑みながら、まだ残る侵入者達を倒していく。

そして、時は過ぎ。

完全に気絶し、地面に伏している者。

気絶はしてはいけないが、満足に動けない者。

そんな彼らを目の前にし、ヴァンは息一つ乱さない形で悠然と立つていた。

「この学校を狙うのもいいですが、あなた達では力不足、役者不足もいいところです。修行して出直してきなさい」

くすくすと笑いながらそう呟くと、

「さてと……」

言つて振り返ると、小屋の中に入り、以前見たパネルを操作した。  
そして、現れた地下への階段に入ろうとする。

「待ちたまえ」

小屋の外から、聞き覚えのある男の声が聞こえた。

「まさか……」

ヴァンは、予想外の現実に少しばかり驚きながら、小屋の外に出て行った。

そして、小屋の中から出てきたヴァンと、その男は対峙する。

男は普段から見慣れている服を着ていたが、雰囲気はまるで違っていた。

普段の理事としての教師のような雰囲気ではなく、彼のそれはまるで……

「いや、まさか予想外と言いますか。あなたがタ力派、だつたんですか？ カルマさん」

「タ力派か……そう呼ばれるのは好ましくないのだがな」

そう呴いた彼、カルマは、普段の厳格とした理事としての表情ではなく、軍人としてのカルマとしての表情を顔に創り出していた。

「私もクラインも、この国のために第一にと考へて行動している。その方針が彼と違うまでの事だよ」

「その方針のせいでの、この国に被害が及ぶかもしれないとしても？」「一度同じ事を言わせないでもらおうか。私もこの国を第一にと考へていると言つたはずだ。この国に被害が及ぶような事になぞさせん」

言い終わると、その場に少しばかりの静寂が訪れ。

そして。

「……本題を言おう。私は君と思想の話をしにきたのではない。その奥にあるのだろう？ アレは」

「やはり、アレを捜しにこの学校に？」

「最初は見つけ出すだけの簡単な任務だと思っていた。だが、実際に来てみるとこの有様だ。隠しているのがクラインだとまでは分かつたが、そこから先は全く分からなかつた」

「強引に聞き出せりつとこつ手段も取れたのではありませんか？」

「私を見ぐびるな。思想が違うとはいえ、彼も私と同じ軍の一部だ。

同志相手にそりこつ手段は好まん」

「……」

「どうしたものかと思っていたが、お前達が動いてくれて非常に助かつたよ。その小屋も捜査範囲に含まれていたのだが、その中の装置までは見つける事ができなくてな」

「それはご苦労様です」

「……ヴァン・ガルド。軍所属である私からの命令だ。アレがある場所に案内してもらおう」

「断れば？」

「その時は兵器を私的な目的で隠しているとし、軍法会議にかける準備をしている」

「それは困りましたね」

ヴァンは苦笑すると、

「分かりました。では、案内しましよう」

「ほう？ 以外とあつけないな」

「小屋の中に、地下へ進む階段があります。その先にそれはあります」

「では、お前の言つた通り案内してもらおう」

「その前に、一つやる事がありますので、先に進んでいてもらえますか？」

「……何を企んでいる？」

「ボク達の考えた作戦、とでも言いましょうか。その最終段階です。安心してください。罠なんてものはありません。一本道ですか

ら」

「……分かつた。先に入つておこい」

言い終わると、カルマはヴァンの横を通り、小屋の中へ入つていった。

そして。

「さて。最後の仕上げですね」

ヴァンは、二人のやり取りを見ていた者達に目をやり、

「さて、皆さん。今晩はお疲れ様でしたね」

「お前……何者だ？」

意識のある侵入者の一人が呟く。

それに対して、ヴァンは、

「この学校の教師ですよ」

と一言述べた。

そして、

「まあ、今の事を見て分かったと思いますが。もしこの学校に手を  
出そうものなら、ヘタをしたら軍を敵に回す事になるので、やめて  
おいた方がいいですよ。もつとも……」

そこで一旦区切り、まるで子どもがいたずらに成功したような目  
つきになり。

「皆さんが捜していたアレ、とやつは、むつこの学校にありません  
けどね」

諸事情により、ちとばかり遅れてしまいました。  
連休中に少しばら進めようとは思つてゐるんですが、セレモニアルの気ま  
ぐれです。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

「どうやら、うまくいったようですね」  
周囲は電気も無く、薄暗い大きな空間。  
その中で、彼の声は遠く響き渡った。  
「向こうは大丈夫なようですが……サラサさん、そちらはどうですか？」

言いながら、彼は歩いてきた通路の方に向かい、声を放つ。

「クラインさん、こっちは大丈夫です」

声の主は、気により生成された大岩を、今まで進んできた通路に敷き詰めていたところだった。

「これで最後の一つですよ……ひとつ」

声と同時に、ズンッと周囲に重い揺れのようなものが響き渡る。

「よし。これで終わりです」

「い」苦労様です

「いえいえ、これも仕事ですから」

言つも、彼女の額には少量の汗が流れていた。

「それで、これからどうすんですか？」

「そうですね。この施設にこれを運ぶ作業は完了しましたし……後は頃合を見計らつてこの大岩を消す作業ですかね。その時はまた頼みますよ」

「はい、分かりました」

話が終わると、サラサはクラインの横に立ち、通路を通つて運んできた核を見上げる。

「にしても、こんな回りくどい真似をせずに、これを破棄するつて手段は無かつたんですか？」

「それは私達の間でも論議されたんですが……切り札は一つでも多く持つていた方がいいんですよ」

各国との接触のためにね、とクラインは付け加える。

「その件は軍内部で決まったようなものでしてね。私達の派閥でどうこうできる問題でもないんですよ」

「ふうん……なかなか面倒ですね」

「それが軍、及び国家というもののなんですよ」

「そして一息つくと、

「さて。それでは、あなたには私から指示するルートから外に出でもらいます。一応、この件は私に任せていますので。これの情報を複数の人間が持つ事は許されていないのでね」

「いえいえ、気遣いありがとうございます。これも安易にこれの情報外に漏らさないため、ですよね」

では、と言い残し、彼女はその場を後にした。

「これで一応は一段落、といったところですか」

国家が核という力を持つ。

それ自体は問題ない。

そうクライインは考える。

何故なら、力を持たない国家はいずれ他の国に力で押し潰されるのだから。

だがしかし、それを安易に使つてはならない。

何故なら、それ自体が諸刃の剣であり、ヘタをしたら自分達を傷つける事になりかねないのだから。

故に、この核という剣は、鞘として動く我々に抑えられた剣でなければいけない。

「……少し傲慢ですね。人を何万も殺傷する武器を保管する立場にある、とはいえ万人と同じ人である私達が、こんな考えをしなければいけないとは」

クライインは、自分の考えに自傷する。

だが。

それでも。

これは見えない剣として、管理する他ないのだ。

一度でも使用されれば、それは万人を殺傷する単なる殺戮兵器にしかならないのだから。

「まあ、そうならないためにも我々が頑張らないといけないのですけどね」

自分で放った独り言に、一人苦笑するクライン。

「さて、表舞台ではヴァンさんがこの騒ぎを収めていはばすですし、私もそろそろ学園に戻りますか」

言い残し、クラインはその場を後にした。

そこには、暗闇の中、物言わずに屈座る、一つ間違えば殺戮の兵器ともなる大きな剣のみが残った。

しばらく書かなくてすいませんでした。

今回は第32部分の舞台裏的な話を書かせていただきました。  
ただ、勢い的なものが削がれてしまい、短文になりましたが。

次の章は何を書こうか等は、特にまだ決めていません。

今までで色々立てていた？フラグを潰して完となるかもしません  
が、また気まぐれで書きたい衝動に駆られた時、また何か思いついた時に書くかもしれません。

そのために、この作品は完結ではなく、未完成作品として残してお  
くことをご容赦願います。

ただ、僕としては、一旦ここらで一区切り、続きをまた書くか別の  
世界を書くかは心境、気まぐれ次第です。  
感想や評価、意見等いただければ幸いです。

ヴァンが侵入者達に止めの一言を言った前後。

カルマは、それのある広い部屋にたどり着いていた。いや、それがあつた部屋、だった。

何故過去形なのか。

「一体、これは……どういう事だ？」

カルマの目の前に広がる光景。

それは、核の欠片も見当たらぬ、ただの空の空間だった。

周囲を見渡しても、壁、壁、壁。

捜そうとはするものの、何かを隠している場所も、影も形も無かつた。

「核は一体どこにある！？まさかヴァンが嘘を……」

「いえ、それはないですよ」

「！？」

後ろから聞こえる声。

カルマが振り向くと、そこには階段を下りてきたヴァンの姿があつた。

「核は確かにありましたよ。つこわつきまで、ね

「どういう……事だ？」

「それは……」

ヴァンは壁の一部に向かい、壁に触った。

すると操作パネルのようなものが開き、ヴァンがそれを操作する

と、何かが動くような音と振動が聞こえ、……

「クラインさんは、以前からこれをここから運び出す事を視野に入れていたようです」

そして、壁の一部が音を立てながら割れ……

「そして、彼の派閥で極秘にこれが作られた……」

そこに現れたのは……

「核はこの先です。別に進んでいたらいでもかまいませんよ？進めるものなら、ですか？」

核を運べる程の大きさの通路と、そこに敷き詰められた岩の塊だつた。

「な……っ」

「別に岩を除去してから進んでもかまいませんが、この先はクラインさんの息のかかったいくつかの施設に繋がっています。除去作業が済んだ頃には、施設のいずれかに、目立たないようにならんで隠蔽されているでしょうね」

「……」

「さて、どうしましようか？」

「……くそつ」

カルマはこまごましげに躊躇くと、封鎖されて居る岩の周囲を調べてみる。

だが、敷き詰められた岩はとてもではないが動かせる様子ではなく、また岩と岩の間を進もうとしても途中で崩れられてはたまつたものではなかった。

気による攻撃にしても、この封鎖がどれだけ続くかを考えると、カルマには作業をする気にはなれなかった。

「……仕方ない。」ここは我々の負けだな

そう言い放つと、カルマはヴァンを一警し、その横を通り過ぎ、階段を上つていぐ。

そして外にて。

「にしても、カルマさんがそちら側とは思いませんでしたが、これからどうするんです？目的は達せられなかつた訳ですが」

「私はこれを上層部に連絡する。そこから先は上層部の連絡次第だ」

「そうですか」

「それにしても、やつをまでこにいた連中はどうしたんだ？もう

「いなくなつてこるようだが、

「ああ、それはさつきですね……」

それはカルマが階段を下りてこる最中の事。

「眞さんが捜してこたアレ、とやじま、もひの学校にありませんからね」

「ど、どうこつだつ！？」

「ボクと眞さんが戦つてこる最中に、アレは他の場所に移しました。よつて、この学校をこくら捜しても、もひ金銀財宝は見当たらぬとこつ事ですね。とこつ訳で、そろそろ帰つてもうえませんか？皆さんも捕まりたくはないでしょ」

「……くわつ」

悪態をつきたながら、蜘蛛の子を散らすよつて周囲から離れていく始々。

それを見届けて、

「やれやれ。まあ、とつあえず今回の件は何とかなつたようですね。そつに、と、懷から携帯を出し、ボタンを押していく。何回かホールの音が鳴つた後、相手はそれに応じた。

「もしもし、クラインさん、聞こえますか？」

『ええ、聞こえますよ。ヴァン先生の方はどうですか？』

『つまくこきました。そちらはどうですか？』

『こつちも運び終わつて、今隠蔽の作業に入つてこる最中です』

「お互いに良好のようですね」

『ええ。それでは、そろそろ切りますね』

ブツツと音がして、電話が切れた。

「さて、ボクもカルマさんに追いつきませんとね」

「とこつ事があつたんですよ」

「成る程……」

カルマは、周囲を見渡しながら呟いた。

「ところで、これから先はどうなるんでしょうね、ボク達は。目的の物が無くなつた以上、ボク達はここには用は無い訳ですが」「いずれ上層部から、何らかの通達があるだろ?」

「そうですか……」

「私も学校の仕事があるのでな。そろそろ失礼する」

そう言い残し、カルマはその場を後にした。

「件が終わつた途端学校ですか。あの人も苦労してますねえ」

ヴァンは苦笑し、そして空を見上げた。

雲一つない、綺麗な夜の空。

（ボク達が住むこの世の中も、こんな風に綺麗だつたらいいんですね……）

ふとそう思いつつ、ヴァンもその場を後にし、去つていった。

こうして、核に関する事件は、茶番劇として幕を下ろした。

後日談。

その後、ヴァンや軍から要請された教師達面々はどうなつたかと言ふと……

「ヴァン先生、そこはどういう公式で解けばいいんですか?」

「えつと、ここはですね……」

想像以上に学校に潜伏している軍出身の教師達は多く、一気に教師達が抜けると、学校そのものが成り立たなくなるため、少しづつ本来の教師と交替していく事になつた。

ヴァンもその一人で、上からの通達があるまでは教師を続けていく事になつた。

もつとも、

（「いつ事も悪くないんですね」）  
「う思いつつも、ヴァンは」の日も教壇としての職業を続けていた。

……教師としての自分に慣れ、また生徒達との触れあいが好きになり、このまま軍人兼教師を続けていたいという軍人もいるらしい。そういう軍人の意見もあり、町中で有事が起こった際にすぐに出動できる教師兼軍人タイプの部隊を作つてもいいのではないか、という話もあつたりなかつたりしていた。

「ボクも、できるならそつとしていたいですねえ……」

「ザアノ君、何が言つたか?

「いえ、何でもありません。さて、それでは……」

ヴァンは取り繕いながら、授業を続けていく。

ちなみに、学校にまつわる宝の噂については、先日のヴァンの立ち回りが功をなして、綺麗さっぱり消えていた。

今日も、学校は平和です。

とうあえず、終わりました。

なんとなく急ぎの文章で、（いつもだろと言われれば〇ーＺですが）中身があまりないように思えますが、そこは簡便を。

次の章については、……構想は練つてますが、いつ、どんな風に書くかはまだ未確定です。

いつ次作を投稿できるかは分かりませんが、長い目で見てもらえると助かります。

意見や感想、評価等、いただけたら幸いです。

## 混沌気味で無駄に書いた的な番外編？

フラン「といつ訳で～！」

サラ「番外編、始めますね。進行は、私とフランで進めさせていた  
だきます」

ヴァン「といつか、何が、といつ訳で、この番外編といつのは何な  
んですか？」

フラン「えーと、……ちょっと待つてくださいね～。カンペカンペ  
……」

フラン「作者さんより、『この作品、最初は勢いで書いた。中身が  
薄い等の悔いはあるけど後悔はしてない。だけど、最近勢いってか  
スランプ？物語は浮かんでも文章に書く段階になるとつまらできな  
いから小休止中』だそうです」

ヴァン「それとこの番外編と、どう関係あるんですか？」

フラン「えっと、気分直しで試しに書いてみた、だそうです～」

サラ「ここでは、普段の世界では言えないメタな事や、あればの話  
ですけど物語の裏話な事も話してOKだそうです」

ヴァン「ふむ……でも、三人で行うんですか？人数が少ない気がし  
ますし、サラさんとフランさんも知らない事も多々あるんじゃない  
ですか？」

サラ「その点に関しては心配無用です～皆さん、出てきていいです  
よ～」

時雨「ふむ。やつと私の出番か」

シェル「私も忘れないでくださいね」

アリエル「ふう……やつと出てこられたわね」

フラン「という訳で、ヒロイン？の三人娘の登場で～す」

シェル「フランさん、ヒロインの後ろに？を付けないでもらえます  
か？」

フラン「だつて、この物語の作者さん、『恋とかした事ないからそ

うこうシーンは書き辛いんで簡便してください』つて土下座してましたし。今後も多分そういうのはないんじゃないですか?」

アリエル「あら、残念ね」

ヴァン「そう言いながら、何故僕を見るんですか?」

ヴァン以外の一同「……」

時雨「……まあ、それは放つておけないにしても一日は置いておくとして。これから何を話すのか?」

フラン「例えば、この作品が何故作られたとか?」

サラ「何故、と言つても、作者さんは『何でだつたつけ。夢で見たから? 何となく思いつきで?』『めん、忘れちまた、ハハハ』って笑いながら言つてましたけど」

ヴァン「……実も蓋もないですね」

サラ「現時点で三十四話まで書いてますけど、思いつきならどういう方向性で進んでどんな終わり方をするんでしょうか?」

フラン「作者もあまり考えてないかも……」

ヴァン「先の見えないフルマラソンみたいで笑えませんね」

フラン「作者は『熱のある間は次に何を書こうか妄想……いや想像するのを楽しんでた』って言つてたけど」

ヴァン「まあ、作者さんの熱とやらがまた復活する事を期待するとしましようか。でないと僕達も停滞したままですしね」

サラ「ですね。さて、次の話題ですが」

時雨「ちょっと、私達の事を忘れてないか?」

フラン「いえいえ、そんな事はないですよ。そういうえば、時雨さん達で思つた事があるんですけど」

時雨「ん? 何だ?」

フラン「私達の名前の由来って、どうやつて決められたんでしょうが」

サラ「ああ、それは樂屋で一人一人に言われたような」

フラン「ではまず私から。……と言つても本人曰く『思いついただけらしいけど』」

サラ「私なんて、『どこ』にでもあります名前だから、考えるのが楽だった』なんて言われたんですね。」

ヴァン「僕もフランさんと同じですね。まあ、蛮といつ日本名はある奪還屋のアニメから取つたそうですが。案外、ヴァンといつ名前もそこから取つたのかもしれませんね」

サラ「その漫画のキャラとヴァン先生のキャラって似てるんですか？」

ヴァン「いえ全く（即答）。時雨さん達はどうなんですか？」

時雨「私もなんとなくだそうだ。ただ、侍風の名前にしたかつたとか何とか」

シェル「私はヴァンさんと同じで、とあるアニメのキャラから名前を頂戴したそうです。被るのはアレだから、名前の一節を改変したそうですが」

アリエル「私もシェルと同じね。もつとも、私はアの文字しか合つてないのだけど。まあ、私の種族が吸血鬼、シェルがシスターとうのもあるんだから、そのアニメを知ってる人なら分かるんじゃないかしら」

サラ「アリエルさんの場合、性格もそのキャラと全く違つそうですね」

アリエル「ええ。オリジナルはもつと自由奔放な喋り方らしいわね」  
ヴァン「作者さんも、もつとオリジナルティな頭を持つた方がいいと思うんですけどね」

ガルム「俺もそう思うがなあ」

ヴァン「ガルム！？」

ガルム「そう構えるなつて。」  
「ではそういうのせじ法度だつて聞いてるぜ？」

ヴァン「……」

フラン「そうえいば、ガルムの場合はどうなの？」

ガルム「呼び捨てかよ……。まあいいか。俺は蛮達と同じだな、とあるアニメの敵役からヒントを頂戴したらしいぜ？ 確かフルメタル

……

フラン「それ以上はNGで～す」

ガルム「まあいいか。性格もそいつと同じように仕上げようとしたらしかつたがな」

サラ「でも、『自分で言つのもなんだけど、あまり残虐性がないなあ』って作者さんがボヤいてましたよ」

ガルム「そりや、作者のヤツがそういう風にこの作品を仕上げたいんだろ。名前のあるヤツは味方にしても敵にしても、悪い書き方はしたくないって言つてたぜ」

フラン「その辺は、作者の書き方つていうか考え方つてものだよね」  
ガルム「おつと、そろそろ次の仕事だ。そういう訳で、俺は一足先に抜けさせてもらうぜ」

サラ「……行っちゃいましたね」

フラン「まあ、気を取り直してと。他に出てない人はと……」

シヴァ「すいません、遅刻してしまいました」

グレイ「つたぐ、そんなに急がなくとも舞台は逃げなっての」

シヴァ「でも、でも！私達、一編でしか名前出てないんですよ～！」

?こんな機会でないと名前すらもう出ないかもしれないじゃないですか！（泣）

グレイ「わあーつたから泣くなつて、な？」

パルラ「過去回想でしか出てない人もいるんですけどね……（暗）」

ヴァン「……人が増えて、随分と混沌と化してきますねえ」

サラ「ところで、シヴァさんとグレイさんは名前の由来とかはどうなんですか？」

シヴァ＆グレイ「「作者の思いつき」「らしい」「だそうです」」

サラ「二人共ですか」

グレイ「ああ、頭にぱつと浮かんで、それを名前にしたららしいぜ」

フラン「作者、本当に行き当たりばつたりですね」

校長先生＆軍人風の男＆まだ出てない理事達 etc（自分達は、まだ名前すら出てないんですが……）

サラ「……数人が部屋の片隅で背景薄暗いまで体育座りして落ち込んでますが、この先でるかもしけないので、そう気を落とさないでください」

クライン「すいません、遅れました。場所はここで合ひているようですね」

カルマ「仕事が残っているのでね。手短に済ませたいのだが」

ヴァン「ああ、クラインさんにカルマさん。ご無沙汰します。十数日ぶりですか」

クライン「ヴァン先生、その節はどうも世話になりましたね」

ヴァン「いえいえ」

フラン「ところで、出てきて早々すみませんが、お一人の名前の由来は分かりますか？」

クライン「私もカルマも、思いつきで、だそうですね」

カルマ「まったく、少しほ由緒ある名前にしてもらいたかったのだがね」

ヴァン「まあまあ、そう言わす。ほら、お茶でもどうですか？」

クライン「ありがとうございます」

フラン「さて、あと名前付で出てない人はと……」

ノア「呼んだか？」

一同「殿下！？」

ノア「何、私も大会以降出ていないのでは。久々に顔を出すのも悪くない。」

サラ「ところで、ここに出てきたといつ事は、名前の由来等は……つていうか、変わってないですか？」

ノア「……ついさっきといふ、現在進行形で変え終わつたと言つていた」

サラ「……へ？」

ノア「自作小説を見直していたといふ、他の者と名前が間違えて被つていたりして、いた部分があつたらしくてな。今直したところらしい。まったく、その辺の管理もしつかりしてほしい所だな」

サラ「「」愁傷さまです……」

フラン「さて、皆の名前の由来も終わつたところだし、次何話す？つてへタするとつていうかしなくとも、このままいくと本作品の一部よりも長くならない！？」

ヴァン「それは、これだけ人数がいたら仕方ありませんよ」

サラ「本作も、これくらい長くなればいいんですけどね」

フラン「まあ、そこは作者の頭の引き出しに期待するとして、次は何を話そうか？」

サラ「次以降をどうするかじやないかしら？」

フラン「確かに。このまま打ち切りになるかもね」

作者「確かに心配やね」

サラ「そうね～。どうなるのかしら……って、作者！？」

作者「どうも」

ヴァン「それで、その作者さんがどうしてこんな場所に？」

作者「いやあ、番外編なんやから、別に自分が出てもいいと想つんやけどね。とりあえず作者権限で」

フラン「……何故関西弁？」

作者「いや、自分関西出身やし。ここ番外編やから、あとがきとは違つて普段のノリで話してもいいかな思つて」

サラ「それよりも、この後どうするのですか？作者さん」

作者「ええ。それが問題なんやな。他の作品のネタはあるけど中途半端なままで終わらせたくないし、いくつかフラグっぽいものを立ててるから、それを消化して、うまい事終わらせたいな」と

ヴァン「終わらせたい、という事は、話自体は終盤に向かつてるんですけど？」

作者「その前提が違うんやなこれが。確かにフラグを終わらせて一段落はさせたいけど、作品のネタはいつ思いつくか分からない。故に、いくら章の話が終わつても、作品自体は未完のままにしどこかなど。あとは、意欲が沸いたら中身の薄い部分にも追加つて形で手を加えていきたいなど」

「成る程。ところで、話のネタは何か思いついたんですか？」  
作者「とりあえず一つは。けど、内容をどうするかがまだ決まつたらんし、読者の皆さんにはなつがい目で見守つて欲しいなと」  
フラン「分かりました。」  
「分かりました」という訳で、いつになるか分からぬけど、とりあえず待つておいてくださいね」  
作者「自分のセリフを……まあいか。そんじや、次の作品を書き上げる熱ができるまで、もひとつ時間がかかるかもしけんけど、その辺簡便したつてな」

「アーティストたる命」

## 混沌気味で無駄に書いた的な番外編？（後書き）

長い事待たせて非常に申し訳ないつす。

作中でも述べている通り、熱が引いて書く意欲が失せたというか。

rn

まあ、いつかは完結ではない完成をしたいとは思つてますので、見  
守つてやってください。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

学校の近くにある、過去の遺物を置いてある博物館。その中で、今王国と共和国の関係者達が集まっていた。停戦となつた両国の、親善を含めた集いとなつていて。各々が和気藹々とした会話を繰り広げる中、一人の男女が過去の遺産を前にして語らつていた。

「ノア殿。戦もなくなり、我々の住む世界の平和になつたものですね」

「ああ。願うなら、この平穏がずっと續けばいいのだがな」「私もそれを切に願います」

二人は、ガラスの向こう側にある過去の遺産を、歩きながら鑑賞していく。

そんな中、

「レン様、ここにいらっしゃったのですか」

言いながら、一人のもとへと駆け寄つてくる一人の男がいた。

彼は一人の近くに寄ると、顔をしかめて、

「まったく、公共の場でも私達から離れないでくださいと言つたではありませんか」

「まったくとは私の台詞です。少しばし私も自由に動き回りたいのですよ」

「それは別に構いません。護衛も無しに一人で動き回られる事が問題だと言つているのです」

「分かりました分かりました。貴方も共に歩けばいいだけの話でしょう。それと」

レンと呼ばれた少女は、ノアの方に顔を向け、「王国の長の前で、はしたないですよ、ヘルク」

ヘルクと呼ばれた男は、ノアを一瞥すると、「これは、失礼を」

「いや、構わぬ。むしろ、」のよつた場においてもその変わらぬ忠誠心、見事であるぞ」

「はつ」

「これは忠誠といつより、むしろ過保護と言つた方が……」

ボソソと呟いたレンの呟きに、

「今何か言いましたか？レン様」

「いえ、何でもありません。ノア殿、続きを見ましょつかうむ」

二人は一緒に、遺産の見学を再開した。その光景を見て、ヘルクは、

「まったく、レン様にも困つたものだ」

一言愚痴を零しながら、一人の後を追つていった。

しばらく博物館で各自が時間を潰した後、ノアとレンは集まつた人々を前にして演説を行つていた。

「皆の者。今まで我らトルバ王国とハルバード共和国は長く戦争を行つていた。だが」

「それも過去の事。今はお互に手を取り合い、共存の道を取るべきだと、私達はそう思うのです」

その言葉を、集まつた人々清聴していた。

「お互いに禍根を残す者も中にはいるだろう。だが、それは私達のこれからとの国家の成長に免じて目を瞑つてもらいたい」

「私達が、互いに手を取り合えば、きっと両国ともいい国になるはずなのです」

その言葉を最後に、二人は口を閉じる。

しばらく続く沈黙。

だが。

パチパチパチパチ……

誰かの拍手が始まるとなり、それは小波のように広がり、やがて

広場全体に広がっていった。

それを見届けた二人は、互いに顔を合わせ、頷く。

「トルバ王国の王である私が来たのも、ハルバード共和国の代表者であるレン殿に参上してもらつたのも、そして各自に来てもらつたのも、この共存をより確かなものとするためである。忙しい中、感謝する」

「そして、トルバ王国と、ハルバード共和国の繁栄に、乾杯！」  
「……レン様。乾杯と言いますが、皆飲み物を持つておりませぬ」と突っ込むヘルク。

そんな掛け合いにどつと笑う観衆。

「はは、そうでしたわね」

ノアも、レンも、その場にいた観衆も、皆顔に笑みを浮かべていた。

それは、お互に平和を望む顔であり、それを皆信じて疑わなかつた。

そんな時。

「ちょっといいですか？」

突然、観衆の中から一人の男性が一人の前に進み出た。

博物館の作業員だろうか、その男は片手に鞄を持ち、作業用の服を着ていた。

「ノア様、一ついいですか？」

「何だ？ 申してみよ」

「ノア様とレン様は、両国の共存とやらを望んでいるんですね？」

「うむ」

「それには、一つ問題がありましてねえ」

「問題とな？ 何だ、言つてみるがいい」

「今この博物館に、それを望まない連中がいるのはご存知ですか？」

「と言つうと？」

「あの戦争の生き残りで、最も危険な地域にいた者達。ファルガの種、と呼ばれている者達です」

「ふむ……」

「彼らは望んでいるのですよ。あの戦争を。あの生と死の狭間の生きた心地を。戦いの中の、あの興奮を」「なるほど。よく分かった。私の知る者にもそういう呼ばれる者はいる。その者にも詳しく調査をさせよう」

「調査もいいんですがね。一番知らせないといけない情報があるんですよ」「何だ?」

「彼ら、ファルガの種と呼ばれる者達の残党が、すぐ近くに潜んでいるって情報ですよ」

「何つ!?」

男の言葉に反応したのは、ヘルクだった。

「レン様、お気をつけください。そやつらがどこに潜んでいるかも分かりません」

そう言つてヘルクはレンの前に出ると、男の近くに寄り、「情報提供、感謝する。して、その者達がどこにいるかは知つているのか?」

「ええ、もちろんです」

「なら、すぐに案内してくれ」

「その必要はありませんよ」

「何? どうしてだ?」

「それはですね……」

男は、言しながら鞄を開け、中から黒い銃を取り出した。そして銃口を上に向け、引き金を引く。

パララララッ!

硬い音を立て、弾が銃から発射される。そして。

「俺達は、テロリスト。名をシード。今よつここの場合は、我々シードが占拠した!」

その言葉と同時に、周囲にいた人々の何人かが懐から銃を出し、

構える。

「そういう事だ。観衆の中にも、少々同志を含ませておいた。怪我人を出したくなければ、動かない方がいいぞ。その男もだ」

「言われ、動こうとしたヘルクはその動きを止める。

「別に玉碎覚悟でもいいぜ？そこの姫様と王様が傷物になつてもいいならな」

「くつ……」

「まあ、そういう訳だ。あんた達はしばらく人質になつてもらおう

広場でそんな光景が広がる中、手洗い場から出てくる一人の影がいた。

「うわ～。これは大変ですね。急いで誰かに伝えないと……」

その影は、懐から通信機を出すと、唯一繋がる相手にかけた。

「クラインさん。私です、サラサです。今博物館がとんでもない事になつてます……」

通信機を片手に、サラサは見つからないように隠れながら話し続ける。

「見た感じ、王様とハルバード共和国の代表の人と、その他大勢の人人が人質になつてゐみたいですね」

「ええ！？無理です！相手が何人いるかも分からぬのに、制圧なんて無理ですよ～。とにかく、私は見つからないように偵察しますので、そちらからも誰か増援を送つてください」

それを最後にサラサは通信機を切ると、

「まったく、大会では赤い髪の男に襲撃されますし、ここに配属されて来てみればこんな事になりますし、本当に不運ですねえ～」

一人愚痴りながら、その場を後にした。

## 種の襲撃（後書き）

久々に書く気になり、きまぐれに書いてみました。

と言つても、まだまだ拙い文章ですが。

この後どうするのかあまり考えてはいませんが（待て）、構成を思  
いつき次第書いていこうと思います。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

空には雲一つなく、夏の近づいた爽やかな晴れの日。

ヴァンは今日もいつものように授業を行っていた。

「……といつ事で、トルバ戦争とハルバード王国は停戦へと落ち着いた訳なんですね」

ヴァンは今日歴史を教えていた。

彼の得意科目、というより教える専用科目は無い。どの分野も分からぬ事は無く、平均的に幅広く教えられるという事で、特定の科の先生が休んだり出て来られなかつたりする時にこつして臨時で教える事もある。

「その時に、王は先代から今の国王に変わったのですが……」

と、何も問題なく授業を進めている時、

『えー、こちら放送室より。ヴァン先生、クライン理事のところまでお願いします』

「……何やら呼ばれたようですね」

ヴァンは教室と、今自分が手に持っていたチョークと、書きかけの黒板に次々と視線を移し、

「仕方が無いですね。皆さん、一時自習とします。もし授業までに戻らない時は、各自丁度いいところまで進めておいてください」

そう言い残し、ヴァンはクラインのいる理事室へと向かった。

しばらくして、理事の部屋に入ったヴァン。

そこには、クラインが椅子に座つて待つていた。

「クラインさん、今日はどうこつた用件ですか？」

二人に話を聞こうとすると、まずクラインが口を開けた。

「まず起こっている事を話しましょう。近くにある博物館がテロ組

織に占拠されました」

「テロ組織？」

「ええ」

「それがボクと、どういった関係が？」

「そこには偶然か狙つたものなのか、我が国の王とハルバード共和国の代表の方も來ていたようなのです」

「それは……なんといか。ですが、それは軍に任せた方がいいのでは？」

「私としてもそうしたいのですが。入り口は組織の人間に固められていて、簡単には突破できず、難航しています。更に言うなら、彼らはある物を人質と引き換えに要求しています」

「ある物？」

「彼らは、一つの都市を破壊できる兵器、と言つてはいるようですね」

その言葉を聞いた途端、ヴァンの脳裏にあるものが浮かんだ。

少し前に、彼が協力してこの学園から運び出した核兵器。

「……おそらくヴァン先生もその考えに至つてていると思いますが、彼らの狙いは核です。そして運がいいのか悪いのか……」

クラインはそこで一時口を閉じると、

「彼らの足元に、それは眠っています」

「……ひょつとして、核を運び出した先といつのは……」

「ええ、今事件の起こつている博物館です。まったく、私達軍の関係者がいながらふがいない事です」

「それで、ボクに一体どうしろと？」

「中に潜んでいる知り合いに情報を渡してもらっています。現在人質とテロ組織の人員は、広場にいるようです。そこを奇襲してもらいたいのです。なるべく被害を出さずにといつ条件付きで。できますか？」

「……無理ですね」

「理由は？」

「まず奇襲の件ですが、先程クラインさんが入り口は固められていと言いましたよね？秘密の通路でもない限り、それはほぼ不可能

に近いです」

「また、被害を出さずに」という事ですが、ボクの能力は各種属性を平均的に扱えるという事と、無効化能力です。何かから誰かを守るという能力ではありますん」

「では、その一つの件を解決できる方法がある、と言つたら?」

「それは?」

「奇襲に関しては、前に核を運び出した通路を使います。これなら学園側から博物館内部への戦力の秘密裏な移動が可能になります」

「また、博物館にいる軍関係者は、守りに適した者です。彼女を人質を守るディフェンス、君をオフェンスとして行動させましょう。それなら問題ないでしょ?」

「その関係者は、自分でなく、周りを守る事もできるのですか?」

「守りに関しては、トップクラスです。ただ、攻守共には動く事ができないので、彼女から増援要請を指定されたんですがね」

「分かりました。引き受けましょ。ただし、相手は実弾武器を所持している可能性があります。できればオフェンス側の人数を増やしたいのですが」

「分かりました。ヴァン先生の言われる人を呼び出しましょ。誰です?」

「ボクと面識のある人達で、ボクが知る限りボクと同等に強いと思える方々です。名前は……」

「なるほど。分かりました。では早速放送で流してもらいましょ」「その言葉を最後に、クラインは部屋の外へ出ようとした。

その背中に、ヴァンは一つ疑問に思つた事を口にした。

「最後に一つ。ボクにその通路を教えてもいいのですか?核の事は秘密なんでしょう?」

「問題ありません。この事を話した時点での施設は用済みです。別の場所に移すだけですから」

そうして、二度目の放送が校内に流れ。

「ふむ。学校の敷地内部にこのような場所があつたとは」  
「フフフ。久々の出番ね。わくわくするわ」  
「わくわくするものではないですよ、アリエル。今から行うのはテ  
ロ組織に対する奇襲なんですから」

校舎の片隅にある廃屋の中の階段を下つた先の部屋。

そこには、ヴァン、時雨、アリエル、シェルの四人がいた。  
「にしてもすいませんね、三人共。授業中だというのに呼び出した  
りして」

「いえ。国家の一大事ともなれば、急いで解決しなければいけない。  
それで、……」

時雨は一団口を開けざと、田の前にある大岩の群れを見上げた。  
通路には以前敷き詰められた岩の数々。

「これはどうしたらいいのか? ヴァン殿」  
「……何とかするとクラインさんは言つっていたのですがねえ」  
苦笑いを浮かべるヴァン。

「すいません、その大岩を消去するのを忘れていました」  
とクラインが述べていたのは、ヴァンはあえて言わない事にした。  
大岩の前途方に暮れていると、何やら通路の向こう側から音が  
聞こえ始めた。

それは岩と岩の擦れるような音で、それは次第にヴァン達の方へ  
向かつてくる。

そして、音がよく聞こえるようになつた時、目の前の岩が砂と化  
して崩れ去り、  
「すいません、少し時間がかかつてしましました。あなた達が増援  
さんですか?」

岩の向こうから、一人の女性が現れた。

「あなたが、軍の関係者ですか？」

「はいっ。つい最近あの博物館に警備員として配属されていた者です。サラサ・バナーと言います。サラサとお呼びください」

「自己紹介もいいですが、事態は急ぎます。向かいながら話ましょう」

「そうですね。分かりました」

いりして、合流した五人は博物館に向かって走り出した。

「それにしても、驚きましたよ。博物館の警備に配属された時は何事かと思いましたが、まさかあの場所に核が隠されていたなんて。クラインさんも、私に教えてくれてもいいのに……」

「色々事情があると思いますよ。あまり知られると困る代物ですし」

「ははっ、そうですね」

「それより、さっきの岩を消した事ですが、あれはサラサさんの能力ですか？」

「はいっ。私の能力は土と鉄属性に長けていて、何も無いところから土や砂鉄を作り出したり、消去する事ができるんです」

「という事は、あの岩を置いたのもあなただったんですか？」

「そうです。どうやら、あの時はお互に知らない間に協力していたみたいですね」

「二人共、話しているところ悪いのだが、そろそろのようだ」  
時雨の声で前方を見ると、出口が見えてきた。

「そのようですね。では、ボクと時雨さんとアリエルさんとショルさんで奇襲をかけますので、サラサさんは人質を守つてください」  
「承知した」

「分かりました」

「分かつたわ」

「了解です」

ヴァンの言葉に四人がそれぞれ反応し、五人は博物館内部へと侵

入  
し  
た。

## 奇襲（前編）（仮）（後書き）

人間熱が入るというか一日領域に入ると書けるものなんですね。  
という訳で、続きをまた書きました。

一時というか長期間連載を止めていたため、まだ見てくれている人がいるかどうか心配でしたが、ユニーク人數がひとつ増えた事には驚きもし、また嬉しくも思いました。

見てくれる人がいるというのは、作者にとつて何よりの（書くうえでの）栄養剤だというのを実感しました。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

## 侵入（仮）

長い通路を抜けた先は、核の置かれている大きな空間だった。その場所に置かれている核を見て、ヴァンはそれに改めて畏怖の思いを感じ、時雨とアリエルとシェルは興味津々といった感じで核を眺めた。

「これは何だ？ヴァン殿」

「話すと長くなるのでできませんが、都市一つ一つを破壊できる兵器、だとでも言つておきましょうか」

「確かに、これだけ大きいと破壊力も相当なものになりそうですね」「三人とも、今日はこれの見学に来たんじゃないんですから、先を急ぎますよ。サラサさん、道案内をお願いします」

「はい、分かりました」

そうして、五人は核の置かれている空間を抜け、隅にあつた細い道へと進んでいった。

しばらく道を進むと、道が途切れ、行き止まりに出くわした。

「サラサさん、行き止まりのようですが？」

「ここはですね……少し待つてください」

そう言つと、サラサは壁の一部を押した。

すると、そこの壁が外れ、中から複数の操作パネルのようなもののが出てきた。

それをサラサが順番に押していくと、目の前の壁が開き、どこかの廊下のような場所に出た。

「皆さん、ここが博物館の内部です。少し待つてくださいね」

五人が廊下に出た後、サラサが廊下の壁の一部に触ると、そこが外れ、さつきと同じように中から複数の操作パネルのようなものが出てきた。

壁が開いた時と同じようにパネルを操作すると、目の前の通路が横から出てきた壁に遮断され、数秒としないうちにその場所は壁の一部と見分けがつかないようになつた。

「終わりました」。一応、コレは極秘なので、内緒にしていてくださいね」

「さて、博物館の内部には入り込めましたが、これからどうしますか？」

「あら、ヴァン。どうするか考えてなかつたのかしら？」

「ボクと時雨さんとアリエルさんとシェルさんでテロリストを抑えに、サラサさんが人質を守るという方針はあつたんですが、細かいところまではまだ決めてませんでしたね」

「一気にテロリスト達を襲うという選択肢はないのか？」

「それだと、彼らが人質を使う危険性も出でてきます。人質を使われるとボク達も手出しが……」

「わ、ちょっと隠れてください……」

突然のサラサの声に、ヴァン達は通路の角に隠れた。

その後、通路の先から銃を持った男が歩いてきた。

ヴァン達が息を殺してじつとしていると、彼はその場を通り過ぎ去つていった。

「言ひのを忘れてましたが、各通路には見張りがいて、こうして時々巡回に来るんです」

「それを先に言つてください」

「はは、すいません」

「それで、他に何か分かっている事は無いですか？」

「えつと、博物館の入り口に数人見張りがついてます。人質はトルバ王国の王様とハルバート共和国の代表の方と、その他にも大勢の方がいるようです。彼らを囮うように銃器を持つたテロリスト達が立っています」

「説明ありがとうございます。……さて、どうしたものでしょか」

ヴァンはしばらく考へると、

「サラサさん、聞きたい事があるのでですが」

「はい、なんですか？」

「先程見回りが来ましたが、人質がいるのに何故見回る必要があるんですか？もしかしてさっきの場所以外に窓からの潜入口があるとか」

「いえ。残念ながら、この館内は入り口以外からは入る事のできない、ほぼ密室のような状態です。なので、おそらくはまだいるかもしない見物客を見つけるためだと思います」

「という事は、今この場でボク達は、見つかっても見物客としか見られない訳ですね」

「そうなりますね」

そこまで問答を終えると、ヴァンは皆を見回し、

「皆さん。一つ方法があります。ただ、これは少し皆さんにとって危険な賭けになりますが、いいですか？」

「どんな方法なのだ？ヴァン殿」

時雨の声が代表とでもいうべきなのか、他の三人からも否定的な言葉はでなかつた。

「……皆さんの態度を肯定と受け取ります。では、これからその方法を言います。それは……」

ヴァンは、それから四人に自分の考えた方法を話した。

場所は代わり、人質のいる広間。

そこには複数のテロリスト達と、人質となつた人間達がいた。

「王国からの返事はまだか？」

リーダーと見られる男が、近くにいた部下の一人に声をかける。

「はい。向こうに連絡はしましたが、返答はまだ来ていません」

「そうか……」

彼は短く返事を返すと、その場にいる人質を見渡した。

「我々が本気だという証拠を見せる必要があるかもしけんな」

男はそう呟くと、人質達に向かい、

「諸君。我々はお前達の国に要求を出した。だが、その返事は一向に返つてこない。故に、我々が本氣であるという証拠を見せるべきだと俺は思った」

「ど、どうするつもりなんだ！？」

人質の一人が男の言葉に応じる。

「何、簡単な事だ。おい、誰でもいいから俺の目の前に人質を連れて来い」

男に命令された部下が、人質の一人を男の前に連れてきた。

「……おい、何をするつもりなんだ？」

「簡単な事だ」

男は表情を変えず、

「王国からの返事が無い場合、三十分おきに見せしめとして一人ずつ殺していく」

その言葉に捕らわれている一同はざわめき、

「待て、待つてくれ！」

男の前に連れられた人質は叫び喚くも、

「これも俺達の目的の礎となる事だ。名誉に思え」

男は、平然とそう言つてのけた。

そして、

「待て！」

言いながら、人質の中から一人の男性が立ち上がった。

「誰だ？」

「トルバの現国王、ノアだ」

その言葉に、周囲はもちろん、テロリスト達も驚きの顔を隠せない。

もつとも、人質達は何故と、テロリスト達は国王の出現とに驚いた訳だが。

リーダーの男も驚きを隠せなかつたが、他のテロリストより早く冷静になり、

「その国王様が一体何の用だ？代わりに死んでくれるのか？」「薄い笑いを浮かべながらそう言うと、ノアも笑いながら、「できればそれは勘弁願いたいな」と言った。

男は笑いを崩さず、

「じゃあ、何故出てきた？」

その言葉に、ノアは顔から笑みを消し、

「逆に聞こう。何故このような事をする？」

「このような事？」

「人質を取り、それを盾にし、国に私ですら場所の知らぬ兵器の在り処を聞こうとする。そのような無理難題を押し付け、あげくの果てに見せしめだと？それだけの事をする理由が、主らのやつている事にあるというのか！？」

「分からぬ」

「分からぬ……？」

「狂気な奴、戦場で味わった興奮を味わいたい奴、生きた心地を味わいたい奴。俺達の集まつた理由はてんてバラバラさ。俺はもつと複雑だが、その辺は省略させてもらひ」

男はそこで一度言葉を区切り、

「だが、する事は皆一緒さ。世界を相手に暴れたい。世界をブツ壊したい。それだけさ。だから人を殺すのに理由はいらない。兵器を欲しいのは今言つた事をやるのに必要だからって理由だがな」

「……狂つている」

「かもしけないな。だが、俺達にとつては普通なのさ」

言い終わると、男は銃を構え、連れてきた人質に向か、

「では、これより刑を執行する」

そして男の指先に力が籠り、

「リーダー、隠れていた観客達を捕まえてきました！」

あらぬ方向から声が聞こえ、男の指から力が抜けた。

「ん？まだ残つてたのか」

男は銃を構えたまま、部下の連れて来た人間達の方へと視線を向ける。

それはノアも同様で、

(……ヴァン！？)

心に生まれた驚きはあつたが、それをノアは何とか制してみせた。  
(あれは確か大会にいた者？何故ここに？)

そんなノアの心情とは別に、舞台の時間は進んでいく。

## 侵入（仮）（後書き）

構成としてはうまく（？）書いたつもりですが、間違つてたらすいません。

テロ組織の目的理由はメチャクチャですが、そこは常人には分からぬものがあるとして簡便してくだけ。rz  
感想や意見、評価などいただけたら幸いです。

## 奇襲（中編）（仮）

「スーツの男に東洋の女に金髪の女に修道女に……最後のはこの館の警備員か？どんな組み合わせだ？」

呟きながらも、銃を人質に向けていた男は部下に、新しくこの場に来たヴァン達を人質のいる場所に連れて行くように指示を出した。それに従い、ヴァン達は人質の集まっている場所に連れていかれた。

「ここに座れ。その王様もだ。これからはじつとしている事だな」言われ、その場に座るヴァン達とノア。

そして。

「お久しぶりです、ノア様」

ヴァンはテロリスト達に聞こえないように小声でノアに声をかけた。

「うむ。お前とは大会以降だな。息災か？」

「はい」

「しかし、お前はどうしてここにいる？私の方でも気になつて独自に調べてみたが、お前は今は学校の先生をしているはずだが？」

「詳しい事は後で。ボク達はこれから行動を起こしますので、ノア様はなるべく姿勢を低くしていいださい。それと皆さん、できれば全員生きたまま倒してください」

そう言って、ヴァンは銃を構えている男とその先にいる人質に視線を向けた。

「とんだ邪魔が入つたが、再開だ」

言つとリーダー格の男は、人質に向けている銃の引き金を押さえている指に力を入れる。

「そういえば、さつきの奴はこの国の王様だと言つたな。次はそいつにするか。その方が国も慌てて動くだろ？」

言いながらも、少しづつ引き金が指の力に負けて押されていき、そして。

その場の全員の視線が狙われている人質に集中している、その時。

「今です！」

人質の集団の中から、剣の柄のような物が投擲された。それは銃に当たり、銃口から発射された弾は狙いを外れ、天井に向かつて発射された。

同時に、人質の中から複数人の人間が、さつき連れてこられたヴァン達が人質の群れの中から弾かれるように動きだした。

「う、撃て！」

人質の近くにいたテロリストの一人が喚き、それに応じて人質を囲っていたテロリスト達が人質に向かつて銃を撃つ。

しかし、

「無駄ですっ！」

人質の集団の中にいたサラサが声と同時に手を前に向けると、発射された銃弾は、全て人質に届く前に、空中に出現した砂の塊によつて止められていく。

「目測ができるればいる程、私の能力は向上します！今の私の砂は、銃弾すら防ぎますよっ！」

サラサが得意げに、顔に笑みを浮かべながら叫ぶ。

その間にも、他の舞台は進む。

座っている人質だけでなく、テロリスト達に向かつてヴァン達にも銃弾が走る。

しかし。

例えば時雨。

彼女は身に当たる弾丸のみを、隠し持っていた短刀で弾く。

そしてテロリストに近づくと、柄で、短刀の峰でと、殺傷能力の無い部分で彼らの体を打ち、昏倒させていく。

「刃物であれば刀でなくとも自身の技を損なう道理は無い！」

そして周囲のテロリスト達を倒していく中、倒れたテロリストに視線を向け、刹那の時。

「私には貴様らを裁く権利も義務もない。貴様らを裁くのは法廷だ」呟いたあと、時雨は残るテロリスト達に短刀を構えて向かっていく。

例えばシェル。

「くそつ！」

テロリストが銃を構え、撃とうとするも、彼女は縦横無尽に走り、なかなか狙いが定まらない。

そして、

「はあつ！」

声と同時にシェルは手に構えた八本の剣を投げる。白い光を残像に残し、それらはテロリスト達に刺さっていく。呻き声を上げながら、倒れていくテロリスト達。

その光景を見ながら、

「私は神に仕える身、安易に殺生は求めません。故に急所は外しています。あなた達にそれを求めるのはその権力にある者か、あるいは神のみです」

そう言い残し、シェルは袖から新たな柄を両手に構えて、意識しその先から白く光る剣を出現させ、まだ残るテロリスト達に目を向ける。

例えばアリエル。

「撃て！」

一人の声を待つまでもなく、複数のテロリスト達が銃を彼女に向けて銃弾を発射する。

それらは身動き一つしないアリエルの体に吸い込まれていき、彼女は膝と腰を曲げ、体をくの時に歪め、前方に揺れた。

だが、それは倒れる前の動作ではなく。

膝を曲げたアリエルは、膝を伸ばし、地面を蹴り、その勢いそのままにテロリスト達に向かつて突進していく。

「なあつ！？」

常人なら死んでいて当たり前なのに、その常識が覆されている光景。

それを目の当たりにしながらもテロリスト達は撃ち続けるが、銃弾が当たったはずの彼女はそれに動じる事なくテロリスト達に接近し、伸ばした爪でテロリスト達を薙いでいく。

斬られたテロリスト達は訳が分からぬままの表情で、意識を無くし、倒れしていく。

「私は普通の人間とは違う、高貴なる吸血鬼なのよ。その程度じゃ痛い事はあつても死にはしないわ」

服が破れるのは嫌だけど、と呟くアリエル。

そして、倒れ、意識の無いテロリスト達を見下げるながら、「聞こえてないでしようけど、心配無用よ？殺してないから。殺した方が楽だけど、後でヴァン達に怒られる方が面倒よ」

愚痴つぽく呟いて、アリエルは次の獲物に狙いを定め、銃弾をものとせずに向かつていく。

例えば。

ヴァン達が戦っている時でも、人質に向かう銃弾や流れ弾が存在する。

そういう物をサラサは砂を操作して処理していた。

そんな中、一発の銃弾がサラサの目を逃れて人質の方に飛んでいく。

「うわっ、ちょっと待って！」

気づいたサラサが能力を使おうとするも、銃弾が人質に向かう速

度の方が速く、人質の一人に銃弾が吸い込まれる。

彼女がそれを確信した時。

一人の影が人質と銃弾の間に割り込んだ。

銃弾はその者に吸い込まれたが、その者は倒れる事はなかつた。

「我が体、鉄の城。動かざること山の如し！」

そう叫んだ影は砂と砂鉄を纏つているのか、全身が茶黒い塊に覆われていた。

「この程度、土塊と化した私には無駄だ」

そう言い放つた者はサラサの方に顔の部分を向け、

「女よ。あなたの立場は分からないが、少なくとも敵ではない。ならば、レン様の護衛騎士の一人であるこのヘルク、助太刀しよう」

「あ、ありがとうございます」

お互に言葉を交わし、サラサとヘルクは飛び交う銃弾から人質を守るため、防御という名の奮闘を続けていく。

そしてヴァン。

今彼は、リーダー格の男と対峙していた。

「お前達、何者だ？」

男の問い、ヴァンは、

「ボクは普段は教師をしています。現在は軍に籍を置いていますけどね。元の職業は皆バラバラです」

「教師だと……？ ふざけるなっ！！」

「ふざけてなどいません。真実です」

「……で、その教師様が一体俺達に何の恨みがあつてこんな事をする？」

「恨みはありません。軍からあなた達を制圧するように言われたので来たまでです。もつとも、恨みの部分を強いて言つなら、平穏な日常を壊された恨み、でしううか」

「ハハハ、そうかよ」

男は薄く笑いながらヴァンを見つめ、

「じゃあ死ね」

一言言つて、銃を構え、ヴァンに向けて撃つた。

その銃弾はそのまま一直線にヴァンに向かつて飛んでいき……。

ヴァンはそれを少し体を動かすだけの動作でその銃弾をかわした。

「何つ！？」

「簡単な事です。貴方の目線と銃口の向きで撃たれる場所を把握する。後は引き金を引くタイミングでその場所から体を動かせば、弾が当たる道理はありません」

「なるほど、銃は効かないって事か。なら……」

男は言いながら、右手を構え、集中する。

そして、

「これならどうだよ！」

男は突進し、ヴァンに向かつて指先を突き出し、刺すよくな仕草で右手を動かす。

そしてヴァンの体に右手が突き刺さる、その寸前。その右手はヴァンの手によって押さえられていた。

「な……んで？ 硬質化された俺の手は、鉄でも貫くのに……？」

「残念ですね。ボクも、貴方が集中するのと同時に、能力を発動させてもらいました」

そう言うヴァンの体からは、白い靄のような光が溢れ出していた。

「ボクの能力は、能力者相手には絶対の力を發揮するんですよ」

「……分かつてるよ。能力を無効化するんだろう？ 本当に反則気味な力だぜ」

「何故知ってるんですか？」

「ファルガ地域にいた奴で、あんたの名前と二つ名とその能力を知らない奴はない。だろ？ 白髪鬼さんよ」

男は顔に薄笑いを浮かべながら呟いた。

「なるほど」

男はしばらく小さく笑っていたが、ふとその笑いを止め、

「……どうしてだ？」

「何がですか」

「どうしてあんたがここに立つてこいつして俺の邪魔をするー。」

男は怒鳴り声を上げた。

その顔は怒つているようで、だがどこか助けを求めるような雰囲気を出していた。

「あんただつて、見たはずだ！戦争で友人が、仲間が、戦場で命を落とし、散つていく様を！それでも俺は信じ続けた！俺達が勝てば、散つていつた連中も浮かばれるつてな。だが、どうだ？国同士が勝手に戦争を止めて、その結果がこれだ！俺達の仲間は無駄に命を散らしていつただけになつた。だから俺はこの世界に復讐を求めた。皆を、世界を俺と同じようにしてやろうつてな。その心、同じ戦場にいたあんたなら理解できるはずだ！なのに、あんたは何で今ここに立つてる？何で俺の邪魔をする！？」

「……」

ヴァンは黙つて男の言葉を聞いていた。

男の感情が、ヴァンにも理解できたから。  
もしかしたら。

もし、自分を助けてくれる人間達がいなければ、自分もこの男と同じようになつていたかもしれないと思つたから。

「どうなんだよ、ヴァン・ガルド！」

ヴァンはしばらく沈黙を貫いた後、男の首に手刀を打つた。

その一撃に、男は倒れる。

「なん……でだよ……」

最後に言葉を放ちながら、男は意識を無くした。

「……ボクにも、理解できますよ。貴方の心情が。貴方の過去は確かにボクの過去と同じです。そして貴方の今の姿は、例えるなら運命の違つた今のボクの姿です」

倒れた男に向かつて、ヴァンは言葉を紡ぐ。

「あの人達と会つていなければ、もしかしたら貴方になつていたのはボクの方かもしませんからね」

そう言つて、ヴァンは残つたテロリスト達を殲滅しつつある彼女達に視線を向けた。

「だからこそ、ボクは貴方と同じ道を行く訳にはいかないんですよ。

今のボクを見てくれているあの人達のためにもね」

## 奇襲（中編）（仮）（後書き）

休日暇だったので、この話も書き上げました。  
いつもより長かったので分けよつかなと思ったのですが、とりあえず現状はこのままで。

意見や感想、評価等、いただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5220v/>

---

無能力な先生

2011年11月23日20時47分発行